

# 大 横 遺 跡

## 第1次発掘調査報告書

1988

山 形 県  
山形県教育委員会

おお だて  
大 樵 遺 跡

第1次発掘調査報告書

昭和63年3月

山 形 県  
山形県教育委員会

巻頭図版 1



S A 10柵木列 北東角（昭和61年度東から）



S A 10柵木列 北東角（昭和61年度北から）

巻頭図版 2



D 区遺構完掘状況（北から）



S E 205内 R W372出土状況

巻頭図版 3



青磁碗（連弁文）



青磁碗（飛雲・草花文）

卷頭図版 4



青磁皿



青磁皿



青磁（底部）

卷頭図版 5



白磁・青白磁



漆器椀



漆器椀

## 序

本報告書は、山形県教育委員会が、山形県農林水産部の委託を受けて昭和62年度に実施した、県営ほ場整備事業月光川左岸地区にかかる「大橋遺跡」の緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

大橋遺跡は、以前から、遊佐駅・遊佐荘あるいは川北冠者忠衡の居館等いろいろな考えが示されてきました。今回の調査では、掘立柱建物跡・井戸跡・柵木列をはじめ、青磁・白磁や珠洲焼・瀬戸焼等の日本海交易によってもたらされた多くの遺物が出土しました。これまでとなく不明な点の多かった中世の世界に、新たな光をあてる好資料と言っていいでしょう。

これらの文化遺産は、私達の祖先が語りかけてくれるかけがえのない歴史の証言者です。この遺産を保護し、未来に継承することは、私達の大切な責務といえます。

近年、県民福祉・県経済の向上を目的とした開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財との関わりも増加の傾向にあります。これらの間には、今なお多くの問題が介在していることは、現実問題として、おおきな課題を与えられていることになります。山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」という立場から、一つづつ問題を解決し、今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存です。

終わりに、本調査に御協力いただきました山形県農林水産部・庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所・庄内教育事務所・遊佐町・遊佐町教育委員会・月光川土地改良区・遊佐町大橋地区・及び地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護・普及の一助となれば幸いです。

昭和63年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

## 例　　言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け、昭和62年度に実施した「昭和62年度県営ほ場整備事業（月光川左岸地区）」に係る「大楯遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査期間は、昭和62年4月15日～同年8月7日の延べ74日間である。
- 3 調査については、遊佐町教育委員会・月光川土地改良区・最上川右岸土地改良事務所の関係機関、並びに地元大楯地区及び八日町地区・吉出地区の方々から協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治（山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査）

同 上 佐藤 庄一（ 同 埋蔵文化財係長）

同 上 野尻 侃（ 同 主任技師）

現場主任 伊藤 邦弘（ 同 署託）

事務局 事務局長 後藤 茂彌（ 同 課長）

事務局補佐 土門 紹穂（ 同 課長補佐）

事務局員 菅原 徳嘉・佐藤 大治・長谷部恵子

氏家 修一・高橋 春雄

- 5 本報告書の作成は伊藤邦弘が担当・執筆し、挿図・図版・表の作成補助には、篠原光子、大久保良重、阿部正子、井上みさ子、栗原皎子、町田厚子、塩野明子、升谷繁子、高崎くに子、吉田直子、澤田恵美子、鈴木くに子、須藤ゆり子があたった。本書の編集は、阿部明彦・伊藤邦弘が担当し全体については、佐々木洋治が総括した。

- 6 出土した陶磁器類については、吉岡康暢氏・小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）から、墨書き板状品の赤外線写真撮影・解読については、平川 南氏（国立歴史民俗博物館）から御教授を得た。

- 7 出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

## 凡 例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S A ……柵木列	S B ……建物跡	S E ……井戸跡
S K ……土 壤	S D ……溝 跡	E A ……柵木
E B ……柱 穴	E P ……小 穴	S X ……性格不明遺構

2 遺構番号は、基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲し、昭和61年度分布調査に続き101番からとした。

3 遺物に付した記号は下記のとおりである。

R P ……土器・土製品	R W ……木製品	R Q ……石製品	R M ……金属製品
--------------	-----------	-----------	------------

4 遺物番号は、出土順にしたがって付し、昭和61年度分布調査に続き301番からとした。

5 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡全体図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、磁北より14°30'西に傾いている。
- (3) 建物跡の主軸方向は、南北棟を桁行で、東西棟を梁行で測定した。
- (4) 遺構実測図は、1/40・1/120他の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (5) 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土についてはアラビア数字で表した。
- (6) 遺物実測図・拓影図・遺物図版は原則的に1/2・1/3で採録し、実測図については各々にスケールを付した。
- (7) 木製品実測図中の網点は断面形・墨痕・炭化を表し、砂目は漆を表した。
- (8) 遺物観察表中の計測値欄で、( )内の数値は図上復元による推計値あるいは残存値を示している。
- (9) 基本層序及び遺構覆土の色調・遺物観察表中の色調の記載については、昭和45年度版農林省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。
- (10) 本書中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とともに共通したものとした。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
第I章 調査の経緯	第IV章 遺 物
1 調査に至る経過.....	1 遺物の分布.....
2 調査の経過.....	2 かわらけ.....
第II章 遺跡の立地と環境	3 陶 器.....
1 地理的環境.....	4 青 磁.....
2 歴史的環境.....	5 白 磁.....
3 遺跡の層序.....	6 青白磁.....
第III章 遺 構	7 木製品.....
1 遺構の分布.....	8 金属製品.....
2 建物跡.....	9 古 錢.....
3 柵木列.....	10 土製品.....
4 井戸跡.....	11 石製品.....
5 土 壤.....	第V章 まとめ
6 溝 跡.....	1 遺構について.....
7 性格不明遺構.....	2 遺物について.....
	3 今後の課題.....
付表目次	
表1 出土遺物点数表.....	13
表2 出出土器・陶磁器観察表（1）.....	39
表3 出土陶磁器観察表（2）.....	40
表4 出土陶磁器観察表（3）.....	41
表5 出土金属製品観察表.....	41
表6 出土土製品・石製品観察表.....	41
表7 出土木製品観察表.....	42
表8 出土古錢一覧表.....	43

## 挿 図 目 次

第1図	大樋遺跡位置図	3
第2図	遺跡全体図	4
第3図	層序図	4
第4図	S B250建物跡	7
第5図	S B270・251建物跡	9
第6図	S E171・186 205・338井戸跡	10
第7図	SK176・180 269・340・368土壤	11
第8図	かわらけ・陶器実測図(1)	19
第9図	陶器実測図(2)	20
第10図	陶器実測図(3)	21
第11図	陶器実測図(4)	22
第12図	陶器実測図(5)	23
第13図	陶器・磁器実測図(6)	24

## 図 版

巻頭図版 1	S A10柵木列北東角(昭和61年度)
巻頭図版 2	D区遺構完掘状況 S E205内RW372出土状況
巻頭図版 3	青磁碗
巻頭図版 4	青磁皿・底部
巻頭図版 5	青磁壊・白磁・青白磁・漆器椀
図版 1	遺跡遠景(北から)・E区土層断面
図版 2	調査区近景(西から) 調査区近景(北東から)
図版 3	D区遺構検出状況(北から) D区遺構検出状況(東から)
図版 4	E区遺構検出状況(東から) F区遺構検出状況(北から)
図版 5	S B250建物跡(北から) E B153・E B154・E B155・E B165
図版 6	S B251・270建物跡(北から) E B256・E B257・E B262・E B263
図版 7	S A10柵木列(昭和61年度東から) S A10柵木列(北から) E A133・E A134・E A136
図版 8	S E171土層断面・S E171(西から) S E186検出状況(南から) S E186完掘状況(南から) S E205検出状況(東から) S E205(南から) S E205底面横棧(南から) S E338完掘状況(南から)

第14図	陶器実測図(7)	25
第15図	青磁実測図(1)	26
第16図	青磁実測図(2)	27
第17図	青磁実測図(3)	28
第18図	青磁・白磁・青白磁実測図	29
第19図	墨書板状品実測図	30
第20図	木製品実測図(1)	31
第21図	木製品実測図(2)	32
第22図	木製品実測図(3)	33
第23図	木製品実測図(4)	34
第24図	木製品実測図(5)	35
第25図	木製品実測図(6)	36
第26図	金属・土・石製品実測図	37
第27図	砥石実測図	38
付 図	大樋遺跡遺構配置図	

## 目 次

図版 9	S D141遺物出土状況(北から) S K191土層断面(南から) S K199土層断面(南から) S K368土層断面(南から) S K269土層断面(西から) S K269木片出土状況(西から) S K269完掘状況(西から)
図版10	S D207・208(北から) S D206(北から) E P167(東から) E P168(東から) R P303出土状況 RW363出土状況 RW367出土状況 調査風景
図版11	かわらけ
図版12	陶器(1)
図版13	陶器(2)
図版14	陶器(3)
図版15	墨書板状品(国立歴史民俗博物館 平川 南氏撮影)
図版16	木製品(1)
図版17	木製品(2)
図版18	木製品(3)
図版19	金属製品・石製品

# 第Ⅰ章 調査の経緯

## 1 調査に至るまでの経過

大楯遺跡は、昭和38年の『山形県遺跡地名表』に「大楯遺跡」として登録された遺跡である。当遺跡は、昭和48年の庄内広域営農団地農道整備事業にかかる分布調査で東西850m、南北700mにわたる広大な遺跡であることが明らかになり、遺跡名も「御所馬場遺跡」と命名された。さらに、昭和51・52年の県内全域における遺跡確認調査で「大楯遺跡」と改名され、遺跡番号2177として台帳に記載登録された遺跡である。

昭和59年、本遺跡を含む月光川左岸地区に県営ほ場整備事業計画が公表され、県農林水産部より、昭和60年以降の県営ほ場整備事業にかかわる遺跡の詳細な分布調査が依頼された。分布調査は過去の調査結果をふまえ、昭和48年に確認された広範囲な地域の遺構、遺物の分布状況を調べることとし、翌昭和60年には、59年に確認されている範囲を更に詳細に把握することに努めた。その結果、この広大な遺跡範囲には、大楯・館の内・堂田・道の上の4箇所の集中地域を確認するに至った。

昭和61年、集中地域の一つである堂田地区の北部を東西に切るように、県営灌漑排水設置事業が計画されたことから、同年10月分布調査を行うこととなった。その結果、40m以上にわたって東西に立ち並ぶ柵木列や、これを取り囲むように建物跡の柱穴や土壙などが検出され、中世陶器や青磁が出土した。

昭和62年度からは堂田地区のほぼ全域を含む地域に県営ほ場整備事業が実施されることとなり、最上川右岸土地改良事務所・月光川土地改良区・遊佐町教育委員会などの関係機関と協議を重ねた結果、山形県教育委員会が主体となり緊急発掘調査を行う運びとなった。

## 2 調査の経過

調査期間は、昭和62年4月15日～同年8月7日までの延べ74日間である。グリッド設定は、ほ場整備の南北計画線をY軸基準線とした。基準線は磁北からN—14°30'—Eを測り、X軸はY軸に直交する方向に設定した。グリッドの単位は、5m×5mを1単位とした。次に遺跡の広がりを把握するため、1m×5m及び1m×3mのトレンチを100本設定し掘り下げた。これにより遺跡範囲の南側には遺構・遺物がほとんど確認出来ず、さらに先行して行った南北350mのトレンチ調査の遺構、遺物の分布からも、遺跡は北側に集中するとの結果を得た。これを基に3箇所の精査区を設定し、各々D～F区とし順次重機械による粗堀を行った。精査区総面積は3,147m<sup>2</sup>である。D区拡張は2度に分けて行ったため、遺構精査は、D I→F→D II→E区の順で進めた。なおA～C区については、昭和61年度に分布調査を行っている。

## 第II章 遺跡の立地と環境

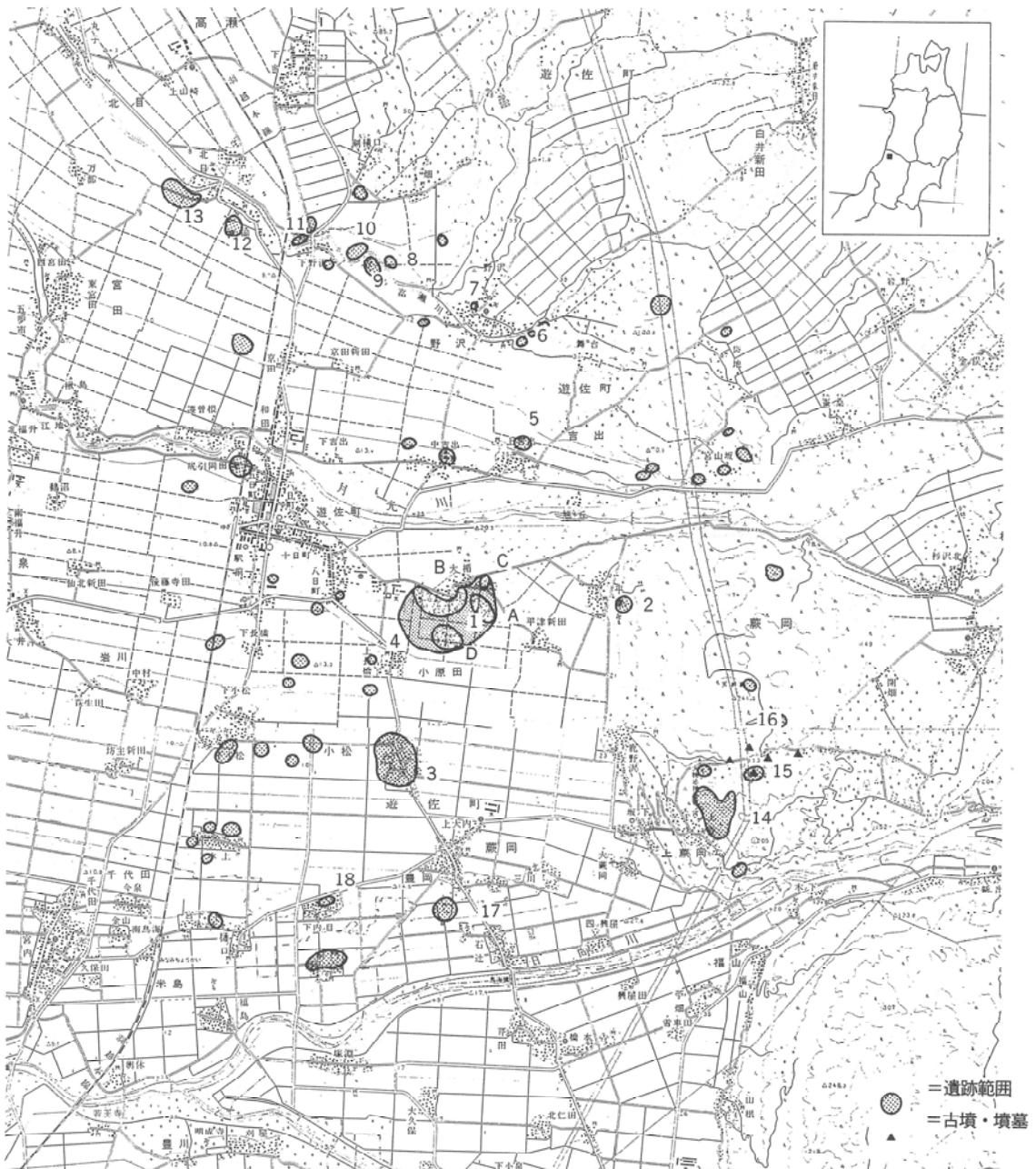
### 1 地理的環境

大楯遺跡は、山形県飽海郡遊佐町大字小原田字大楯・大楓・大面の広範囲に広がる水田中に所在する。遊佐町は、山形県西北に広がる庄内平野の北端にあり、東西16.6km・南北15.9kmのほぼ正方形の町域をなす。西は日本海に面し、南は酒田市、北は秋田県由利郡と隣接する。当町は、東から山間部・山麓部・平野部・日本海沿岸部に大別される。海拔2237m、その端麗な姿から「出羽富士」の名で親しまれる鳥海山の南麓に広がる平野部は、鳥海山系を源流とする中小の河川によって潤される。これらの中小河川によって運ばれた土砂は丘陵端に扇状地を形成する。月光川扇状地は、被圧・不圧の地下水に恵まれている。また平野部のほとんどは、三角州性の低地と言われ、河川流域には氾濫による自然堤防が随所に見られる。さらに海へ運ばれた土砂は、日本海の荒波と季節風によって、再び陸へ運ばれ砂丘を形成する。遊佐町吹浦に端を発する庄内砂丘は、南北約35kmに及び鶴岡市湯野浜まで便便たる連なりを見せる。近世初頭には荒涼と化した砂丘も江戸中期に完成した砂防林によって、山と呼ぶにふさわしい姿を見せている。その姿は、庄内地方の人々が西山と呼ぶ所以でもある。

大楯遺跡は、月光川左岸約500mに位置し、標高は約16mを測る。現在平坦に見える当地域も、近年の基盤整備によるもので、高かった所は多分に削平を受けていると言われる。南北に設けた約350mのトレンチ調査では、南へ行くほど耕土直下の層の堆積は厚くなり下層は泥炭を含む軟弱な層となる事が明らかになった。また、北側の調査区からはおびただしい数の大小の礫が散乱し、豊富な地下水の湧出もあった。これらの事から、本遺跡は月光川が作り出した扇状地の先端部を含み、さらに氾濫原とそれから3m前後の比高差をもつ自然堤防の微高地上に立地すると考えられる。また、幾度かの水害に見舞われた事も併せて考えられる。

### 2 歴史的環境（第1図）

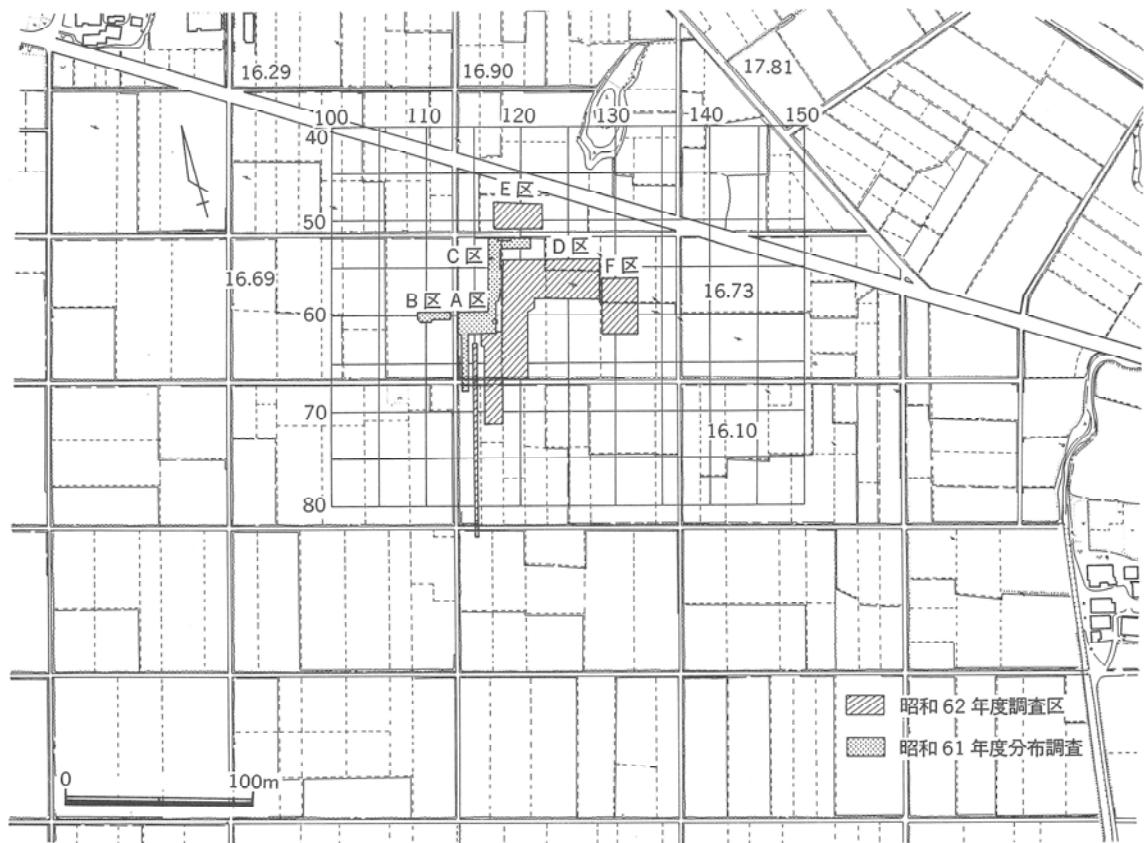
大楯遺跡の所在する遊佐町には167箇所の遺跡が確認されている。この167箇所の中には、2～3時期の文化を重ねる遺跡もあり、時代別にみると244を数える。山形県内でも有数の遺跡集中地域である。その中で、本遺跡と同時代と考えられる鎌倉時代の遺跡は41を数える。第1図からは平野部や川筋に集落跡が、山麓に館跡や窯跡が点在することが読み取れる。また本遺跡は、古代駅名の遊佐駅や遊佐荘の疑定地として、あるいは遊佐殿や川北冠者忠衡の館跡などが考えられてきた。また本遺跡の周囲には3つの塚があり、その一つである太子塚は帝立太子の墓として当地区に伝わり遺跡との何らかの関連も伺わせる。今回の調査は、これまで不明な点が多かった中世解明の大きな手がかりを提示したことになる。



第1図 大橋遺跡位置図 (S = 1 ; 50,000)

大橋遺跡と周辺の遺跡

遺跡名	種別	時代	遺跡名	種別	時代
1 大 橋	城館跡	鎌倉	8 道 中 A	集落跡	平安末～鎌倉
A 堂田地区			9 宅 田	リ	縄文・平安末～鎌倉
B 大橋地区			10 道 中 B	リ	リ
C 館の内地区			11 宮 の 下	散布地	平安末～鎌倉
D 道の上地区			12 上 高 田	集落跡	リ
2 平津 橋 跡	橋 跡	室町時代	13 木 戸 下	リ	リ
3 長 田	集落跡	平安末～鎌倉	14 蕨 岡 館 跡	館 跡	平安以降
4 水 尻	リ	リ	15 堂 林 A	集落跡・窯跡	縄文・平安
5 北 子 橋	リ	鎌倉	16 天狗森 C 窯跡	古 窯 跡	平安・鎌倉
6 水 上	墳 墓	南北朝以降か	17 橋 番	集落跡	平安末～鎌倉
7 下くね添	集落跡	鎌倉末	18 村 前	リ	リ



第2図 遺跡全体図

### 3 遺跡の層序（第3図）

遺跡を覆う表土の基本層序は主に、微砂・細砂からなる3層である。面的な精査に先行して行ったトレンチ調査では、今回精査区とした所を中心に、表土下約40cmに炭化粒を多量に含む遺物包含層が検出された。第3図はE区120—49グリッドの土層断面である。D区北側も同様な層を示すが、南側については近年の基盤整備のため削平を受けており、いわゆる遺物包含層であるIII層は見あたらず、遺構確認面も見られない。F区については遺構の遺存状態は比較的いいものの、遺物包含層はみとめられない。D区・E区の遺構確認面には大小の礫が多量に散乱し、南北方向への流れが認められる。

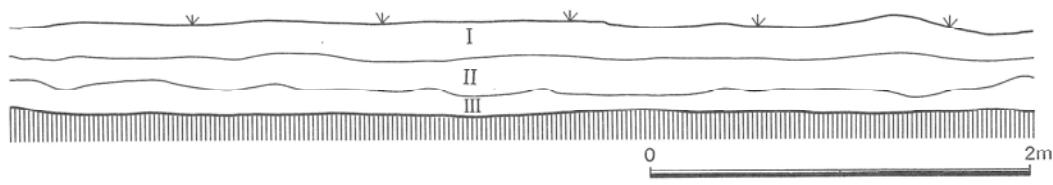
#### 120—49グリッド土層注記

I層 10Y R 3 / 1 黒褐色 微砂 (耕作土)

II層 10Y R 4 / 1 褐灰色 微砂 炭化粒微量・小礫含む、やや粘性あり

III層 10Y R 2 / 1 黒色 微砂 炭化粒小量・小礫・遺物含む、やや粘性あり

17.0m



第3図 層序図

# 第III章 遺構

## 1 遺構の分布

遺構はD～F区でまとまった検出があった。検出された遺構は、掘立柱建物跡3・柵木列1・井戸跡4・土壙21・溝跡20・ピット92等である。南側は削平を受けていることもあり、全体的に見て北側に多く分布する傾向が見られる。D・E区は特に遺構が密集し重複が見られる。以下主な遺構を概述する。

## 2 建物跡

### S B250建物跡（第4図・図版5）

D区北側に位置する。梁行3間、桁行5間の南北棟である。主軸方向は磁北からN-10°-Eを測る。柱間距離は梁行で1.5～2.0m、桁行で1.5～2.0mを測る。柱穴掘り方は、径50～60cmの方形及び楕円形を呈する。遺存する柱は10本でいずれも、径18～20cmを測る円柱である。東側には建物跡に沿って溝跡（SD141）があり、建物に付随する雨落ち溝と考えられる。西側には柱根が残る柱跡があり、庇または縁の存在も想定できる。

### S B251建物跡（第4図・図版5）

F区南側に位置する。梁行2間、桁行6間の東西棟である。主軸方向は磁北からN-17°-Eを測る。柱間距離は梁行で2.2～2.5m、桁行で1.8～2.0mを測る。柱穴掘り方は、径45～60cmの楕円形を呈する。遺存する柱は7本で、円柱及び角柱が見られる。南面、北面とも建物の中央の4本目（EB255・263、図版6）に角柱を用いている。EB257・258・262・263には根固めの石が見られる。北側に位置するS B270建物跡と平行関係にあり、同時期に存在したものと考えられる。また、建て替えの痕跡は認められない。

### S B270建物跡（第5図・図版6）

F区北側に位置する。梁行2間、桁行5間の東西棟である。主軸方向は磁北からN-15°-Eを測る。柱間距離は梁行で2.1～2.2m、桁行で2.2mを測る。柱穴掘り方は、径40～80cmの楕円形及び不整形を呈し、不揃いである。遺存する柱は8本で、円柱と分割した角柱とが見られる。径15～20cmで、全体的に細く弱々しい。総柱であるが、張床の可能性も考えられる。

## 3 柵木列

### S A10柵木列（付図・図版7）

D区南西に位置する。このS A10柵木列は、昭和61年度の分布調査に續く11.5mを検出した。幅42～55cm、深さ5～10cmを測る布掘りに70cm等間に並ぶ。柵木は2本で1組を基本とする。柵木が遺存するものは3組であるが、他6組の痕跡が残る。柵木は1辺12～15

cmの角材を用いており、上部は炭化している。昭和61年度の調査では東西18m、南北3.7mまで確認し、さらに西と南へ続くことが考えられた。今回の調査では、その南限を確認することに重点をおいて行ったが、以前に行われた基盤整備による盤下げで、削平されており、確認に至らなかった。

#### 4 井戸跡

##### S E171井戸跡（第6図・図版8）

D区北西角に位置する。曲物を1段のみ埋設したものである。曲物は径50cm、深さ20cm、厚さ1cmを測る。周囲には径20cm大の礫が流れ込み、上部は破損している。井戸の深さは、50cmを測り、内部からは、黒漆に朱漆で模様が描かれた漆器椀の破片が出土している。井戸跡として登録したが、その構造から問題の残る遺構である。

##### S E186井戸跡（第6図・図版8）

D区北西側に位置する。縦板を用いたものである。遺存する板は17枚あり、幅6～12cm、長さ50cm、厚さ1cmを測る。平面プランは隅丸の方形を呈したが、下方はすぼまり、断面形は逆三角形を呈する。板は互いに重なり合う状態であった。また断面観察でも掘り方は明確ではない。S E171同様、井戸跡として登録したが疑問が残る遺構である。

##### S E205井戸跡（第6図・図版8）

D区中央北側に位置する。縦板に横桟の構造をもち、一辺1mの方形を呈するものと考えられる。遺存する板は10枚あり、幅10～50cm、長さ70cm、厚さ3～5cmを測る。この板の上方は5cmと厚いが、下端から約30cmの上のところから削られ、外面に段を有し3cmと薄くなる。横桟は上下2段と考えられるが、上方は破損している。底部に残る桟は6cm角の角材で、ほぞを穿ち組んだものである。周囲及び井戸内部には径10～30cm大の礫が散乱する。井戸内より、かわらけ（第8図15）、漆器（第23図12）、砧（第25図5）が出土している。

##### S E338井戸跡（第6図・図版8）

E区東側に位置する。縦板に横桟の構造をもつ。一辺約1mの方形を呈するものと考えられる。遺構の残りは良くなく、南面からのみ、その形態を伺い知ることができる。遺存する板は16枚あり、幅6～11cm、長さ60cm、厚さ1cmを測る。桟は6cm角の角材である。掘り方は一辺1.6mのほぼ方形である。出土遺物はない。

#### 5 土 壤

##### S K176土壤（第7図）

D区118～119-54グリッドに位置する。平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は長径150cm、短径70cm、深さは29cmを測る。掘り下げの結果、東西2カ所に深いところがあり、

中央部は盛り上がる。壁は東側はなだらかに掘り込まれるが、西側はほぼ垂直である。出土遺物は、蓮弁文の青磁片（第15図11）である。

#### S K180土壤（第7図）

D区118～119-55グリッドに位置する。平面形は南北に長い不整橢円形を呈する。規模は長径210cm、短径150cm、深さは33cmを測る。一部柱穴状の掘り込みがあり、深さは55cmを測る。壁はなだらかに掘り込まれる。東側には、南北にS D172溝跡があり、土層断面の観察の結果S K180土壤は、S D172溝跡に切られる。出土遺物は、蓮弁文（第15図14）及び底部内面に花文スタンプを施した青磁片（第17図14）の他に礎板状の板材がある。

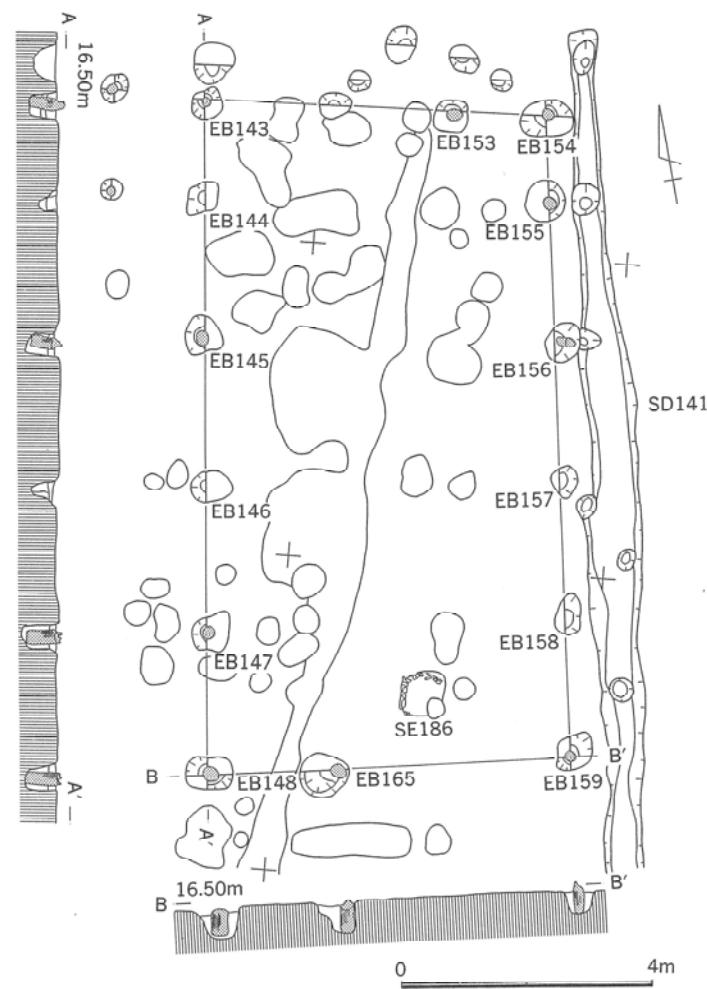
#### S K269土壤（第7図・図版9）

F区131-58グリッドに位置する。平面形は橢円形を呈する。規模は長径100cm、短径90cm、深さ23cmを測る。壁は北側がなだらかで、南側は急になる。覆土は4層からなり、その3層目には木製品の箸（第20図21、25～28）・櫛（第23図15）・墨書き板状品（第19図15）をはじめ木片がぎっしり詰まっていた。特に箸は、折れているものも含めると合計131本に及んだ。一括廃棄されたものと考えられる。

#### S K340土壤（第7図）

E区121-50グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。規模は径90cm、深さ21cmを測る。壁は急で東側は垂直に近い。覆土は2層からなり、2層目は有機物層である。この層には、長さ9～16cmの串状の木製品（第20図10～15）及び木片が詰まっている。串状の木製品は合計340本の出土である。

#### S K368土壤（第7図・図版9）



第4図 S B 250建物跡

E区120-50グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。規模は径188cm、深さ40cmを測る。壁は急で東側は垂直に近い。覆土は7層からなり、3層目からは有機物層となる。出土遺物は、草花文青磁皿（第18図5）・木製品へら（第22図2）漆器椀（第23図1）椀（第23図2）・下駄（第24図3）が出土している。

## 6 溝 跡

### S D141溝跡（図版9）

D区119-54～120-57グリッドに位置する。長さ18.5m、幅40～90cm、深さ10～15cmを測る。南端からほぼ直角に、西へ曲がる。断面形は「U」字形である。覆土は2層からなり、炭化物を多量に含む微砂である。S B250建物跡の東面に平行することから、雨落溝としての機能も考えられる。溝の底面には、約2.2m間隔で深さ約25cmのピットが並ぶ（図版10）。また北から14mのところから南北2.1m、東西1.7mの楕円形の広がりを持ち、この中には完形を含む、かわらけ（第8図5・7・9・16）、青磁壺（第17図33）、木製品底板（第21図2・4）の他珠洲系陶器の擂鉢が出土している。

### S D101溝跡

D区114～115-63グリッドに位置する、北西から南東に流れる溝である。調査区の関係上、長さ7mまでの一部のみの検出となった。幅90～150cm、深さ30cmを測る。断面形は「U」字形を呈し、壁はほぼ垂直である。覆土は2層からなり、炭化物を含む微砂である。出土遺物は、かわらけ（第8図13）の他、墨書き板状品（第19図3・4・6・7）がある。

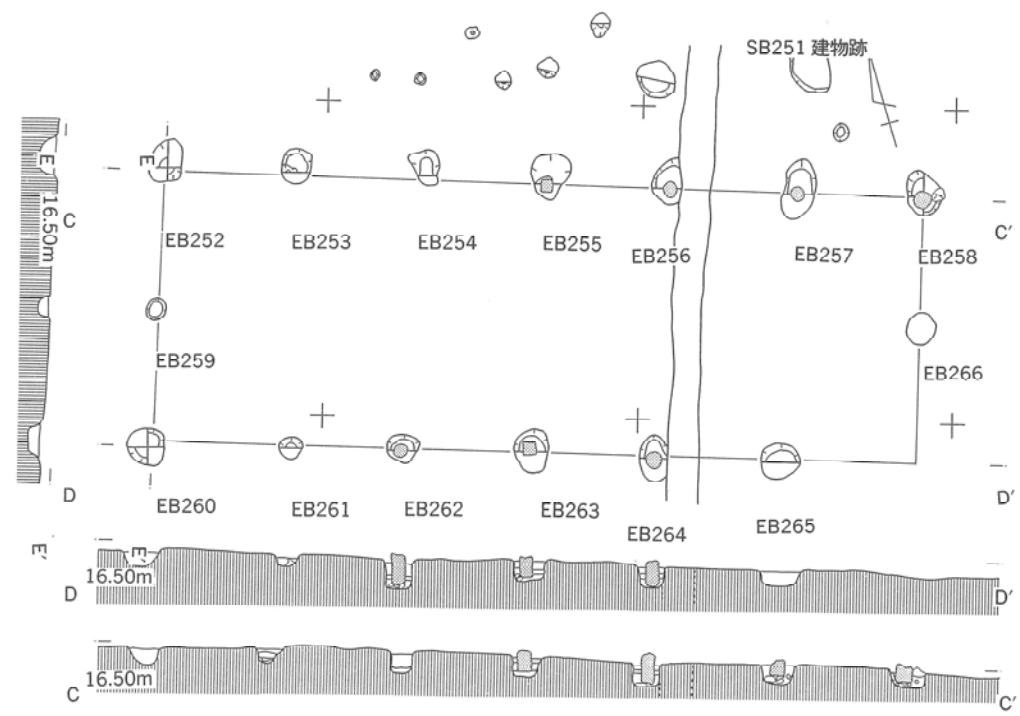
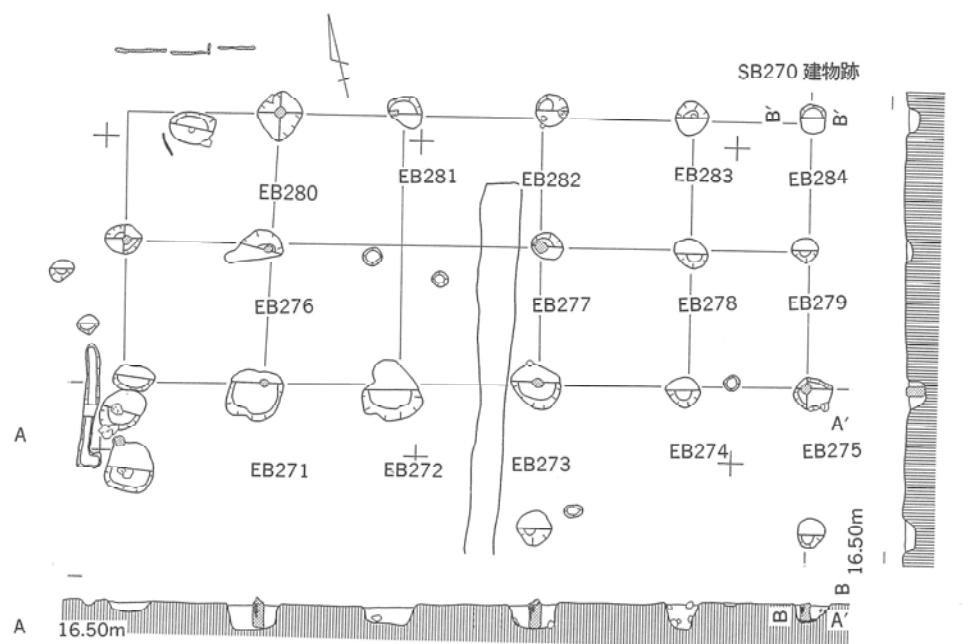
### S D206・207・208溝跡（図版10）

D区123～127-54～57グリッドに位置する、南北に流れる溝である。S D206のみ北から南西方向に流れ、他の2条は南東方向に流れる。S D206の最大幅は5.5mを測り、深さは平均15cmを測る。断面形は緩やかな「U」字形である。S D207・208は幅60～100cm、深さ10～15cmを測る。覆土は3条とも黒色の微砂で、大小の礫が多量に入り込んでいる。出土遺物は、かわらけ（第8図1・20）、珠洲系陶器（第9図11・16、10図2・4、12図3）、青磁碗（第15図6、16図3・19・25、17図7）、青磁皿（第18図10・11）、の他、盤・櫛（第23図13・16）、下駄（第24図1）等の木製品がある。

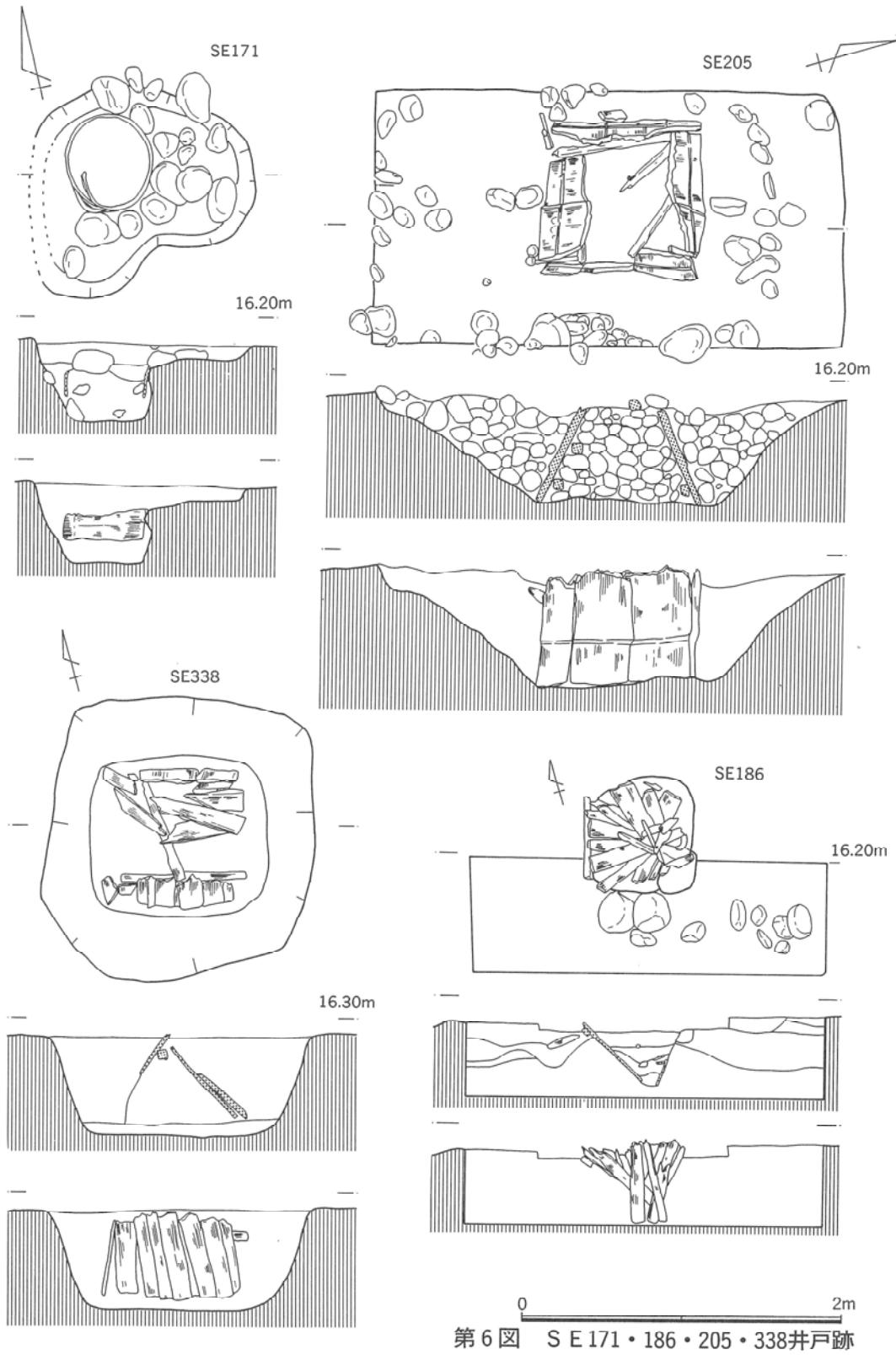
## 7 性格不明遺構

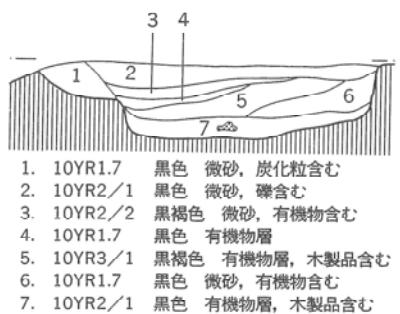
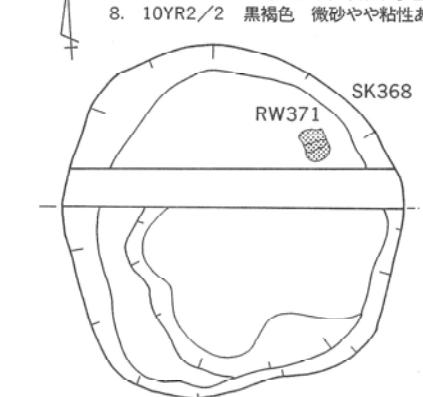
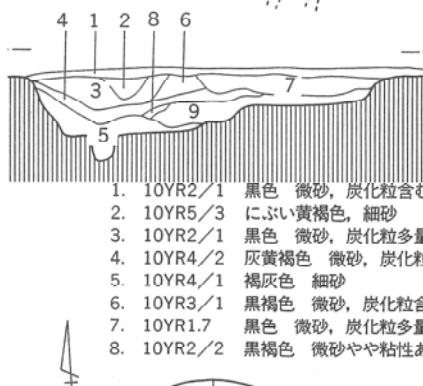
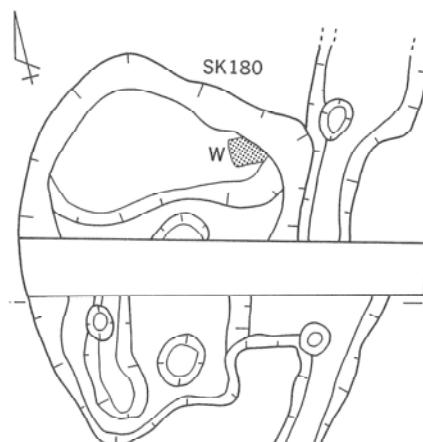
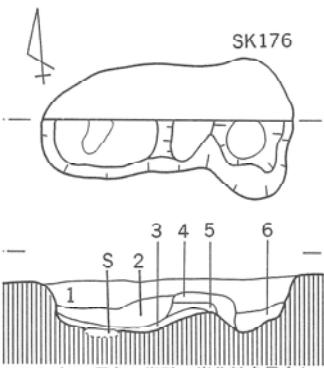
### S X196・197性格不明遺構

D区南側に広がる落ち込み状の遺構である。2つとも調査区の関係上、全体の規模は不明であるが、S X196は南北9m、S X197は南北13mに及び、不整形の広がりを持つ。壁はほぼ垂直に近く、深さは15～30cmを測る。覆土は炭化物と有機物を多量に含む黒色土である。出土遺物は、珠洲系陶器・越前焼・青磁・石釜・石硯の他、底板等の多数の木製品がある。



第5図 SB270・251建物跡





基準レベル=16.20m

0 2m

第7図 SK176・180・269・340・368土壤

## 第IV章 遺 物

### 1 遺物の分布

今回の調査で出土した遺物の総数は、15,615点を数える。その中で包含層出土のものが、全体の82%である12,808点を数える。その詳細な内訳については、表-1を参照されたい。なお、点数に含まなかった遺物としては、曲物2、井戸枠43、柱根42、がある。遺物はD区から最も多く出土しており、遺構の分布状況と軌を一にする。しかし近年になって行われた基盤整備事業のため、大半が破片資料となり、分布状況も攪拌していることは否めない。また南側については、遺構が削平されていることもあり、遺物の分布はほとんど見られない。木製品については、性格不明の落ち込み状遺構(S X)・溝跡・井戸跡等に多く見られ、地下水位が高いことから遺存状態は良好である。

本書では、図化復元可能なものを中心に掲載し、その他の井戸枠・柱根をはじめ出土遺物の大部分を割愛した。以下本章では種別毎に概述する。

### 2 かわらけ(第8図1~22)

本調査で出土したかわらけは、遺物総数の85%である13,280点を数える。その大半は小破片である。かわらけには、手捏ねのもの(A)と、ロクロによる成形のもの(B)がみられる。

A 1類(第8図1~3)：口径80~83mm、器高19~22mmの小振りの皿である。体部と底部の稜が明瞭でなく、丸底である。口縁は歪み、一部煤が付着しているものもある。内外面とも指頭痕が残り、ナデもみられる。胎土は密で、焼成は良好である。灯明皿の灯芯押えに用いたと考えられる。

A 2類(第8図4~7)：口径はA 1類とほぼ同様な値を示し、底径56~72mm、器高11~18mmの小振りの皿である。このA 2類には、3タイプみられる。A 2 a：底部と体部の稜はみとめられるが、丸底に近い。A 2 b：底部と体部の稜が明瞭であり、底部が偏平である。A 2 c：体部が外反し、底部との稜に張りを持つ。いずれのタイプにもナデがみられ、不明瞭ではあるが指頭痕もみられる。

B 1類(第8図8~12)：口径82~90mm、底径48~66mm、器高16~24mmの小振りの皿である。底部に回転糸切り痕がみられる。体部はロクロナデである。B 1 a：体部は緩く外反し、中央に稜を持つ。口縁に、10~20mmの指押しによるくぼみが一箇所みとめられる。胎土は砂粒を混入したものと、そうでないものがある。焼成は良好である。B 1 b：底部から体部にかけてほぼ同じ器厚を持ち、体部は幾分内彎する。胎土、焼成はB 1 aと同様である。

B 2 類 (第8図13~22) : 口径115~132mm, 底径60~104mm, 器高25~35mmの皿である。ロクロナデの他にハケ状工具によるナデもみとめられる。胎土は密, 焼成は良好である。B 2 a : 底部に回転糸切り痕が残る。口縁部を一部打ち欠き, 灯芯台としていることが伺えるものもある。この打ち欠き部には煤が付着している。B 2 b : 底部に回転糸切り痕と, 板目痕がみとめられる。体部は僅かに内彎する。B 2 c : 底部に板目痕が残る。回転糸切りの痕跡はみとめられない。体部内外面に指頭痕がみられる。体部は僅かに内彎するものと, 「く」の字状に屈曲するものがある。B 2 d : 底部に指頭痕とナデがみられ, 丸底である。

### 3 陶器 (第8図23~14図)

#### (1) 珠洲系陶器 (第8図24~第13図6)

珠洲系陶器は, 全体の6.6%である1,025点が出土した。器種は, 壺, 麦, 摺鉢の器種がみられる。中でも壺が最も多く, 出土地点も広範囲にわたる。

壺は頸部が弓なりに外反する。口縁端部は嘴状に引き出したものと, 平直なものとがある。体部は, 条線状のタタキ目を有するものと, 有しないものがある。内面には円形または, 楕円形の押圧痕をとどめる。第8図23~25は, 3本を一単位とする装飾的なタタキ目に, 十六弁の矢車状スタンプを施したものである。内面は楕円形の押圧痕をとどめる。外面は灰かぶりがみられる。第9図1は条線状タタキ目に十六弁の花弁文スタンプを施したものである。内面は円形の押圧痕をとどめる。口頸部の接合面は縦位のナデツケがみられる。第9図5・6は体部外面に線刻文を施したものである。今回の調査では2点のみの出土であり, この2点とも破片資料のため内容は不明である。第9図7・8は櫛目波状文を施したものである。7は小壺, 8は四耳壺であると考えられる。内外面ともにていねいなロクロナデである。

表-1 出土遺物点数表

出土地点 (遺構内)	須恵器	かわらけ	珠洲係 陶器	越前係 陶器	他の中 世陶器	青 磁	磁 器	土製品	石製品	木製品	金属製品	自然遺物	その他	計
S B		133	2	2		6					1		3	147
S E	1	36	4										3	44
S K		301	39	1	3	14	4		2				6	370
S D		1,255	48	1	5	35	8		5	1		8	3	1,369
E P		243	6	2	4	3	1						1	260
S X		492	9	11	7	8	3		2				2	534
小 計	1	2,460	108	17	19	66	16		9	1	1	8	18	2,724
包含層	23	10,781	917	145	327	358	70	3	14	5	11	1	153	12,808
X - 0	1	39		3	12								28	83
小 計	24	1,0820	917	148	327	370	70	3	14	5	11	1	181	12,891
合 計	25	13,280	1,025	165	346	436	86	3	23	6	12	9	199	15,615

甕は体部資料が大半を占め、口縁及び底部の資料は極めて少なく、全形を知り得るものはない。その中で、口縁形態は3タイプみとめられる。口縁端部がつまみだされ、嘴状に伸びるもの、玉縁状になるもの、短く先細りになるものがそれである。

壺及び甕の体部はタタキ目から4タイプみとめられる。タタキ目が密なもの(第10図2・3)は内面に粘土紐巻き上げの痕跡がみられるほか、円形の押圧痕と横方向のナデがみとめられる。タタキ目が粗なものには、押圧の痕跡をほとんどとどめず横方向のナデがみられるもの(第10図3・11図1)と、円形の押圧痕が明瞭に残り、押圧による凸部を縦方向にミガキ状のナデを施し、調整したもの(第11図2)がみられる。胎土は密、焼成は良好である。第11図3・4は前述の十六弁の矢車状スタンプを有するものと同一のものである。第11図5・6は羽状のタタキ目が残り、内面は円形の押圧痕をとどめる。胎土は精選され密なものと、砂粒を含む粗なものがみられる。焼成は良好である。

擂鉢は、内面に卸し目を有するものと、そうでないものがあるが、ここでは両者とも擂り鉢としてあつかった。總て破片資料のため、卸し目の有無が明確ではなく、卸し目を有するものでも、条数は不明である。また、注口部が残るものは2点のみである(第11図9・10)。いずれも指押えによる成形である。9の注口部は幅広で浅く短いが、10は幅が狭く突出する。その他の擂鉢(第12図)の口縁形態は4タイプに分けることができる。先端部を上向きか、内彎させ、先細りとなるもの(1・2・4・5)、口縁端面に櫛目波状文を施すもの(6)、先端部が外側に突出するもの(7)、口縁端面が平坦でわずかに外反するもの(8)である。底部(第13図1～6)は、切り離しに静止糸切りと、回転糸切りがみられる。静止糸切りの例には草木等の茎様圧痕をみとめるものがある。

### (2) 濑戸系陶器(第14図1～14)

瀬戸系陶器には、水瓶・卸皿の器種がみられる。水瓶は外面に淡緑灰色の施釉がみられる。体部には釉垂れがみとめられる。胎土は密である。卸皿は口径120～170mmを測る。内外面とも施釉がみられる。内底見込みには、ヘラ状工具等による卸目があり、丁寧に刻まれたものと、雑なものがある。底部には回転糸切り痕が残る。

### (3) 越前系陶器(第14図15～20)

越前系陶器は、甕のみの出土である。出土点数は165点で全体の1%にすぎない。出土地点は、119—62グリッド周辺に集中する傾向がみられた。同一個体の破片が大半を占めることが考えられる。口縁は下端が伸び、断面形は「T」字状を呈する。肩部外面には緑灰色の自然釉が付着し、灰かぶり、石はぜがみられる。内面には粘土紐巻き上げの痕跡が残り、指による圧痕と横方向のナデがみとめられる。また格子目の押印がみとめられるものもある。胎土は細砂を含み、焼成は良好である。

#### (4) その他の陶器 (第13図7～13)

7～10は唐津焼の皿である。7には底部内外面に重ね焼きの際の砂目がみられる、8には内面に目あとがみられる。内外面とも白灰色の施釉である。胎土は砂気が多く、焼成は良好である。17世紀前半のものと考えられる。11は常滑焼の鉢である。内外面とも無釉。胎土は粗砂を含み砂気が多い。焼成は良好である。12世紀頃のものと考えられる。12は美濃瀬戸系の山茶碗である。底部は回転糸切痕をとどめ、高台には粒圧痕がみられる。胎土は緻密、焼成は良好である。14世紀前半のものと考えられる。13は無釉の四耳壺である。胎土は細砂を含み、焼成は良好である。中国産であると考えられる。

### 4 青磁 (第15図～18図14)

青磁は436点出土しており、この数は全体の2.8%を占める。産地別にみると、龍泉窯系・南宋官窯系・同安窯系のものがみとめられる。器種では、碗が最も多く、次いで皿・壺がみられる。なお小破片のため器種が明確でないものも多い。

#### (1) 龍泉窯系青磁

本調査出土青磁中最も多くみとめられる。蓮弁文の碗（第15図～16図10）が大半を占める。図上復元における口径は、114～204mmを測るが、170mm前後を測るものが主流である。口縁は内彎するものと、わずかに外反するものがみられる。蓮弁は鎬のないものもみられるが、鎬蓮弁のほうが量的には多い。釉調は多様である。底径は50mm前後を測る。高台の断面形は四角で、高台内面及び畳付部は露胎である。10は内底見込みに陰刻の草花文が描かれる。飛雲文の碗（第16図11～29）は、図上復元における口径160～174mmを測る。体部内面には、陰刻の纖細な文様が描かれる。口縁部はわずかに外反する。第17図13・15は内底見込みにキノコ状の文様を持ち、飛雲文碗の底部と考えられる。草花文の碗（第17図1～5）は出土数が少ない。体部内面には片彫りで文様が描かれる。口縁部はわずかに外反する。第17図6は内外面とも無文、8・10は外面に蓮弁を削り出した後、その上に櫛目を縦にいれた碗である。碗の底部は、底部の器厚が厚く、高台断面形が四角であること等の特徴から、第17図14・16～19・21・22は龍泉窯の碗のものと考えられる。畠付部と高台内面が露胎のもの、高台中央部のみ露胎のものがみられる。なお22の内底見込みには「金玉満堂」のスタンプがある。第17図22・23・28～31は壺である。底部は畠付部のみ釉をカキ取り露胎とする。体部は下半で「く」の字状に屈曲するものと、しないものがある。口縁部は外反し平坦な面を成す。体部外面には鎬蓮弁のものと無文ものがみられる。第18図5・11は皿である。底部は小さく器厚は厚い。全面施釉の後外底の釉をカキ取り、露胎としている。内面底部には櫛状工具による花文が描かれる。11には全体に不規則な貫入がみられる。

## (2) 南宋官窯系青磁

量的には極めて少ない。第17図23～27がそれである。23は体部下半で「く」の字状に屈曲する壺，24～26は底径29～45mmを測る小碗と碗。27は盤状になるものと考えられる。全体的に厚く釉がかかり，不規則な貫入がみられる。疊付部のみ釉をカキ取り露胎としている。高台は長く，端部は細くなる。

## (3) 同安窯系青磁

同安窯系には碗と皿の器種がみられる。特に皿の出土量が多い。第17図7・9は碗である。7は体部上位でわずかに内側へ屈曲し，内面上位に一条の沈線による段を有する。内面には櫛による雷光文が施される。9は器形的には7に類似するが，内面に雷光文，外面にはいわゆる猫搔の櫛目文が施される。第17図20は碗の底部である。体部と内底見込みとの境に段を有する。高台断面は台形状を呈し，全面施釉の後，高台底部の釉をカキ取り露胎としている。第18図1～4・6～10・12～14は皿である。口径100～108mm底径43～50mm器高20～26mmを測る。体部中位で屈曲し，口縁は外反する。体部内面と内底見込みに段を有する。内底見込みにはヘラによる片彫りと，櫛による雷光文が施される。体部下半から露胎となるものと，全面施釉の後，底部の釉をカキ取っているものがみとめられる。

## (4) その他の青磁

第17図32・33はいわゆる砧青磁である。器形は壺になるものと考えられる。体部内面に鎬葉状の陰刻を施す。陰刻は上端が丸く，下端が尖る。口縁部は外反し平坦な作りとなる。高台は細く尖り，疊付部の釉をカキ取っている。露胎部は茶色味がかる，鉄足である。第17図11・12・34～38は器形が明確でない。36には破損部を漆で接合した痕跡がうかがえる。37・38は直角になる角がみとめられ，香炉等の器形になることも考えられる。

## 5 白 磁

白磁の器形には碗・皿・壺等がみられる。第18図20は碗・15～19・21・22は皿である。法量は大小がみられる。口縁端部の釉をカキ取っている，いわゆる口禿である。口縁はわずかに外反する。底部は全面施釉のものと，カキ取りによる露胎のものがある。また内底見込みには小さな目あとをとどめるものもある。若干青味がかった釉が掛かる24は，梅瓶と考えられる。そのほか25は四耳壺等の耳，26は香炉，27は壺，28は瓶と考えられる。

## 6 青白磁

出土量は極めて少ない。第18図29～31・33は皿である。緩やかに内彎し口縁にいたる。29の高台は細く，露胎になる。内底見込みは輪状に露胎となる。29～31は景德鎮窯のものと考えられる。33は高台断面形が台形になり，体部下半から露胎となる。32は瓶の口縁と考えられる。内外面とも薄く施釉される。

## 7 木製品（第19図～25図）

### (1) 墨書板状品（第19図・図版15）

合計7点の出土である。1は駒形で、不明瞭ではあるが赤外線カメラを通して見たところ、「桂馬」であろうと考えられた。2は「ほろは」と書かれ、「保呂羽」すなわち矢羽根として珍重された羽根の意味がある。また上方に孔を穿っていることから、付札と考えられる。3には「客客」の文字の他に、猪・兔・猿と考えられる動物が描かれている。用途は不明である。4は端部に「三」、もう一方の端部に逆位で「四」と書かれてある。以下5～7は墨痕は残るが、内容については不明である。

### (2) 箸状木製品（第20図・図版16）

箸状木製品には、1～16のような長さ15cm前後を測り、断面形が方形で削りが粗いものと、長さ20cm前後を測り、断面形が円形で、両端を削り尖らせたものがみられる。前者はSK194土壙から30本、SK339土壙から225本、SK340土壙から240本まとめて出土し、木製品を加工する際にてた廃材とも考えられる。また後者はSD101溝跡から66本、SK269土壙から131本が出土した。

### (3) 曲物・底板・柄杓・ヘラ・折敷（第21図、22図・図版16、17）

第21図1～5は曲物の底板と考えられる。6・7は周囲がわずかに立ち上がり、盆状の形態を示す。6は両面とも焼け、炭化している。7～9は柄杓と考えられる。7は上部が一部残存する。第22図1～4はヘラである。5は2カ所に木釘が残る蓋の取手状のものである。6は木釘を打った痕跡がみられ、蓋板であろうと考えられる。7は折敷である。表面には無数につく傷がみとめられる。

### (4) 漆器・椀類（第23図・図版17）

1・4・6～13は漆器である。大半は内外面とも黒漆であるが、8には朱漆で内外面に鶴のような模様を描いている。同様に9は外面に縞模様を、10・12は内外面に花の模様を描いている。11には外面に3本の沈線を施し、底部には線刻がみとめられる。12は盤状のものと考えられる。

### (5) 人形（第23図14・図版18）

立体の人形である。頭髪・鳥帽子・目・眉・口・頬鬚は墨で塗られる。腕は欠損しているが、はめこむための掘り込みがみとめられる。体部断面形は円形である。

### (6) 下駄・草履状木製品（第24図・図版18）

下駄は3点出土しており、2点が連歯下駄（2・3）、1点が差歛下駄（1）である。差歛下駄の歯は欠損している。連歛下駄の歯は3の方が比較的残りが良く、その形態は台より広がる台形を呈する。5の草履状木製品は半分が欠損している。側縁の中位に方形の切

り取りがみとめられる。

#### (7) その他の木製品

第23図15・16は櫛，17・18は脚である。第25図5は砧，6は包丁形，9は糸巻の部材である。7は用途不明であるが，三角形を基本とした彫刻がなされ，木釘を打った痕跡が残ることから，装飾に用いたものであると考えられる。その他多数の木製品が出土しているが，大半は部材で，用途は不明である。

### 8 金属製品（第26図・図版19）

金属製品には，金鎚，釘の工具類や，笄等の装飾品をはじめ12点が出土した。1は鑿である。3は金鎚である。金属製の頭部に差し込んだ木製の柄と楔の一部が残存する。2・4・5は釘，6は刀子である。7は内面底部と体部との境に，斜めに立ち上がる仕切りを持つ。底部には低い高台がみられる。鉄器としてあつかったが，用途は不明である。10・11は笄である。11には木の枝状の浮き彫り模様を施す。8・9は装飾金具，12～14は煙管，15・16は鉄製の輪である。

### 9 古銭（第26図表一8）

古銭は27枚出土している。その中で，北宋銭が21枚を数える。特に「元豊通宝」「皇宋通宝」が多くみられる。

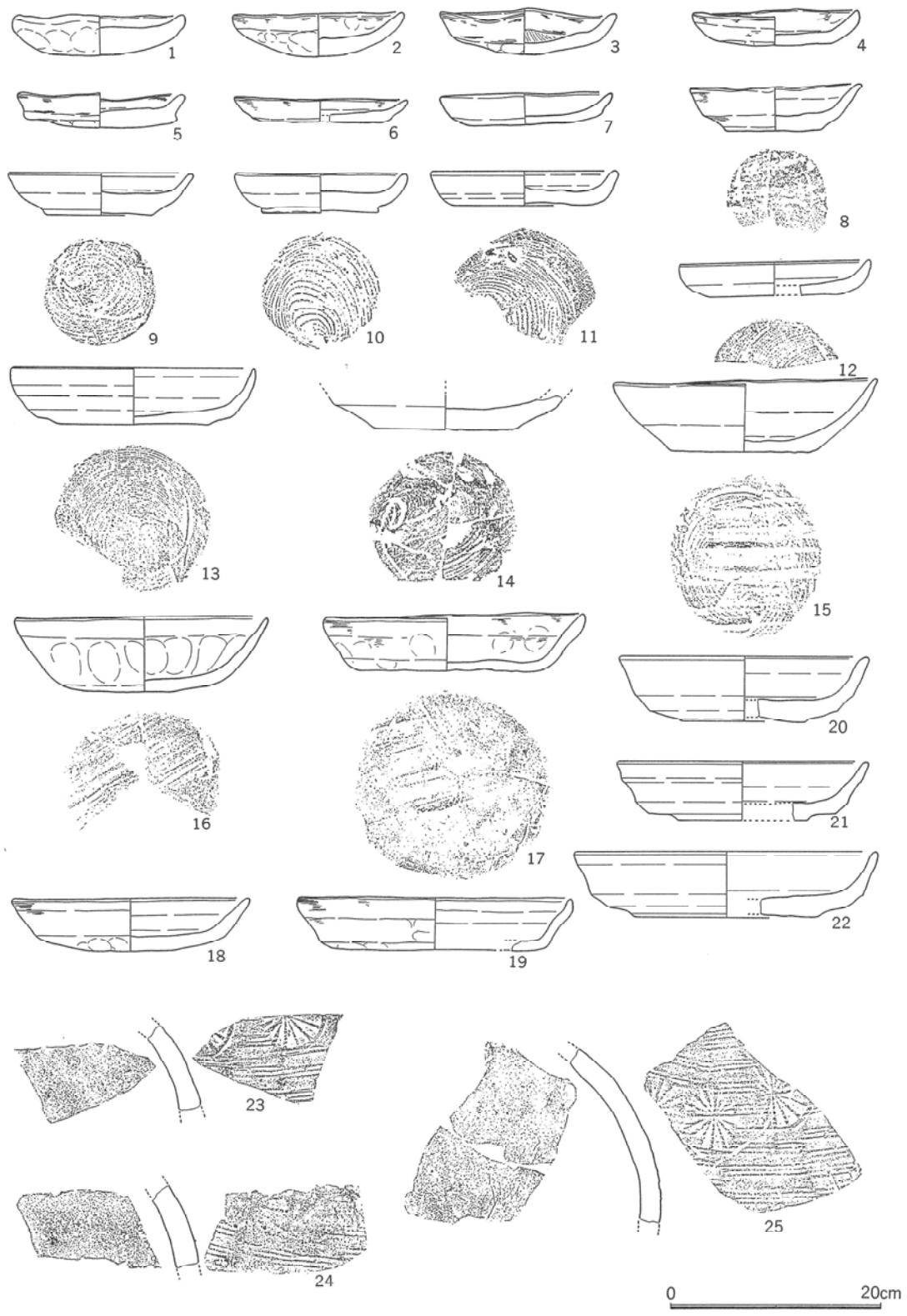
### 10 土製品（第26図）

土製品には44～46のふいごの羽口，47の土製の輪がある。ふいごの羽口は遺存度が悪く，全形は不明である。46は表面の溶変が著しい。

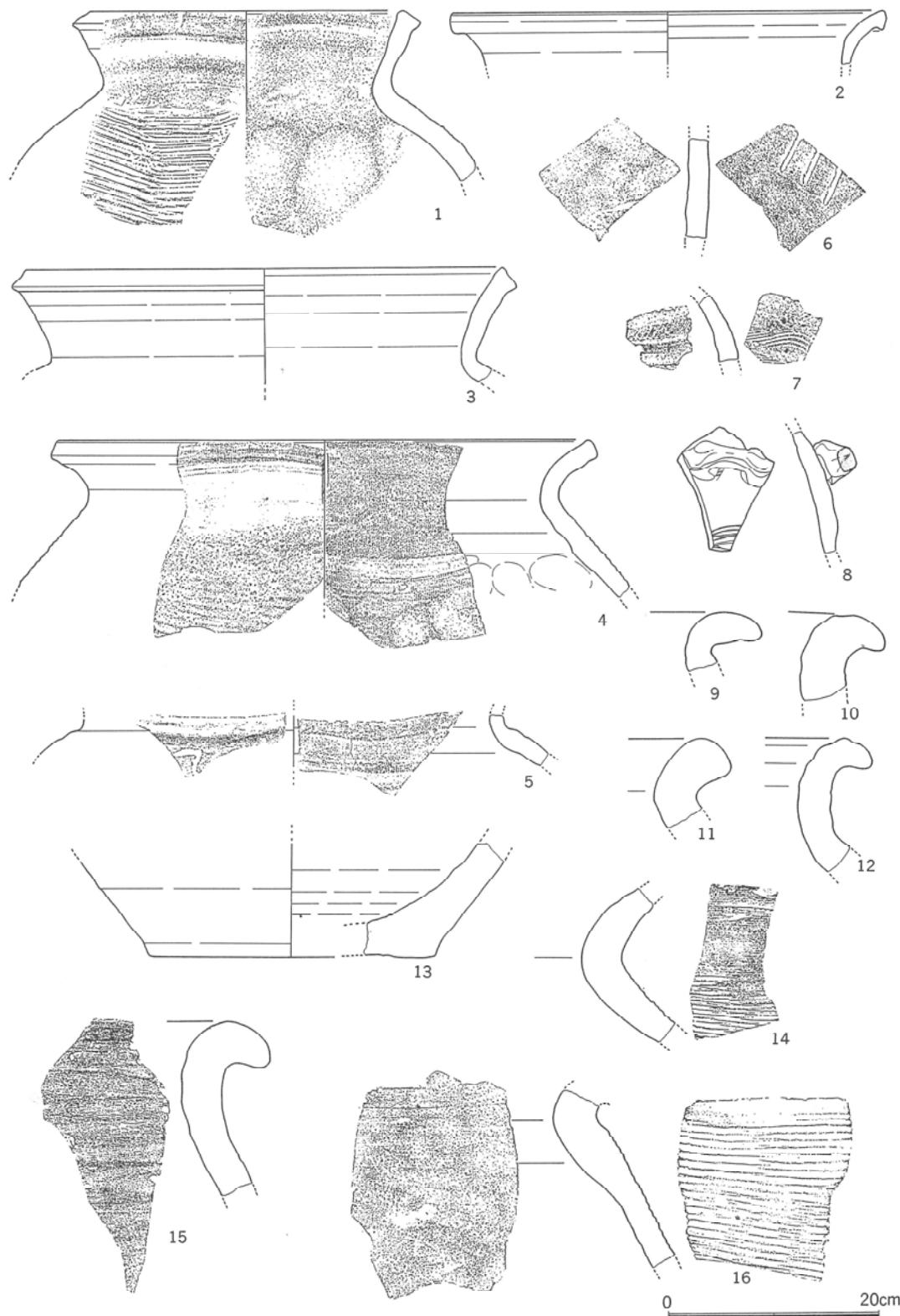
### 11 石製品（第26図～27図・図版19）

48は四葉硯であると考えられる。49は縁部上面に沈線を巡らせ，隅に陰刻で模様を描いた方形の硯である。50は滑石製の鍋である。口縁部は平坦で，外面に断面形が台形を呈するつばが作り出される。内面は平滑，外面はのみ状工具により縦位の細かい削りがみられる。外面つばから下方にはススが付着する。破損した部分には漆を用いて接合した痕跡がみとめられる。また，その後に破損した部分は，平坦で擦痕がみられることから，転用したものと考えられる。

第27図は砥石である。1は台形を呈し，底面にあたる所に無数の擦痕がみられる。側面中央には，径約1cmの孔が穿たれている。その他の砥石の形態は大きく分けて，端部が狭くなるもの(2)，広がるもの(3・5)，ほぼ直線のもの(8)，丸くなるもの(10)に分けられる。断面形は方形及び長方形が大半を占める。表面の他に側面にも擦痕や断面三角形の深い溝がみとめられる。これらの大半は仕上げ砥である。なお図化したもの以外に8点の砥石片が出土している。

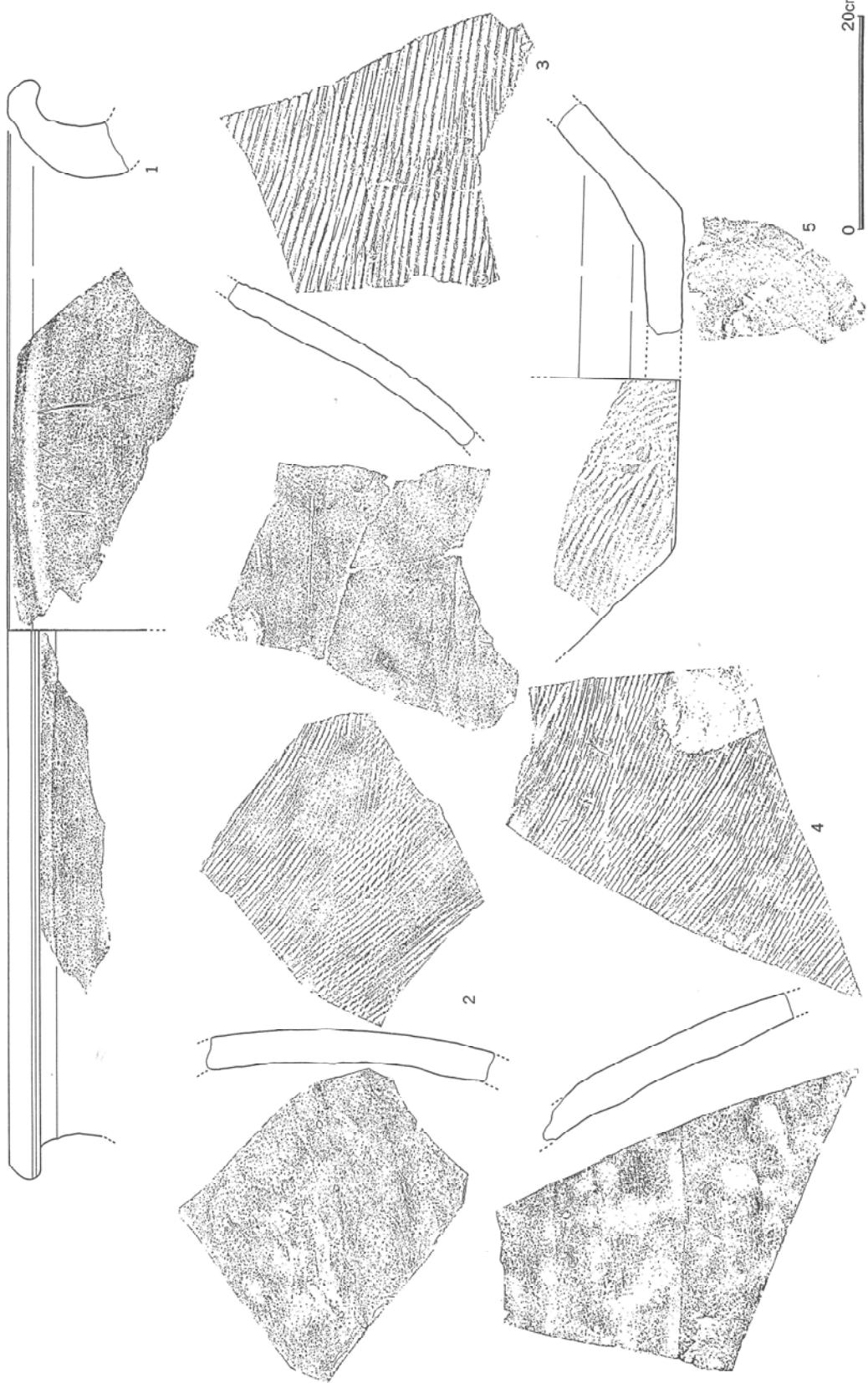


第8図 かわらけ・陶器実測図(1)



第9図 陶器実測図(2)

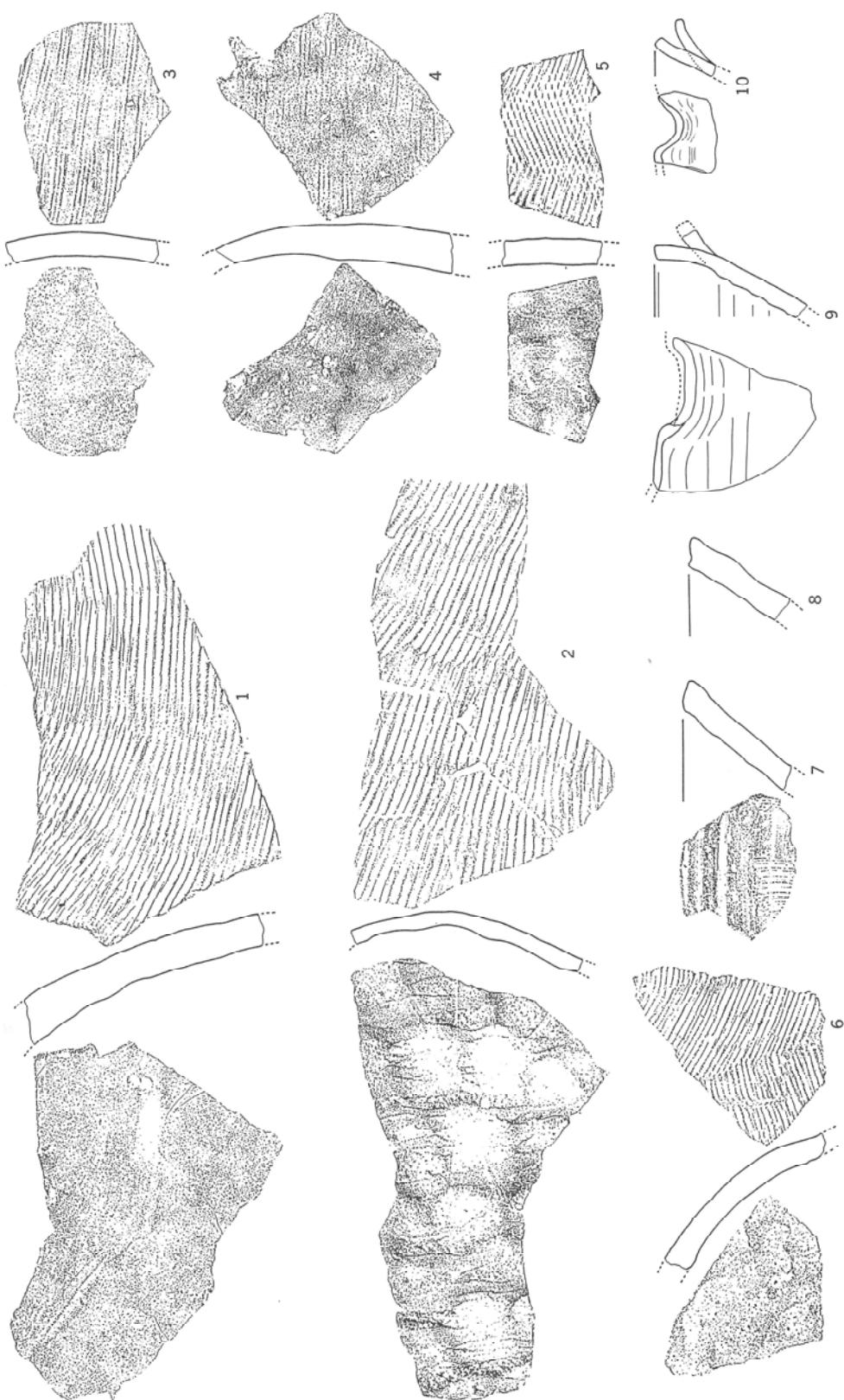
第10図 陶器実測図(3)



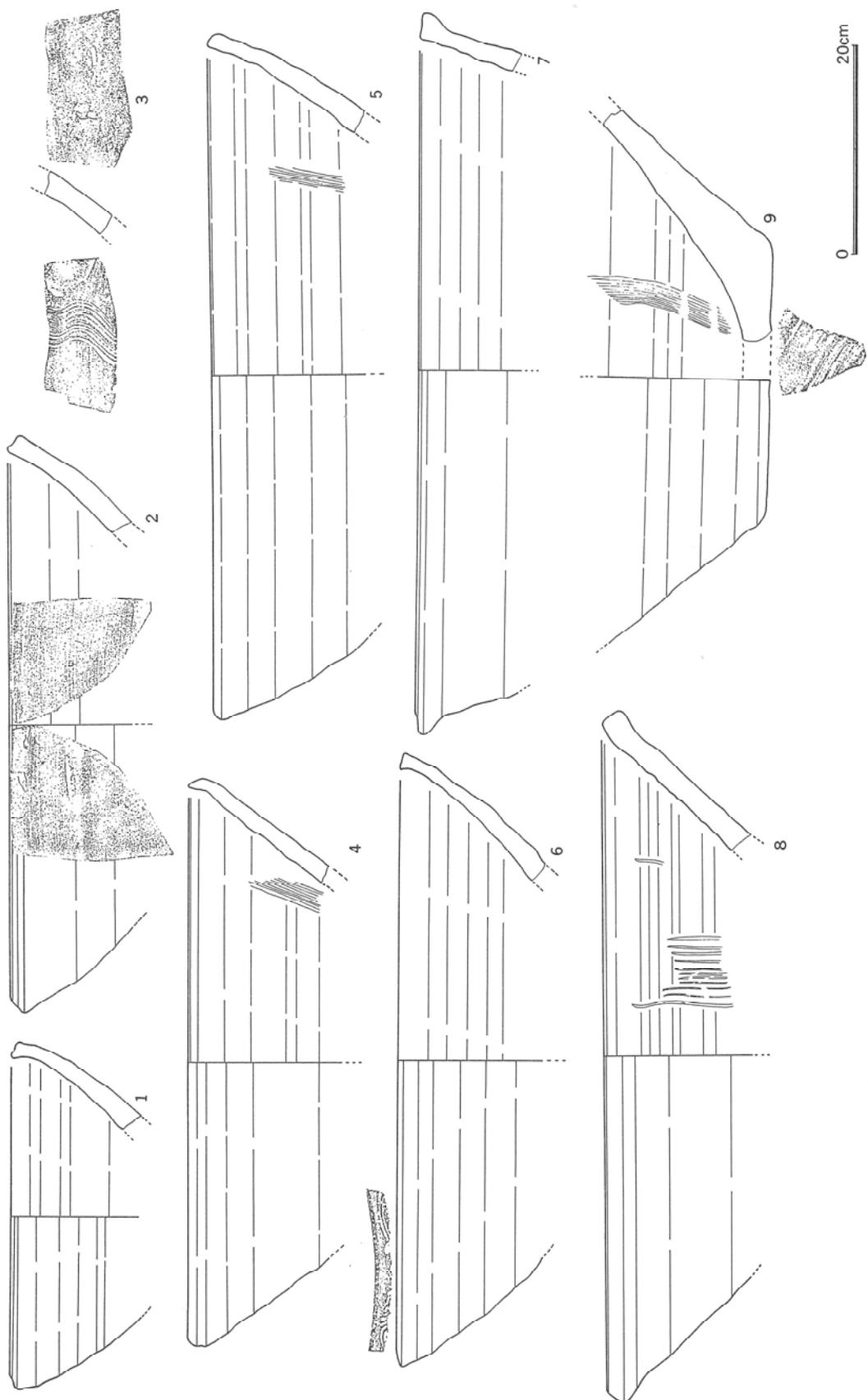
第11図 陶器実測図(4)

20cm

0

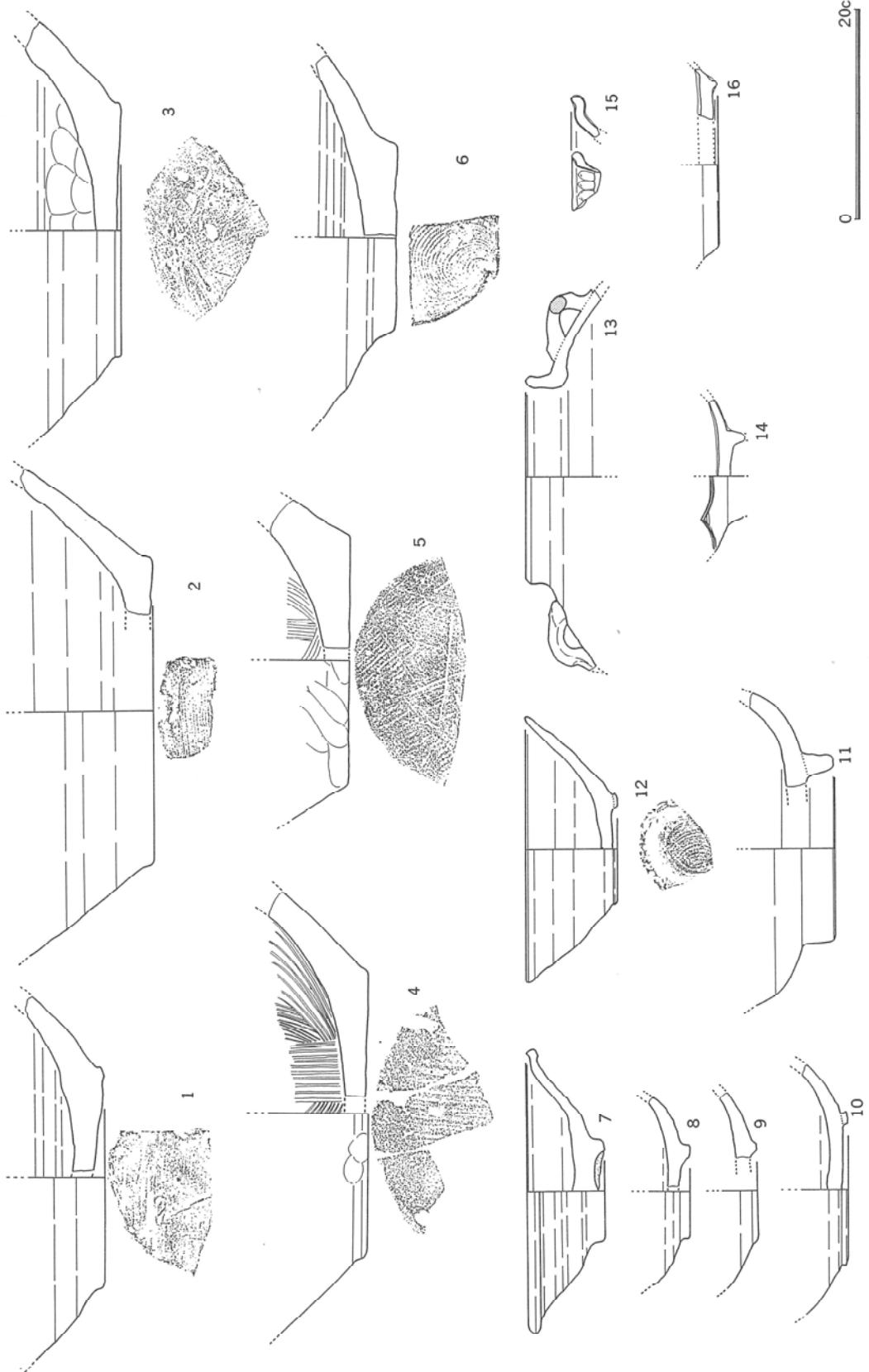


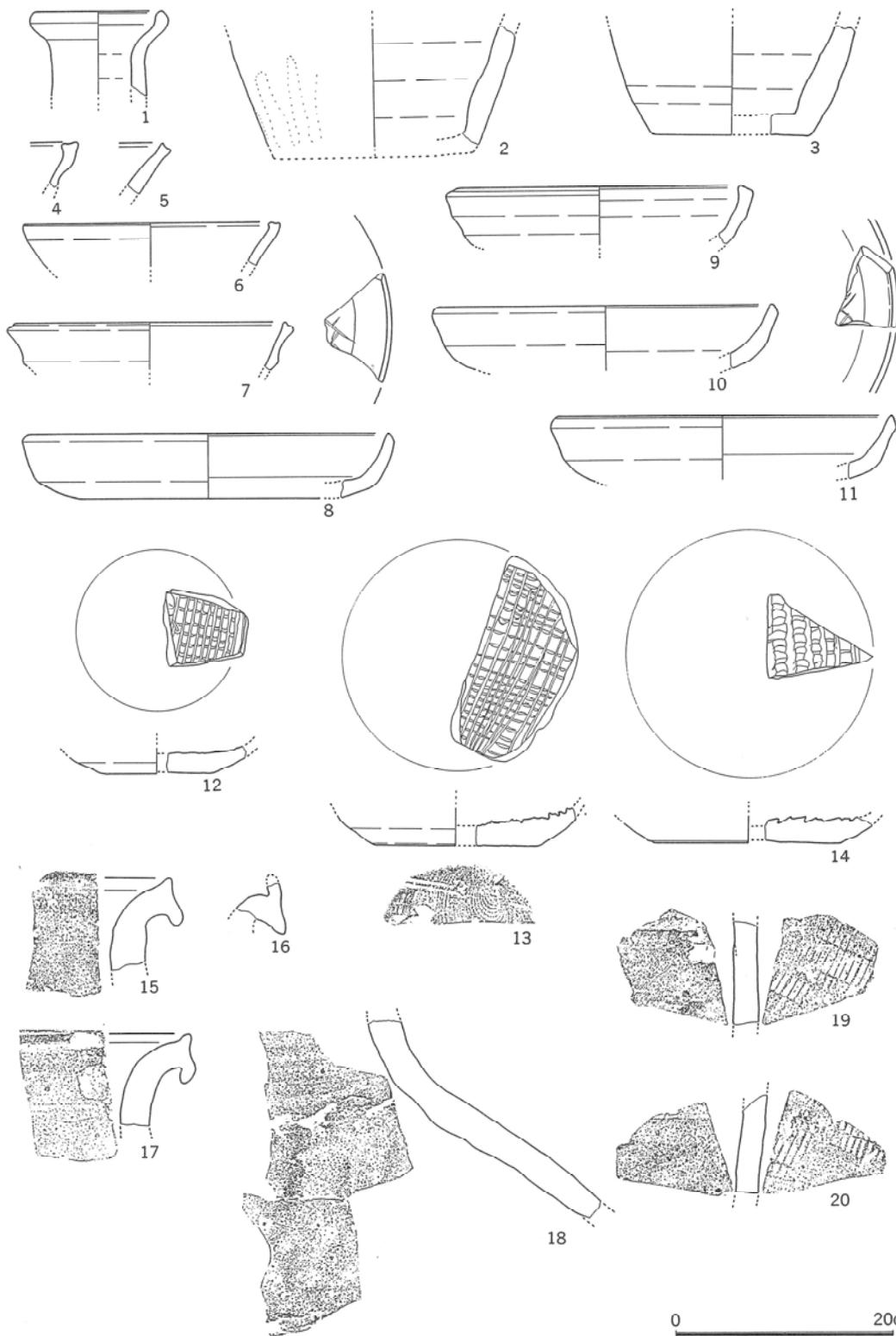
第12図 陶器測図(5)



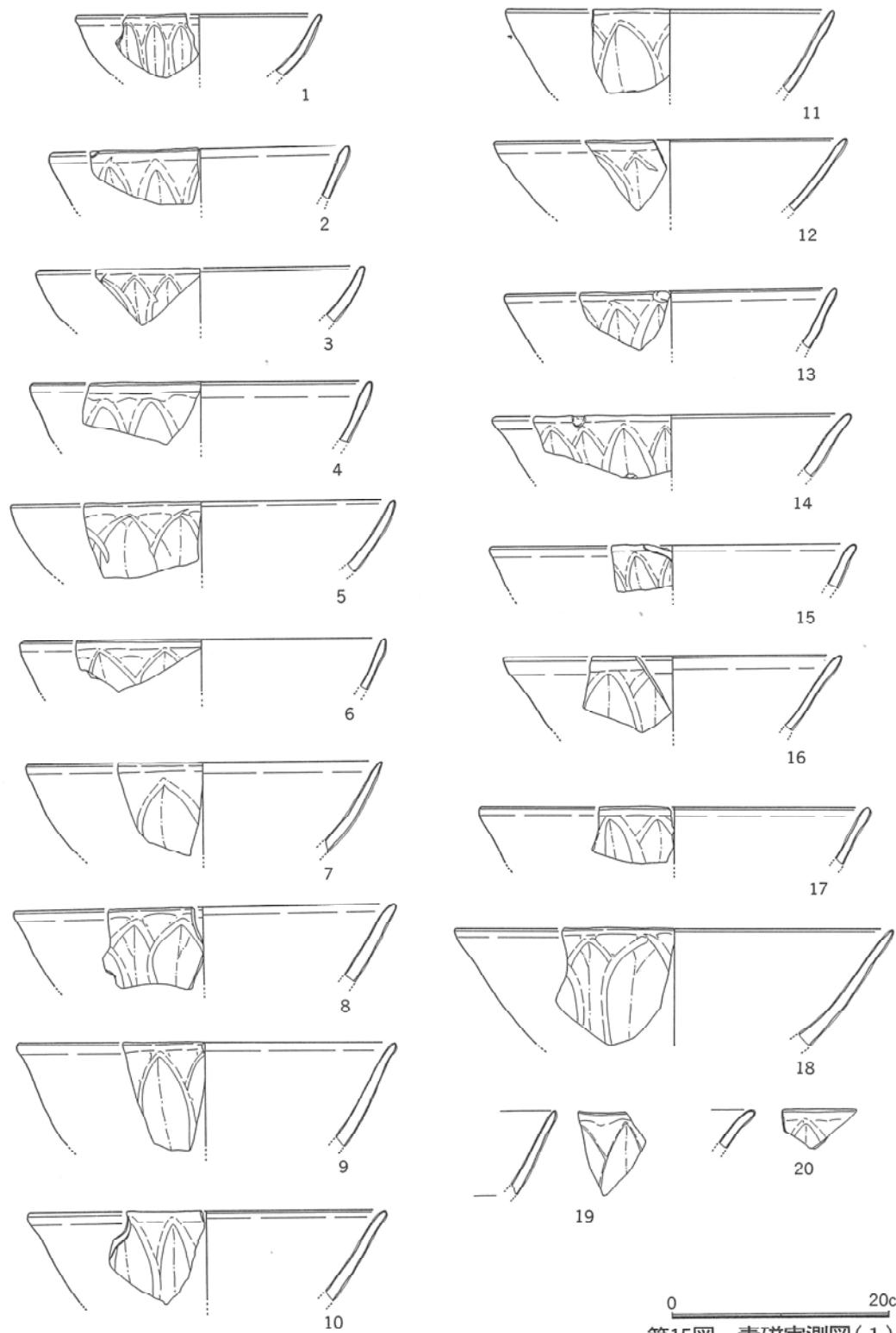
第13図 陶器・磁器実測図(6)

0 20cm

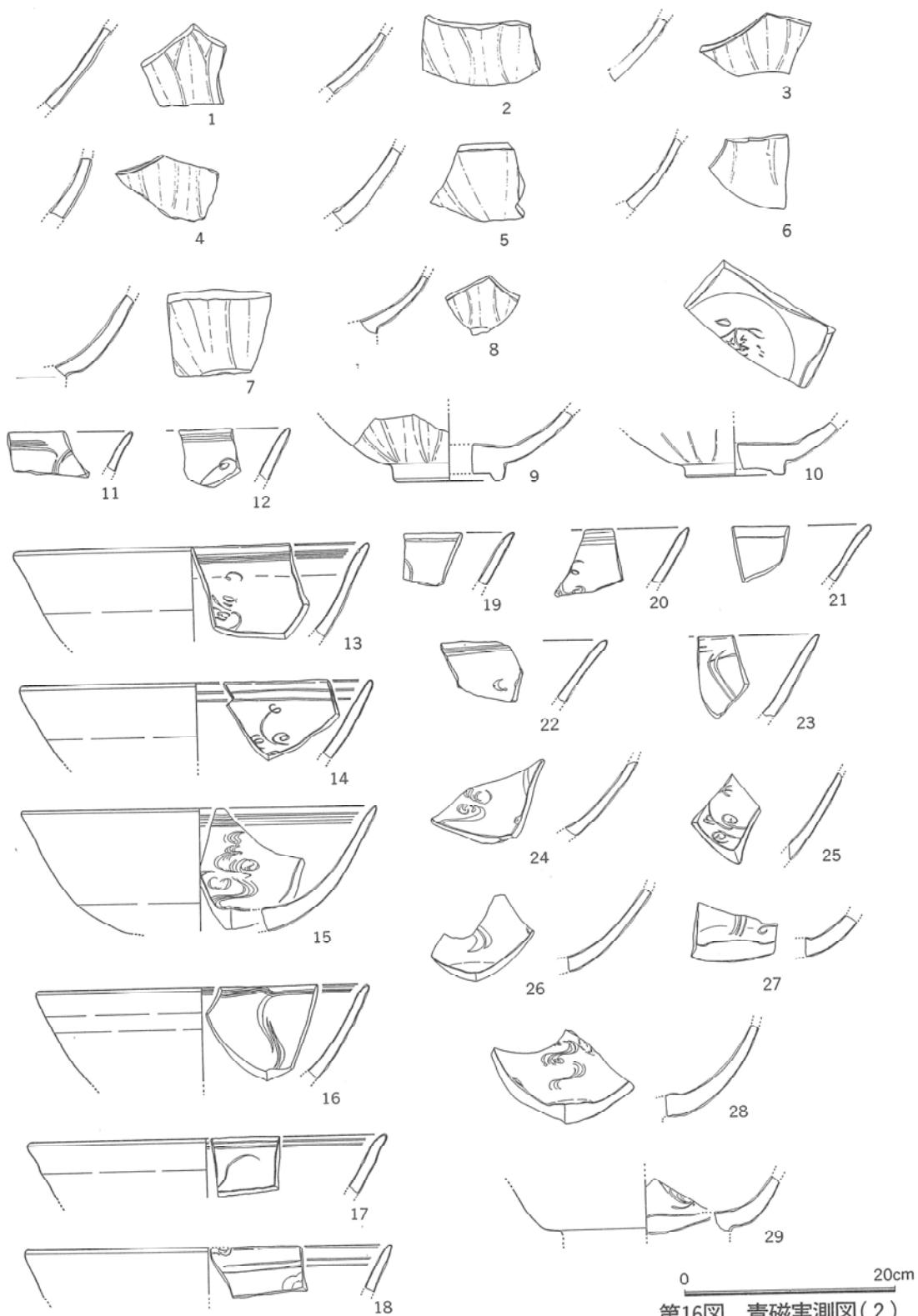




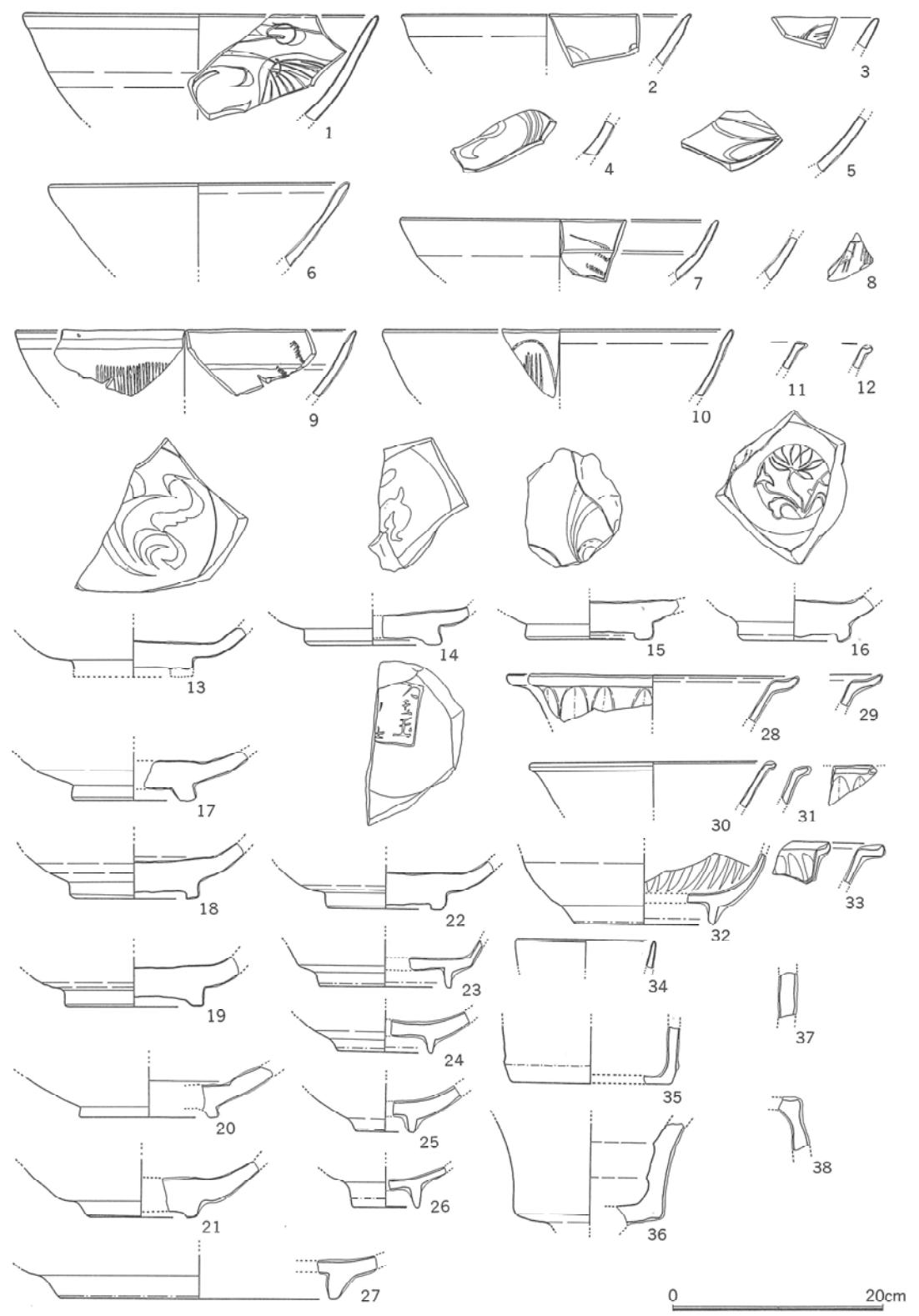
第14図 陶器実測図(7)



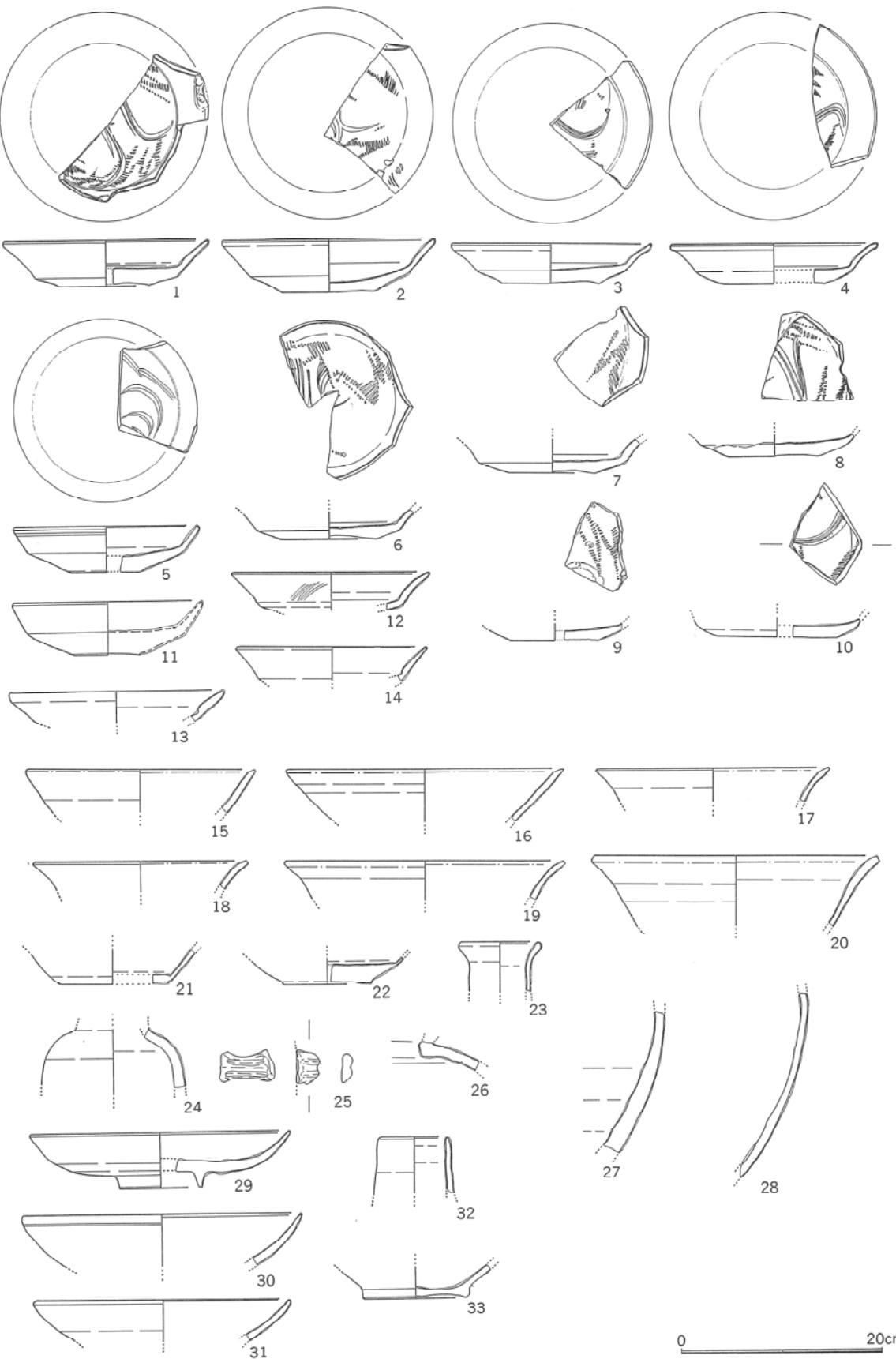
第15図 青磁実測図(1)



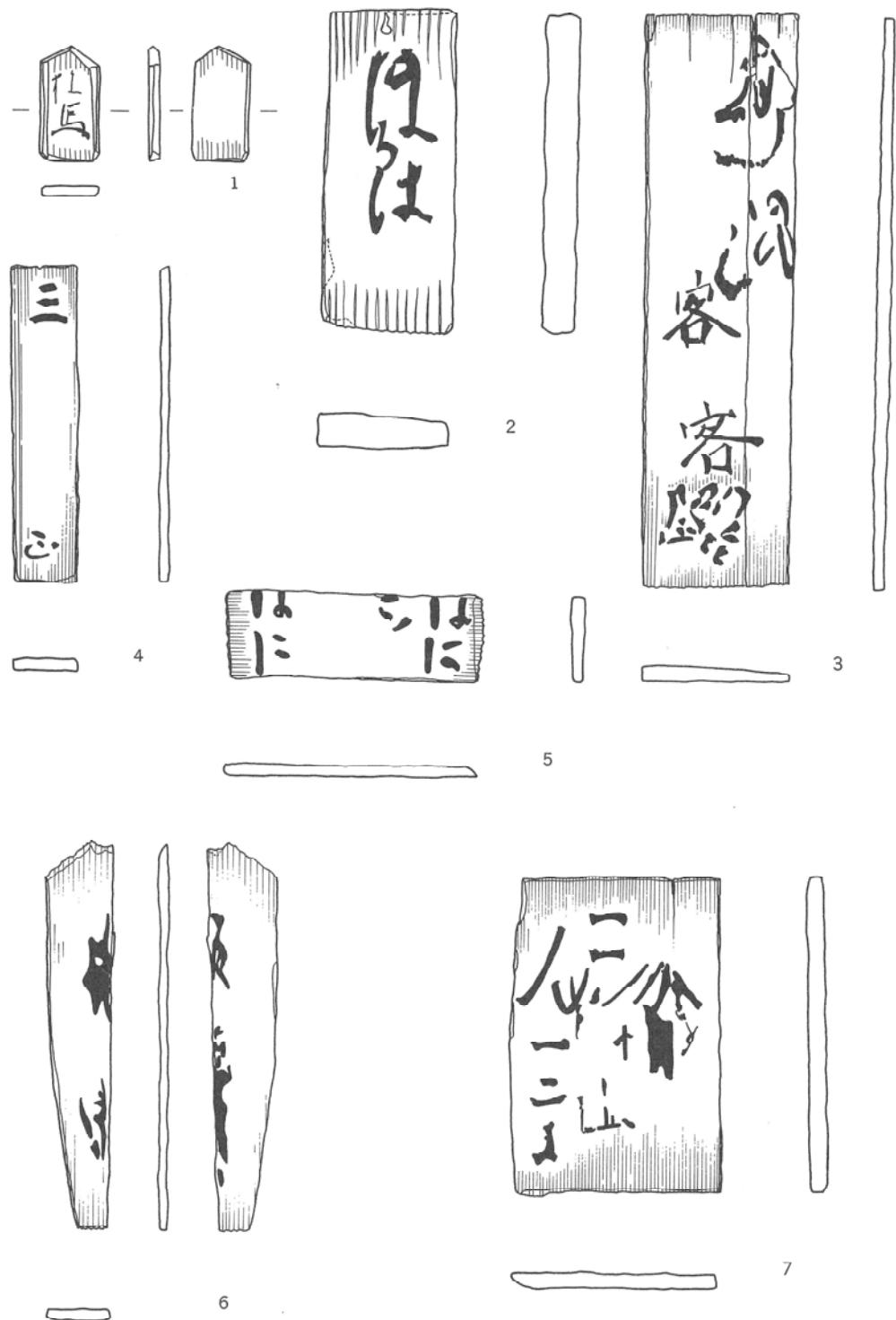
第16図 青磁実測図(2)



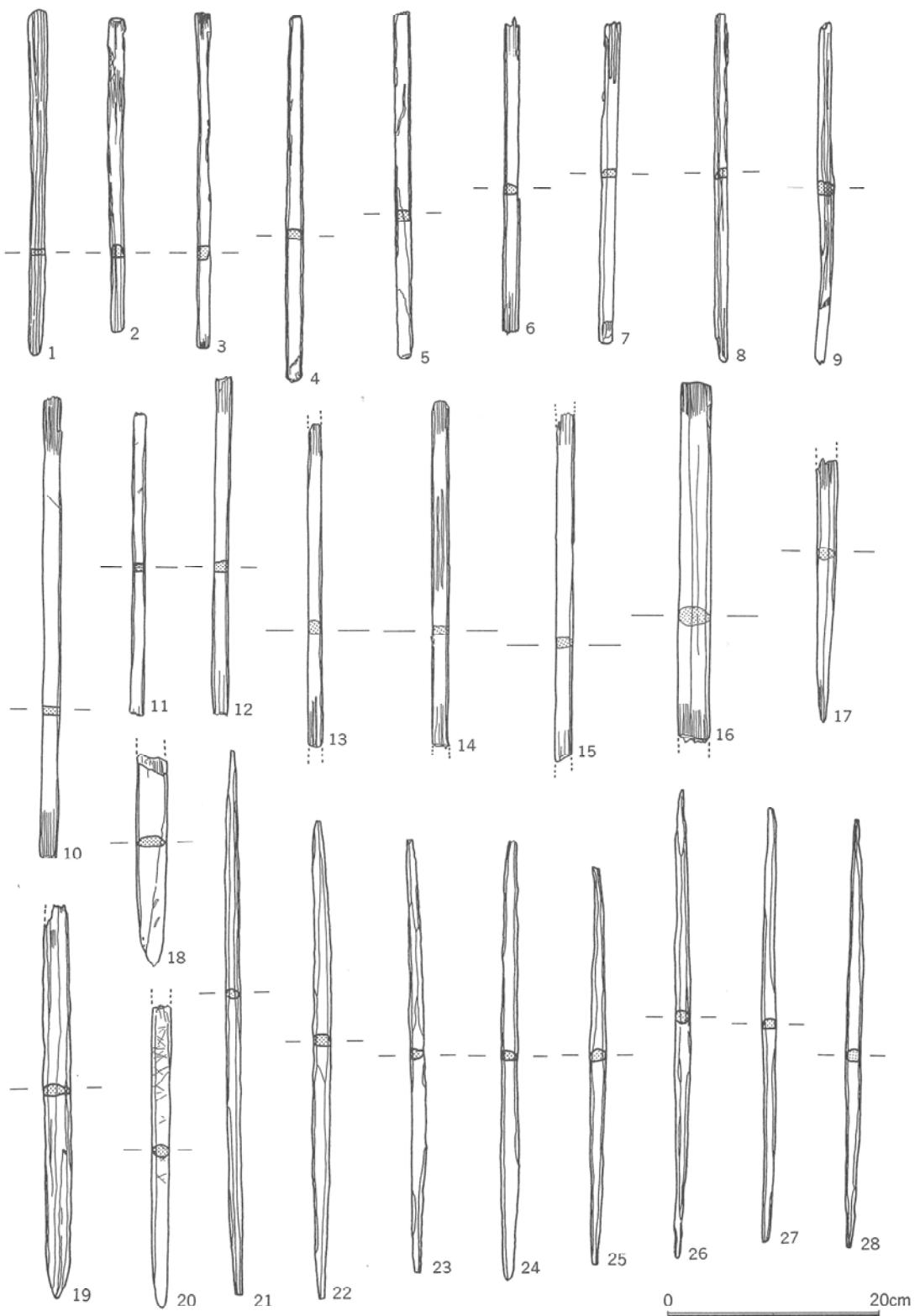
第17図 青磁実測図(3)



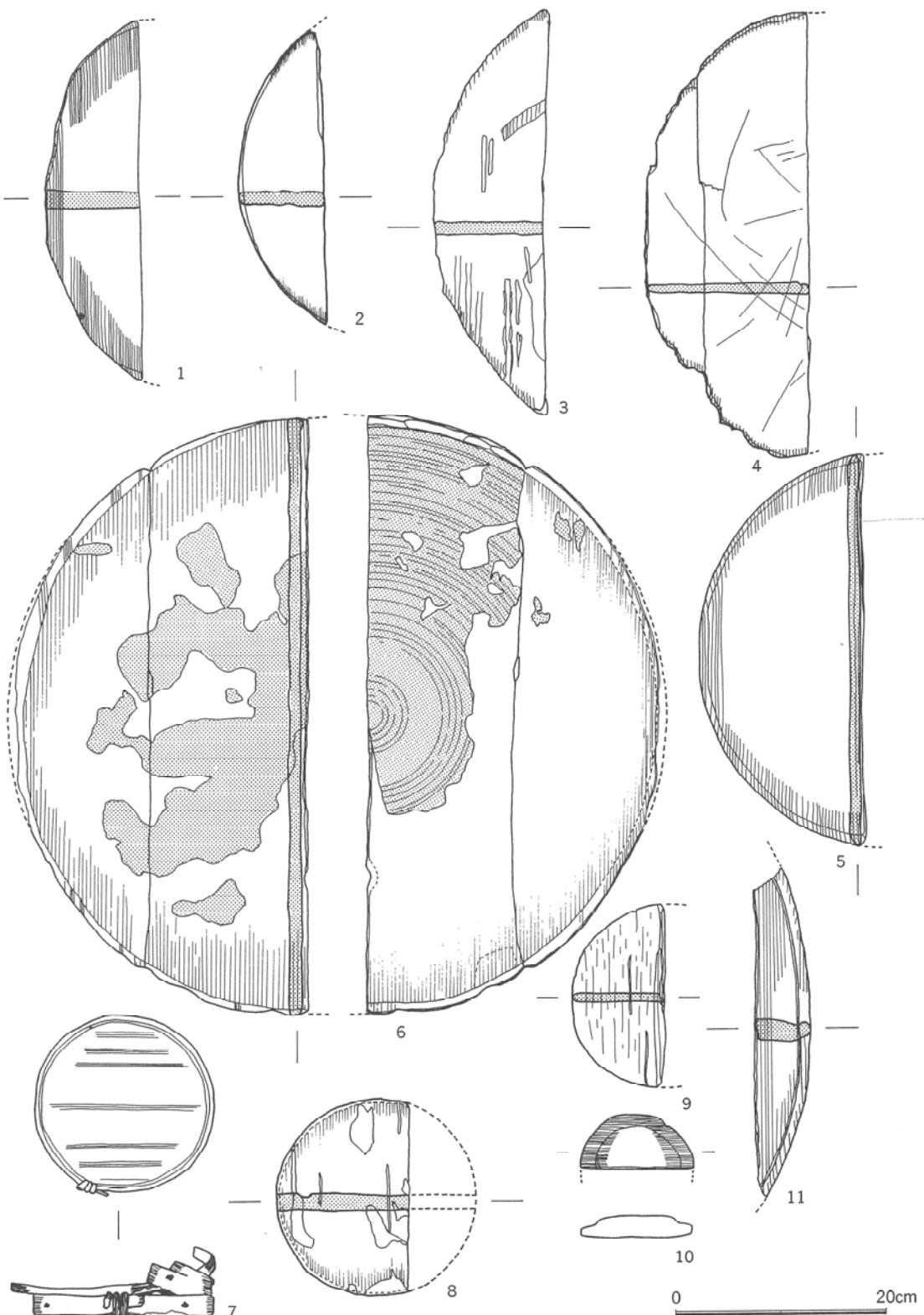
第18図 青磁・白磁・青白磁実測図



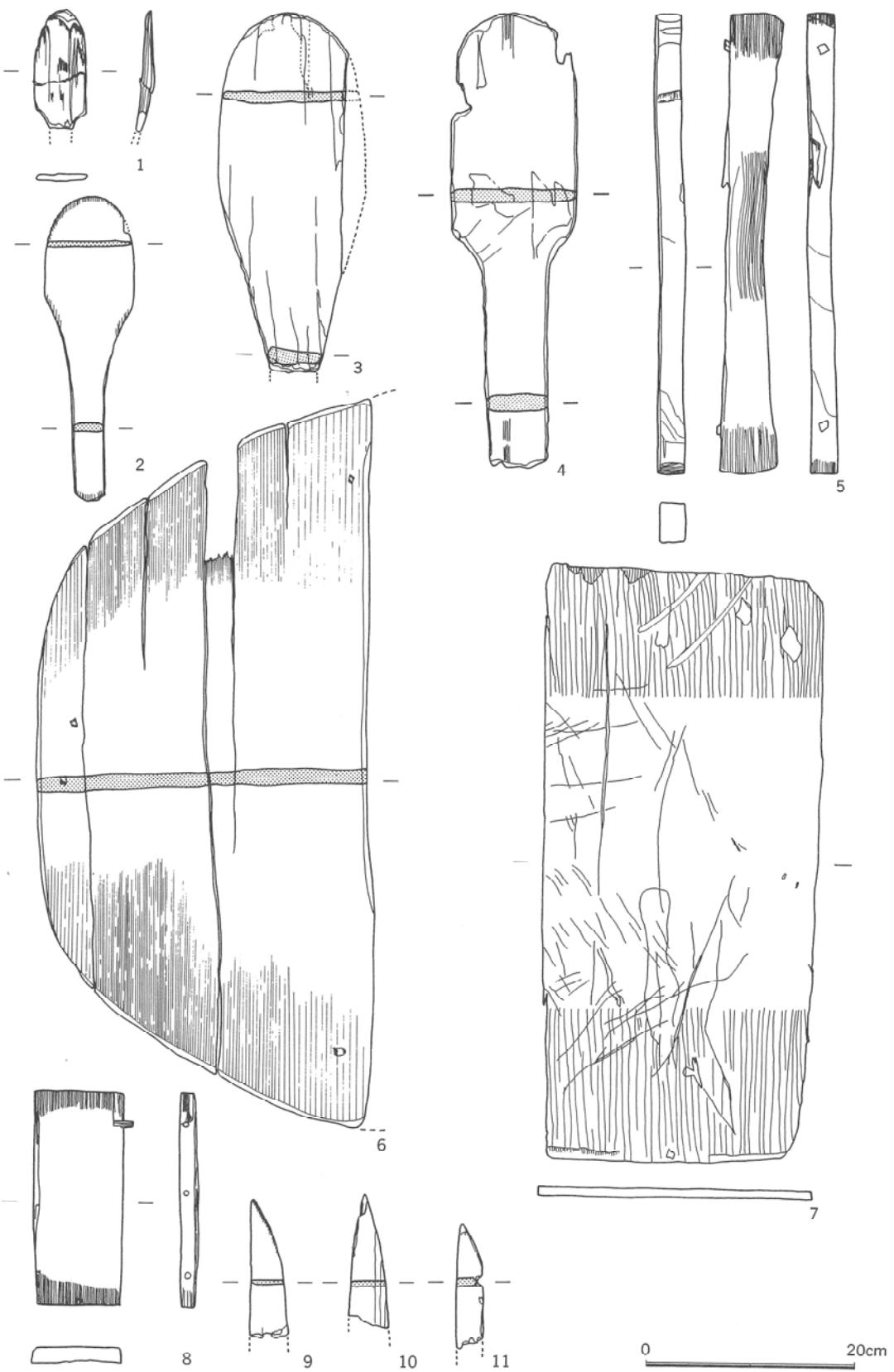
第19図 墨書板状品実測図



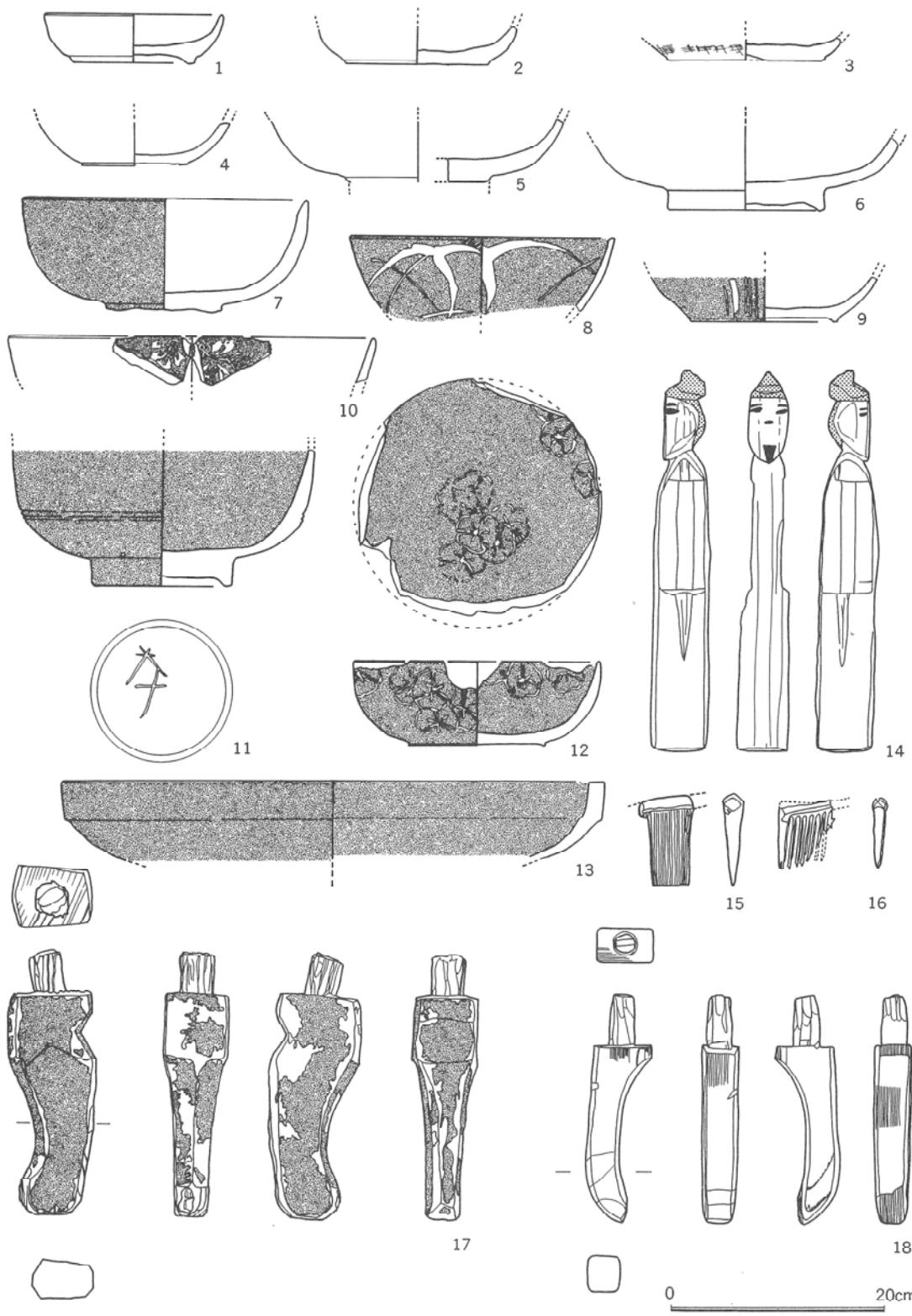
第20図 木製実測図(1)



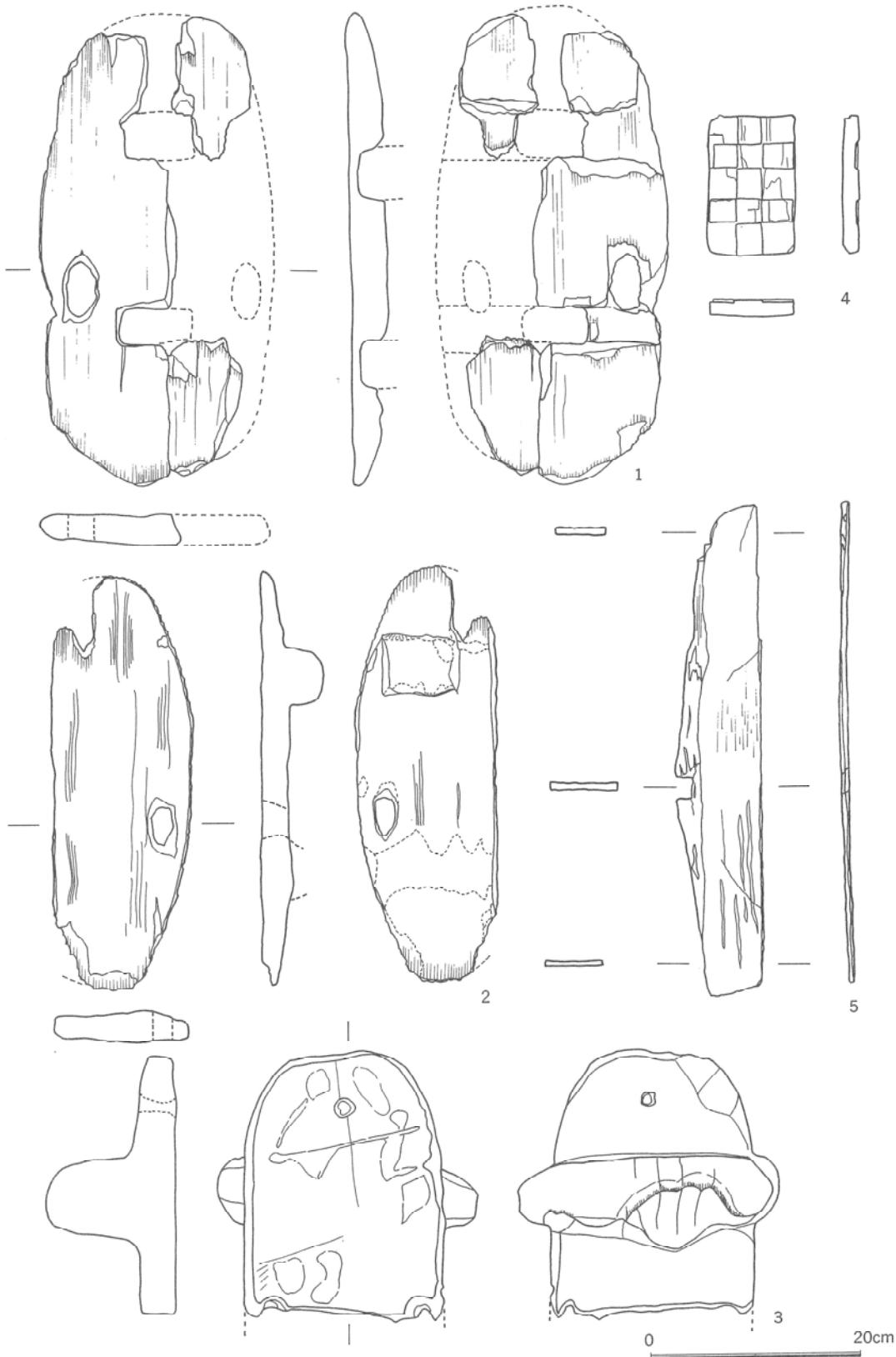
第21図 木製品実測図(2)



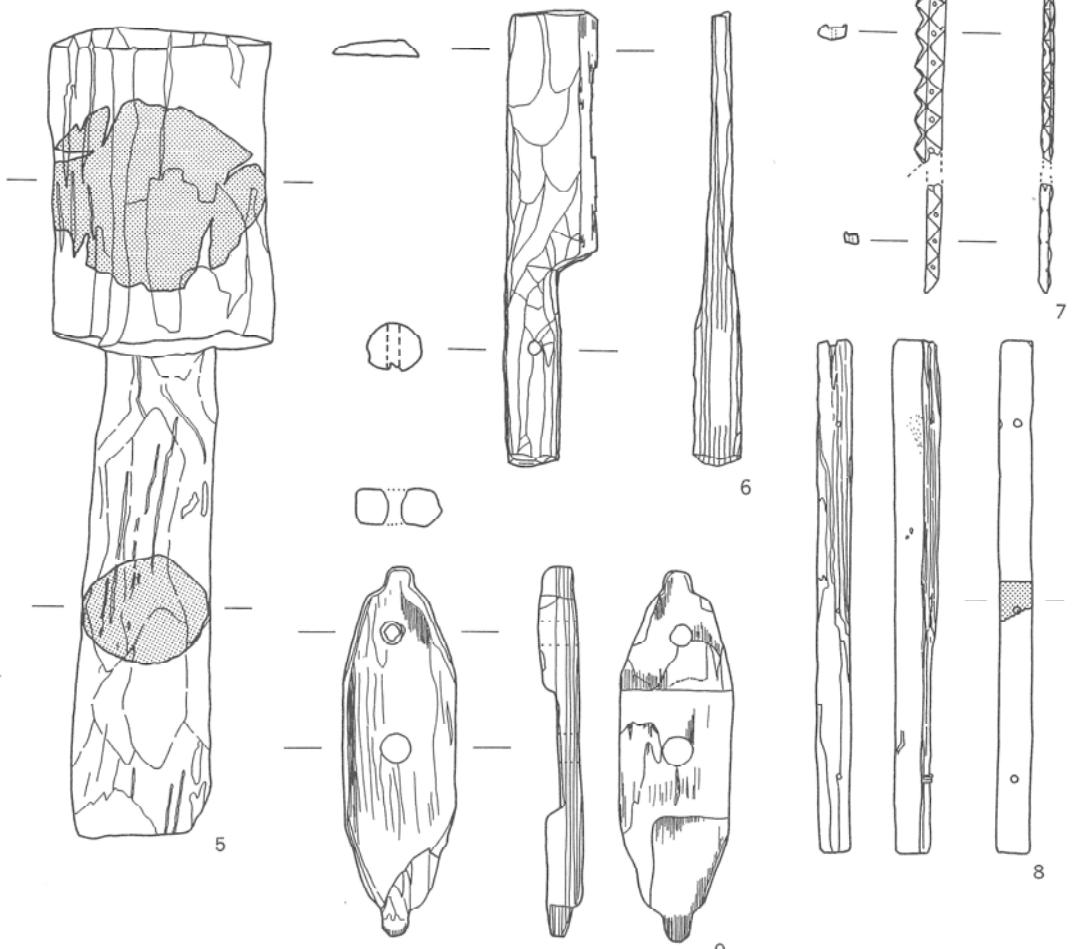
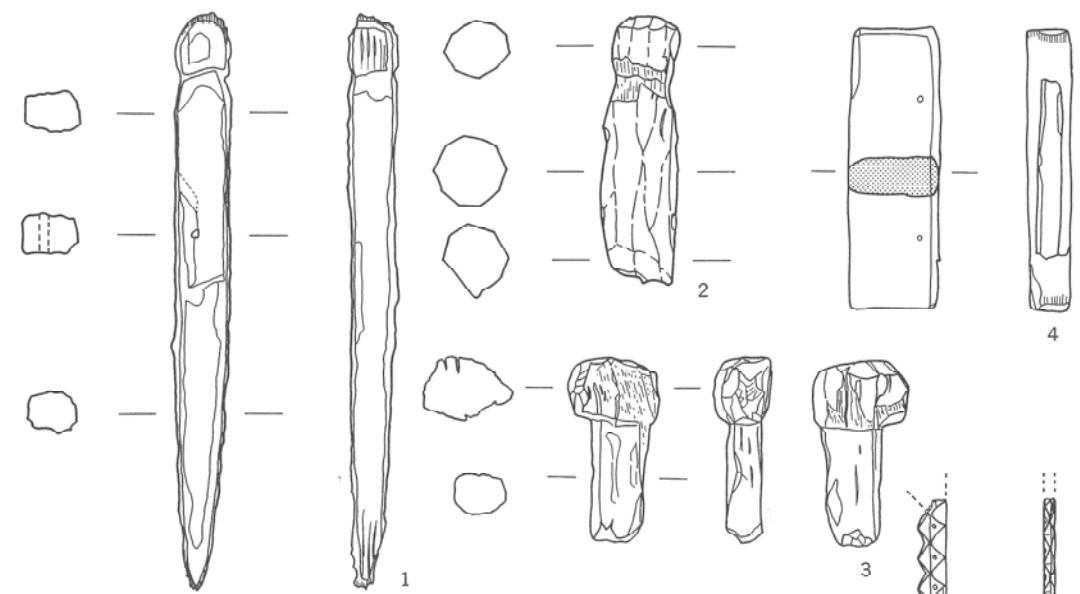
第22図 木製品実測図(3)



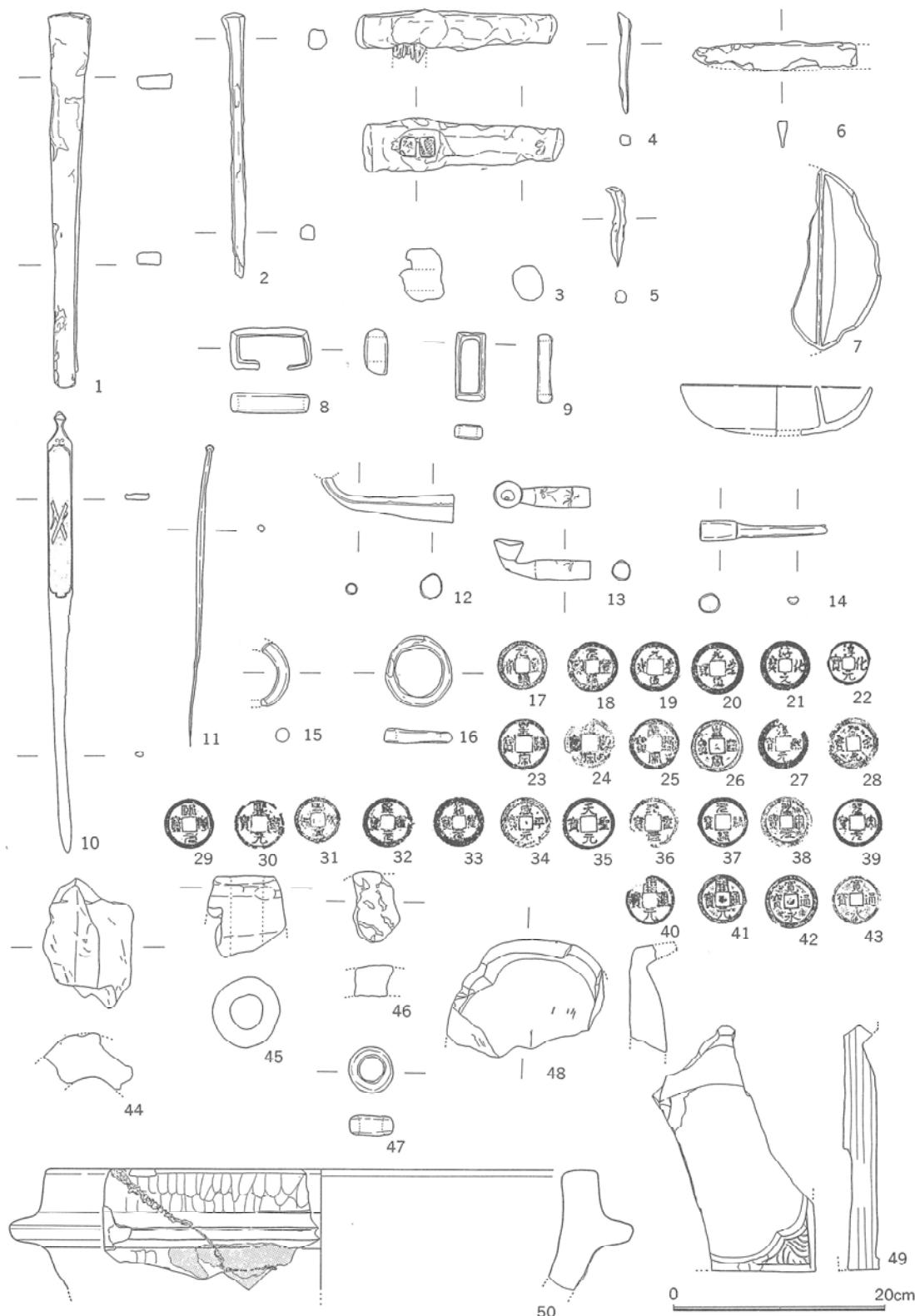
第23図 木製品実測図(4)



第24図 木製品実測図(5)



第25図 木製品実測図(6)



第26図 金属・土・石製品実測図



第27図 砥石実測図

表-2 出土土器・陶器観察表(1)

捕番号	器種	計測値(mm)			色調	調整技法	出土地点	捕番号	器種	計測値(mm)			色調	調整技法	出土地点			
		口径	底径	器高						口径	底径	器高						
8-1	か	皿	80	-	19	7.5Y R 5/4 にぶい褐色	手捏・指頭痕	S D206	10-5	珠洲系	甕	-	(158)	-	5PB 5/1 青灰色	条縞状タタキ 押圧痕・妙底	124-57-III	
8-2		〃	82	-	20	2.5Y 7/1 灰白色	手捏・指頭痕 口縁部まで	S D384	11-1		〃	-	-	-	5PB 6/1 青灰色	条縞状タタキ 内面ナデ	125-257-III	
8-3		〃	83	-	22	7.5Y 8/2 明褐色	手捏・指頭痕 底部内面	S D384	11-2		〃	-	-	-	5B 5/1 青灰色	条縞状タタキ 押圧痕	116-62-III	
8-4		〃	80	58	18	7.5Y 8/2 灰白色	手捏・指頭痕 口縁部ナデ	E P166	11-3		〃	-	-	-	7.5Y 6 灰色	条縞状タタキ 押圧痕	120-61-III	
8-5		〃	79	72	17	7.5Y 7/4 にぶい橙色	手捏・指頭痕 口縁部ナデ	S D141	11-4		〃	-	-	-	5PB 3 嘴青灰色	条縞状タタキ 押圧痕	119-60-III	
8-6		〃	(82)	(60)	11	2.5Y 8/2 灰白色	口縁部ナデ	S D141	11-5		〃	-	-	-	10Y 5/1 灰色	矢羽根状タタキ 押圧痕	124-57-III	
8-7		〃	82	56	15	7.5Y R 8/2 灰白色	口縁部ナデ	S D141	11-6		〃	-	-	-	10Y 7/1 灰白色	矢羽根状タタキ 押圧痕	118-50-III	
8-8		〃	(82)	48	24	7.5Y R 8/3 浅黄色	回転糸切り後 ケズリ、ナデ	S E205	11-7		擂鉢	-	-	-	2.5Y 7/4 灰黄色	3cmで21本 の卸目	156-56-III	
8-9		〃	(88)	51	20	2.5Y R 6/6 明赤褐色	回転糸切り ロクロナデ	S D141	11-8		〃	-	-	-	5B 3/1 青灰色	ロクロナデ	156-56-III	
8-10		〃	82	56	18	2.5Y R 6/4 にぶい橙色	回転糸切り ロクロナデ	120-56-III	11-9		〃	-	-	-	2.5Y 5/1 黄灰色	指押さえ片口	101トレーナ	
8-11	ら	〃	(89)	(66)	16	7.5Y R 7/2 明褐色	回転糸切り ロクロナデ	120-58-III	11-10		〃	-	-	-	N6 灰色	指押さえ片口	123-57-III	
8-12		〃	(90)	(65)	16	7.5Y R 6/6 橙色	回転糸切り 内面モミ痕	S K368	12-1		〃	(169)	-	-	5PB 5/1 青灰色	ロクロナデ	62トレーナ	
8-13		〃	115	72	27	10Y R 8/2 灰白色	回転糸切り ロクロナデ	S D101	12-2		〃	(264)	-	-	5Y 5/1 灰色	ロクロナデ 卸し目	S X196	
8-14		〃	-	(70)	-	7.5Y R 7/3 にぶい橙色	回転糸切り ロクロナデ	120-61-III	12-3		〃	-	-	-	N6 灰色	ロクロナデ 曲線卸し目	S D206	
8-15		〃	127	72	35	10Y R 8/2 灰白色	回転糸切り 底部板目痕	S E205	12-4		〃	(265)	-	-	5PB 4/1 暗青灰色	ロクロナデ 卸し目	125-52-III	
8-16		〃	120	75	35	7.5Y R 6/2 灰褐色	指頭痕 底部板目痕	S D141	12-5		〃	(320)	-	-	N5 灰色	1cmで7本の 卸し目	125-57-III	
8-17		〃	125	90	25	10Y R 7/2 にぶい黄橙色	指頭痕 底部板目痕	120-56-III	12-6		〃	(296)	-	-	N4 灰色	内面モミ痕 縫隙面に波状文	113トレーナ	
8-18		〃	(114)	(88)	25	5Y R 8/3 淡橙色	指頭痕 ロクロナデ	118-57-III	12-7		〃	(346)	-	-	5B 6/1 青灰色	ロクロナデ	118-62-III	
8-19		〃	(132)	(104)	25	10Y R 8/3 淡黄色	指頭痕 ロクロナデ	118-57-III	12-8		〃	(336)	-	-	N5 灰色	3cmで11本の 卸し目	118-62-III	
8-20		〃	(120)	(60)	31	7.5Y R 6/6 橙色	回転糸切り ログロナデ	S D206	12-9		〃	-	(128)	-	5PB 6/1 青灰色	静止糸切り 1.2cmで日本卸し目	21-48-III	
8-21		〃	(120)	(60)	27	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	回転糸切り ログロナデ	119-57-III	13-1		〃	-	(105)	-	5PB 3/1 暗青灰色	底部に草木状 庄痕	124-56-III	
8-22		〃	(146)	(90)	31	10Y R 7/3 明褐色	回転糸切り ログロナデ	120-58-III	13-2		〃	-	(146)	-	5PB 4 青灰色	静止糸切り	126-56-III	
8-23	珠洲系	壺	-	-	-	7.5Y 7/1 灰白色	矢車状スタンプ	120-61-III	13-3		〃	-	(120)	-	5PB 6/1 青灰色	静止糸切り 底部に草木状庄痕	39トレーナ	
8-24		〃	-	-	-	7.5Y 7/1 灰白色	矢車状スタンプ	119-58-III	13-4		〃	-	(136)	-	7.5Y 6/1 青灰色	静止糸切り 2.9cmで日本卸し目	93トレーナ	
8-25		〃	-	-	-	5PB 6/1 紫灰色	矢車状スタンプ	124-61-III	13-5		〃	-	(120)	-	10Y R 7/3 にぶい黄橙色	静止糸切り 底部に草木状圧痕	120-58-III	
9-1		〃	(148)	-	-	5B 5/1	16弁菊花紋の 押印	118-62-III	13-6		〃	-	(87)	-	N5 灰色	回転糸切り	119-50-III	
9-2		〃	(205)	-	-	7.5Y 6/3 オリーブ色	ログロナデ 灰かぶり	119-49-III	13-7		唐津焼	(137)	49	37	10Y R 6/6 明黄褐色	底部砂目	116-65-III	
9-3		〃	(225)	-	-	5PB 5/1 青灰色	ログロナデ 灰かぶり	118-62-III	13-8		〃	-	45	-	7.5Y 5/4 にぶい褐色	底部内面に 目痕	117-50-III	
9-4		〃	(258)	-	-	2.5Y 7/4 浅黄色	条縞状タタキ 押圧痕	121-50-III	13-9		〃	-	(46)	-	5PB 5/1 紫灰色		120-58-III	
9-5		〃	-	-	-	7.5Y 6/1 灰色	ヘラ描き沈線	121-50-III	13-10		常滑焼	鉢	-	(95)	-	10Y R 6/4 にぶい黄褐色	底部内面に 目痕	120-56-III
9-6		〃	-	-	-	5PB 6/1 青灰色	ヘラ描き沈線	117-49-III	13-11		陶器	山茶碗	(128)	44	-	5Y 7/2 灰白色	回転糸切り 高台にモミガラ痕	118-58-III
9-7		〃	-	-	-	5B 4/1 暗青灰色	樶目波状文	120-50-III	13-12		磁器	碗	-	(40)	-	5BG 7/1 明青灰色	染付け	128-61-III
9-8	系	甕	-	-	-	10Y R 6/1 褐灰色	樶目波状文	117-63-III	13-13		皿	-	-	-	10Y R 6/2 オーリーブ色		118-49-III	
9-9		甕	-	-	-	N4 灰色	ログロナデ	119-55-III	13-14		青磁	碗	-	-	10Y R 6/2 オーリーブ色		127-17-III	
9-10		〃	-	-	-	5PB 7/1 明青灰色	ログロナデ	128-57-III	13-15		磁	四耳壺	(99)	-	-	7.5Y 5/3 灰オーリーブ色		
9-11		〃	-	-	-	5PB 5/1 青灰色	ログロナデ	S P207	13-16		水瓶	(64)	-	-	10Y 7/2 灰白色	内外面淡緑 灰色釉		
9-12		甕	-	-	-	5PB 5/1 青灰色	ログロナデ	49トレーナ	14-1		戸陶器	〃	-	-	7.5Y 3/6 オーリーブ色	内外面淡緑 灰色釉	119-60-III	
9-13		甕	-	(135)	-	2.5Y 7/2 灰黄色	ログロナデ	121-50-III	14-2		戸陶器	〃	-	-	7.5Y 8/3 淡黄色	内外面淡緑 灰色釉	121-56-III	
9-14		甕	-	-	-	5PB 4/1 暗青灰色	条縞状タタキ 押印痕	118-55-III	14-3		戸陶器	鉢	-	(73)	-	7.5Y 7/2 灰白色	内外面淡緑 灰色釉	119-62-III
9-15		甕	-	-	-	7.5Y 7/1 灰白色	ログロナデ	126-56-III	14-4		戸陶器	〃	-	-	7.5Y 7/2 灰白色	内外面淡緑 灰色釉	122-54-III	
9-16		甕	-	-	-	7.5Y 8/2 灰白色	条縞状タタキ 押圧痕	S D207	14-5		戸陶器	〃	-	-	7.5Y 7/2 灰白色	内外面淡緑 灰色釉	122-54-III	
10-1	陶器	〃	(500)	-	-	N3 暗青色	ログロナデ	120-48-III	14-6		戸陶器	水瓶	(118)	-	-	7.5Y 7/2 灰白色	内外面淡緑 灰色釉	119-48-III
10-2		〃	-	-	-	N5 灰黑色	条縞状タタキ 押圧痕	S D206	14-7		戸陶器	水瓶	(120)	-	-	7.5Y 8/1 灰白色	内外面淡緑 灰色釉	120-55-III
10-3		〃	-	-	-	5PB 4/1 暗青灰色	条縞状タタキ 押圧痕	125-57-III	14-8		戸陶器	水瓶	(170)	(118)	30	7.5Y 7/2 橙色	底部内面にヘラ で格子目	118-58-III
10-4		〃	-	-	-	10Y 5/1 灰色	条縞状タタキ 押圧痕	S D206	14-9		戸陶器	水瓶	(142)	-	-	2.5Y 7/2 灰黄色	内外面淡緑 灰色釉	116-62-III

表-3 出土陶磁器観察表(2)

博 国 番 号	器 種	計 測 値 (mm)		色 調	調 整 技 法	出土地点	博 国 番 号	器 種	計 測 値 (mm)		色 調	調 整 技 法	出土地点				
		口径	底径						口径	底径	器高						
14-10	瀬戸系磁器	鉢III	(156)	-	-	7.5YR 5/6 明褐色	内外面淡綠灰色 釉	116-61-III	16-15		碗	(170)	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	飛雲文	124-54-III
14-11		"	(156)	-	-	7.5YR 5/6 明褐色	底部内面にヘラ で格子目	117-62-III	16-16		"	(160)	-	-	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	劃花文	X0
14-12		"	-	(50)	-	2.5Y 7/3 淡黃色	回転糸切り 底部内面格子目	121-57-III	16-17		"	(172)	-	-	7.5Y 7/3 オリーブ黄色	草花文	121-55-III
14-13		"	-	(75)	-	5 Y 6/2 灰オリーブ色	回転糸切り 底部内面格子目	118-58-III	16-18		"	(174)	-	-	10Y 7/2 灰白色	草花文	123-55-III
14-14		"	-	(86)	-	2.5Y 7/2 灰黄色	回転糸切り 底部内面格子目	121-56-III	16-19		"	-	-	-	10GY 6/1 緑灰色	草花文	SD206
14-15		甕	-	-	-	2.5YR 5/2 灰赤色	ロクロナデ 灰かぶり	120-61-III	16-20		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	飛雲文	118-59-III
14-16		"	-	-	-	2.5YR 4/3 にせい赤褐色	ロクロナデ	118-54-III	16-21		"	-	-	-	10Y 5/2 オリーブ灰色	口縁内部 一条の沈線	120-60-III
14-17		"	-	-	-	5 YR 5/1 褐灰色	ロクロナデ	120-62-III	16-22		"	-	-	-	2.5GY 7/1 明オリーブ灰色	飛雲文	121-54-III
14-18		"	-	-	-	5 Y 4/3 暗オリーブ色	自然釉	118-62-III 120-61-III	16-23		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	草花文	125-54-III
14-19		"	-	-	-	5 Y 5/4 にせい赤褐色	押印	SX196	16-24		"	-	-	-	7.5Y 5/3 灰オリーブ色	飛雲文	124-54-III
14-20		"	-	-	-	2.5YR 4/3 にせい赤褐色	押印	96トレンチ	16-25		"	-	-	-	10Y 7/2 灰白色	飛雲文	SD207
15-1	青	碗	(114)	-	-	7.5GY 6/1 緑灰色	蓮弁文	126-56-III	16-26		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	飛雲文	SX196
15-2		"	(138)	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	SX196	16-27		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	飛雲文	120-49-III
15-3		"	(154)	-	-	5 GY 7/1 明オリーブ灰	蓮弁文	X0	16-28		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	飛雲文	SD384
15-4		"	(160)	-	-	7.5GY 6/1 緑灰色	蓮弁文	115-63-III	16-29		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	飛雲文	118-56-III
15-5		"	(180)	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰	蓮弁文	119-48-III	17-1		"	(170)	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	草花文	123-56-III
15-6		"	(170)	-	-	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	蓮弁文	SD206	17-2		"	(138)	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	草花文	122-56-III
15-7		"	(166)	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	118-48-III	17-3		"	-	-	-	7.5Y 7/3 浅黄色	草花文	124-57-III
15-8		"	(178)	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	119-60-III 120-61-III	17-4		"	-	-	-	7.5Y 5/2 灰オリーブ色	飛雲文	119-49-III
15-9		"	(176)	-	-	7.5Y 6/2 灰オリーブ色	蓮弁文	100トレンチ	17-5		"	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	草花文	125-56-III
15-10		"	(166)	-	-	7.5Y 5/3 灰オリーブ色	蓮弁文	125-55-III	17-6		"	(143)	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	無文	124-54-III
15-11		"	(152)	-	-	7.5GY 6/3 オリーブ黄色	蓮弁文	SK176	17-7		"	(152)	-	-	7.5GY 6/1 緑灰色	雷光文	SD206
15-12		"	(160)	-	-	7.5GY 6/1 緑灰色	蓮弁文	121-54-III	17-8		"	-	-	-	7.5Y 7/3 浅黄色	雷光文	118-61-III
15-13		"	(154)	-	-	5 G 7/1 明緑灰色	蓮弁文	113トレンチ	17-9		"	(163)	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	猫搔手文	121-56-III
15-14		"	(166)	-	-	7.5GY 6/1 緑灰色	蓮弁文	SK180	17-10		"	(166)	-	-	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	猫搔手文	124-54-III
15-15		"	(170)	-	-	5 GY 6/1 オリーブ灰色	蓮弁文	120-61-III	17-11		"	-	-	-	10YR 5/3 にせい黄褐色		125-59-III
15-16		"	(156)	-	-	5 GY 7/1 明オリーブ灰	蓮弁文	177-63-III	17-12		"	-	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色		119-50-III
15-17		"	(180)	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	117-49-III	17-13		"	-	-	-	10GY 7/1 明緑灰色		
15-18		"	(204)	-	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	120-54-III	17-14		"	-	-	-	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	SK180	
15-19		"	-	-	-	7.5GY 6/1 緑灰色	蓮弁文	117-61-III	17-15		"	-	-	-	5 GY 6/1 オリーブ灰色	50トレンチ	
15-20		"	-	-	-	5 GY 7/1 明オリーブ灰色	蓮弁文	X0	17-16		"	-	54	-	7.5GY 7/2 明緑灰色	SD198	
16-1	磁	"	-	-	-	7.5GY 7/1 明オリーブ灰色	蓮弁文	119-50-III	17-17		"	-	(59)	-	7.5GY 6/1 オリーブ灰色	5トレンチ	
16-2		"	-	-	-	7.5Y 5/2 灰オリーブ色	蓮弁文	120-60-III	17-18		"	-	62	-	7.5Y 5/2 オリーブ灰色	STAMP	
16-3		"	-	-	-	10GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	SD206	17-19		"	-	66	-	7.5Y 5/3 灰オリーブ色	SK180	
16-4		"	-	-	-	7.5Y 5/3 灰オリーブ色	蓮弁文	118-49-III	17-20		"	-	(66)	-	7.5Y 7/3 浅黄色	疊付部は露胎	
16-5		"	-	-	-	10Y 5/2 オリーブ灰色	蓮弁文	119-55-III	17-21		"	-	(53)	-	10Y 5/2 オリーブ灰色	高台内部は露胎	120-54-III
16-6		"	-	-	-	5 Y 6/6 オリーブ色	蓮弁文	120-60-III	17-22		"	-	(58)	-	10Y 5/2 オリーブ灰色	高台中央に露胎	119-59-III
16-7		"	-	-	-	5 Y 5/3 灰オリーブ色	蓮弁文	118-59-III	17-23		"	-	(62)	-	10GY 7/1 明緑灰色	疊付部は露胎	34トレンチ
16-8		"	-	-	-	7.5Y 5/2 灰オリーブ色	蓮弁文	120-57-III	17-24		"	-	(45)	-	10GY 7/1 明緑灰色	疊付部は露胎	121-48-III
16-9		"	-	(52)	-	10GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文 疊付部は露胎	119-48-III	17-25		"	-	(29)	-	10GY 8/1 明緑灰色	疊付部は露胎	121-56-III
16-10		"	-	(48)	-	10Y 6/2 オリーブ色	蓮弁文 底部内面草花文	118-58-III	17-26		"	-	(32)	-	10GY 7/1 明緑灰色	疊付部は露胎	120-59-III
16-11		"	-	-	-	10Y 7/2 灰白色	劃花文	SD266	17-27		"	-	(132)	-	7.5GY 7/1 明緑灰色	疊付部は露胎	118-60-III
16-12		"	-	-	-	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	飛雲文	122-55-III	17-28		"	-	(140)	-	10GY 7/1 明緑灰色	蓮弁文	120-56-III
16-13		"	(170)	-	-	10Y 6/2 オリーブ色	飛雲文	119-55-III	17-29		"	-	-	-	10GY 6/1 緑灰色		119-62-III
16-14		"	(168)	-	-	10Y 7/2 灰白色	飛雲文	119-55-III	17-30		"	(117)	-	-	10GY 8/1 明緑灰色		126-55-III

表-4 出土陶磁器観察表(3)

捕団番号	器種	計測値(mm)			色調	調整技法	出土点	捕団番号	器種	計測値(mm)			色調	調整技法	出土点	
		口径	底径	器高						口	径	底径	器高			
17-31	青	壺	-	-	10G Y 7/1 明緑灰色	蓮弁文	118-60-III	18-14	青磁	皿	(96)	-	-	7.5Y 6/1 緑		115-63-III
17-32		碗	-	(66)	-	10G Y 8/1 明緑灰色	内面に陰刻の 蓮弁文	124-57-III	18-15	碗	(116)	-	-	7.5G Y 8/1 青緑灰色	口ハゲ	121-48-III
17-33		壺	-	-	10G Y 7/1 明緑灰色	内面に陰刻の 蓮弁文	S D141	18-16	ノ	(140)	-	-	5G Y 7/1 明オリーブ灰色	口ハグ	120-48-III	
17-34		瓶 カ	(67)	-	10G 7/1 明緑灰色		46トレンチ	18-17	ノ	(113)	-	-	5G Y 7/1 明オリーブ	口ハゲ	117-50-III	
17-35		花生カ	-	(78)	-	10G 7/1 明緑灰色	底部は露胎	S X196	18-18	ノ	(110)	-	-	10G Y 8/1 明緑灰色	口ハゲ	S X196
17-36			-	-	10G Y 7/1 明緑灰色	破損部に漆での 接合痕	92トレンチ	18-19	白	ノ	(141)	-	-	5G Y 7/1 明オリーブ灰色	口ハゲ	126-57-III
17-37		香炉カ	-	-	10G 7/1 明緑灰色	ほぼ直角に屈曲 凹凸	121-54-III	18-20		碗	(144)	-	-	2.5G Y 7/1 明オリーブ灰色	口ハゲ	93トレンチ
17-38		ノ	-	-	10G 7/1 明緑灰色	ほぼ直角に屈曲 する。	120-59-III	18-21		皿	-	(54)	-	5G Y 7/1 明オリーブ灰色		121-54-III
18-1		皿	(104)	(45)	22	7.5Y 7/3 オリーブ黄色	雷光文	118-54-III		ノ	-	(44)	-	2.5G Y 8/1 灰白色	底部は露胎	S D206
18-2		ノ	(108)	(45)	26	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	雷光文	118-50-III		瓶	(38)	-	-	10G Y 8/1 明緑灰色		S D229
18-3		ノ	(102)	(50)	20	7.5Y 7/3 浅黄色	雷光文	×○		梅瓶カ	-	-	-	10Y 6/2 オリーブ灰色		129-61-III
18-4		ノ	(106)	(50)	20	10Y 7/1 灰白色	雷光文	×○		取手	-	-	-	7.5G Y 7/1 明緑灰色		119-59-III
18-5		ノ	(94)	(36)	23	5G Y 7/1 明オリーブ灰色	雷光文	S K368		香炉カ	-	-	-	2.5G Y 7/1 明オリーブ灰色		S P198
18-6		ノ	-	(48)	-	10Y 6/2 オリーブ灰色	雷光文	S D206		壺	-	-	-	2.5G Y 6/1 オリーブ灰色		119-55-III
18-7		ノ	-	(43)	-	7.5Y 6/3 緑灰色	雷光文	119-48-III		瓶カ	-	-	-	5G Y 7/1 明オリーブ灰色	内部一部釉付着	119-49-III
18-8		ノ	-	(45)	-	10Y 7/2 灰白色	雷光文	118-49-III	青	皿	(131)	(42)	28	10G Y 7/1 明緑灰色	疊付・高台内面 は露胎	109トレンチ
18-9		ノ	-	(45)	-	10Y 7/2 灰白色	雷光文	97トレンチ		ノ	(140)	-	-	10G Y 7/1 青緑灰色	口縁部に一条の 沈線	116-62-III
18-10		ノ	-	(60)	-	7.5G Y 6/1 緑灰色	雷光文	S D206		ノ	(128)	-	-	10G Y 7/1 明緑灰色		121-48-III
18-11		ノ	96	34	26	7.5G Y 7/3 明緑灰色	無文	S D206		瓶	(35)	-	-	10G Y 7/1 明緑灰色		120-59-III
18-12		ノ	(100)	-	-	7.5Y 7/3 浅黄色	体部外面に雷光 文カ	120-57-III	白	皿	-	(52)	-	10G Y 8/1 明緑灰色	外面下部から底 部にかけて露胎	120-54-III
18-13		ノ	(106)	-	-	10Y 7/2 灰白色		120-58-III								

表-5 出土金属製品観察表

( ) は残長

捕団番号	種別	計測値(mm)			調整技法	出土点	捕団番号	種別	計測値(mm)			調整技法	出土点	
		縦	横	厚					縦	横	厚			
26-1	鑿	180	16.5	6	上端部殴打によるつぶれ、 断面長方形	116-62-III	26-9	装飾金具	33	12.5	6.5	平面形は長方形 断面は横円形		118-56-III
26-2	針	(126)	8	9	先端部欠損、断面正方形	121-56-III	26-10	笄	211	11.5	25	木の板状の浮彫り模様を 施こす、断面横円形		128-60-III
26-3	金 鍔	20	29	21	方形の孔に楔を打ち込んだ 柄部分一部残存する	E B147	26-11		144	3	3	断面円形		35トレンチ
26-4	釘	48.5	5	5	断面正方形	116-61-III	26-12	煙	(135)	63	0.5	火皿欠損		126-57-III
26-5		38	5	6	断面円形	116-61-III	26-13		19	46	1	草花文を掘り施す。		126-57-III
26-6	刀子	(78.5)	13	4.5	刃部のみ、梗部は平坦	120-50-III	26-14		60.5	9.5	1	断面円形		126-56-III
26-7	鉄 器	口径 (92)	底径 (59)	器高 24	斜に仕切りがある	125-55-III	26-15	鉄 輪	33.5	32	4.5	約1/2欠損 断面円形		122-57-III
26-8	装飾金具	39	19.5	9	一部切れ目が入る 断面横円形	S D141	26-16		33.5	32	5	断面円形		122-57-III

表-6 出土土製品・石製品観察表

( ) は残長

捕団番号	種別	計測値(mm)			特 徴	出土点	捕団番号	種別	計測値(mm)			特 徴	出土点	
		縦	横	厚					縦	横	厚			
26-44	ふいごの羽口	(62.5)	(43.5)	21	表面ナデ		27-4	砥	(43)	48	25	断面は台形、3面に擦痕		118-20-III
26-45		(38)	(32)	9	円筒形・表面ナデ		27-5		(64)	34	24	断面は正方形、端部広がる	E B260	
26-46		(34)	(22)	14	表面溶変	S D206	27-6		(62)	38	11	断面は長方形、端部厚く広がる		119-58-III
26-47	土輪	22	21	7	平面円形・断面横円形	122-55-III	27-7		(59)	51	22	断面は台形、3面に擦痕		120-57-III
26-48	硯	(74)	(51)	17.5	四葉硯・陸部欠損・海部擦痕	126-56-III	27-8		(70)	31	14	断面は長方形、3面に研ぎ溝	S K180	
26-49		127	(50)	(18)	陸部上面に沈線を巡らせ、隅に 文様を陰刻する	S X196	27-9		(42)	28	28	断面は台形、3面に擦痕		121-50-III
26-50	石鍋	口径 (260)	底径 一	器高 -	滑石製・厚さ19mm/m、外側細か いケズリ・破損部塗による接合	S D198	27-10		(45.5)	38	11	断面は台形、端部尖らせる		120-58-III
27-1	砥	88	33	33	中央に円形の孔を穿つ。 断面は台形	119-55-III	27-11		(33.1)	41.5	20	断面は長方形、擦痕1面のみ		120-57-III
27-2		(94)	40	15	断面は長方形。端部細くなる。	×○	27-12		(46.5)	26.5	9	断面は長方形、端部は厚く広がる	120-63-III	
27-3	石	(62)	46	16	断面は長方形。端部厚くなる。	116-61-III								

表-7 出土木製品観察表

( ) は残長

捕番 図号	種別	計測 値 (mm)			調 整 技 法	出土地点	捕番 図号	種別	計測 値 (mm)			調 整 技 法	出土地点
		縦	横	厚					縦	横	厚		
19-1	駒形	34	17.5	3	端部面取り「柱馬」	E P193	21-11	盤	(157)	(26)	10	断面「凹」形板目	S D101
19-2	状墨 書	95	39	10	上部に穿孔「ぼろは」	S D384	22-1	ら	(58)	25	3	下端削り尖らす。	S X196
19-3		169	44	3.5	「客客」動物の絵	S D101	22-2		145	41	4	両端削り丸味を帯びる	S K368
19-4		93	19.5	3	「三四」	S D101	22-3		(173)	(58)	6	下端削り丸味を帯びる	S E205
19-5		(25)	75	3	墨書銘不明	S K269	22-4		218	60	6	下端丸味を帯びる	S D206
19-6		(115)	(19)	3.5	墨書銘不明	S D101	22-5	部財	222	12	19	両端に木釘が残る	S D196
19-7	品板	93	(19.5)	3	墨書銘不明	S D101	22-6	蓋板	(350)	(160)	7	4カ所に木釘の穴が残る	S D197
20-1	加工 木	16.4	7	3.5	全体荒削り、断面長方形	S K194	22-7	折敷	282	(133)	4	刃物による傷がある	S D204
20-2		14.9	6.5	6.5	全体荒削り、断面台形	S K194	22-8	部財	104	42.5	8	1カ所に木釘、2カ所に木釘の穴	S X196
20-3		15.9	6	6.5	全体荒削り、断面方形	S K194	22-9	加工 木	(67)	18	2	端部片面を削り尖らす	S X196
20-4		174	7.5	4	全体荒削り、断面長方形	S K339	22-10		(64.5)	19	2.5	端部片面を削り尖らす	S X196
20-5		164	7	5	全体荒削り、断面長万形	S K339	22-11		(61)	13	4	端部に片面を削り尖らす 四角い切り込み	S X196
20-6		151	(6.5)	5	全体荒削り、断面台形	S K339	23-1	漆器 椀	口径 (158)	底径 85	器高 4	内外面黒漆	S K368
20-7		153	7	4	全体荒削り、断面長方形	S K339	23-2	椀	-	67	-	-	S K368
20-8		165	5	5	全体荒削り、断面方形	S K339	23-3		-	70	-	外面に傷	S D197
20-9	工 品	162	8	7	全体荒削り、断面方形	S K339	23-4	漆器 椀	-	50	-	内外面黒漆	120-58-III
20-10		218	4	4	全体荒削り、断面長方形	S K340	23-5	椀	-	68	-	高台部欠損	E P325
20-11		(143)	5.5	4	全体荒削り、断面方形	S K340	23-6	漆 器	-	74	-	内外面黒漆	124-56-III
20-12		(160)	6.5	5	全体荒削り、断面台形	S K340	23-7		135	55	50.5	内外面黒漆	S D206
20-13		152	6.5	5.5	全体荒削り、断面長方形	S K340	23-8		(126)	-	-	内外面黒漆・矢漆で施文・鶴か	S D171
20-14		164.5	7.5	4	全体荒削り、断面長方形	S K340	23-9		-	(70)	-	内外面黒漆・外面矢漆で施文・縞織	120-58-III
20-15		164	7.5	5	全体荒削り、断面正方形	S K340	23-10	椀	(174)	-	-	内外面黒漆・矢漆で施文・花文	S D206
20-16		(170)	15.5	9	全体荒削り、断面楕円形	S X196	23-11		-	(46)	-	内外面黒漆・底部に線刻体部に3本の沈綿	E P325
20-17		(127)	9	5	端部削り尖らす。断面楕円形	S X196	23-12		(118)	(32)	40	内外面黒漆・矢漆で施文・花文	S E205
20-18		(101)	15	5	端部削り尖らす。断面楕円形	S X196	23-13	漆器盤	(260)	-	-	内外面黒漆	S D206
20-19	箸	(187)	125	5	端部削り尖らす。断面楕円形	S D101	23-14	人形	180	22	26	椀は組木か、鳥帽子、眉・目・口 ヒゲは墨書き	117-62-III
20-20		(144)	9	6	端部削り尖らす。断面楕円形	S D196	23-15	櫛	44	(25)	9.5	墨漆塗り	S K269
20-21		258	7	4.5	端部削り尖らす。断面楕円形	S D269	23-16		29	(25)	5	黒漆塗り	S D206
20-22		228	8	5	端部削り尖らす。断面楕円形	S D101	23-17	脚	126	29	18.5	全面黒漆塗り ほぞの断面円形・脚断面長方形	116-64-III
20-23		207	6.5	4	端部削り尖らす。断面楕円形	S D101	23-18		108	16	17	ほぞの断面円形 脚の断面長方形	116-64-III
20-24	底	210	7.5	4	端部削り尖らす。断面楕円形	S D101	24-1	下	226	(92)	15	差歎式・差歎柄孔は2本の溝と方形 の穴を穿つ。	S D206
20-25		189	7	6	端部削り尖らす。断面楕円形	S K269	24-2		(199)	(64)	(14)	連歎式・後歎は欠損	S D197
20-26		222	7	6	端部削り尖らす。断面楕円形	S K269	24-3		(124)	(123)	(62)	連歎式・歎は台形を呈し厚い (36mm/m)	S K368
20-27		206	6	4	端部削り尖らす。断面楕円形	S K269	24-4	加工木	67	40	8	凹凸のある一松模様を掘り込む	S X196
20-28		203	7	6	端部削り尖らす。断面楕円形	S K269	24-5	草履状 木製品	236	(41)	3	両端を削り形を整える。 中央に方形の切り込み	S D203
21-1		(170)	(44)	8	角ばる円形・柾目	S X196	25-1	加工 木	230	22	16	下端を削り尖らす。上端は一条の溝 通らせ、丸味をつける。	119-62-III
21-2		139	(40)	5.5	円形・柾目	S D141	25-2		(107)	30	28	一方の端部寄りに切り込み端部は面 端部は面取り	S D206
21-3		(194)	(51)	6	円形・板目	S D198	25-3		75	35	26	下部は切り込まれ細い円形上部は 楕円形	S X196
21-4	板	211	(77)	5	円形・板目・線刻	S D141	25-4	部材	112	36	16	一万の端部に長万形の穴を穿つ 2カ所に、木釘の穴	S D203
21-5		182	(77)	5	円形・柾目・断面台形	118-61-III	25-5	砧	323	85	76	楕部・柄部とともに断面は円形	S E205
21-6		283	(140)	6.5	円形・断面「凹」形・両面炭化	E B168	25-6	部材	182	36	18	柄部に木釘の穴・柄部断面は円形、 齒部は台形	S D101
21-7		83	85	9	円形・柾目	S X196	25-7	材	(109)	11	4	凹凸のある三角形を掘り込む。各々 三角形を中心木釘穴	S D198
21-8		94	(62)	8	底抜けに木釘でとめる 円形・板目	S X196	25-8		205	12	15	一部欠損、14ヶ所に木釘、2カ所に 木釘穴	S D197
21-9	板	88	(43)	4	円形・板目	S X196	25-9	糸巻	147	45	15	中心部と、一方の端部に円形の穴を 穿つ。	S X196
21-10		蓋力	(26)	53	10	円形・断面「凹」形	S X196						

表-8 大樁遺跡出土古銭一覧表

挿図番号	錢種	初鑄年(西暦)	出土地点	挿図番号	錢種	初鑄年(西暦)	出土地点
26-17	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	118-58-III	26-31	寛永通宝	日本 寛永年間(1624~1643)	120-55-III
26-18	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	118-58-III	26-32	熙寧元宝	北宋 熙寧元年(1068)	119-59-III
26-19	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	118-56-III	26-33	紹聖元宝	北宋 紹聖元年(1094)	125-56-III
26-20	元豊通宝	北宋 元豊元年(1078)	119-60-III	26-34	咸平元宝	北宋 咸平元年(998)	S K 201
26-21	淳化元宝	北宋 淳化元年(990)	35トレンチ	26-35	天聖元宝	北宋 天聖元年(1023)	120-60-III
26-22	淳化元宝	北宋 淳化元年(990)	S D 202	26-36	天聖元宝	北宋 天聖元年(1023)	112-57-III
26-23	皇宋通宝	北宋 宝元年(1039)	118-54-III	26-37	元祐通宝	北宋 元祐元年(1086)	116-65-III
26-24	皇宋通宝	北宋 宝元2年(1039)	118-58-III	26-38	聖宋元宝	北宋 建中靖国元年(1101)	S X 196
26-25	皇宋通宝	北宋 宝元2年(1039)	118-58-III	26-39	聖宋元宝	北宋 建中靖国元年(1101)	125-56-III
26-26	皇宋通宝	北宋 宝元2年(1039)	125-57-III	26-40	開元通宝	唐 武徳4年(621)	118-56-III
26-27	淳熙元宝	南宋 淳熙元年(1174)	123-57-III	26-41	開元通宝	唐 武徳4年(621)	121-57-III
26-28	聖宋元宝	北宋 建中靖国元年(1101)	118-58-III	26-42	寛永通宝	日本 寛永年間(1624~1643)	124-57-III
26-29	熙寧元宝	北宋 熙寧元年(1068)	120-58-III	26-43	寛永通宝	日本 寛永年間(1624~1643)	S D 202
26-30	熙寧元宝	北宋 熙寧元年(1068)	119-57-III				

## 第V章 まとめ

今回の調査は、昭和62年度県営ほ場整備事業（月光川左岸地区）に係る緊急発掘調査である。調査期間は、昭和62年4月15日～同年8月7日までの、延べ74日間である。発掘調査を行った総面積は3,534m<sup>2</sup>である。

### 1 遺構について

検出された遺構は掘立柱建物跡3, 柵木列1, 井戸跡4, 土壙5, 溝跡7, 柱穴及びピット92, 性格不明遺構2である。掘立柱建物跡については、遺構内からの遺物が少なく明確な時期は不明である。しかしS B250建物跡とS A10柵木列との軸線はほぼ同じで、同時存在の可能性が高い。またS B250は構成する柱跡の付近の柱穴, S K180土壙に残る柱穴状の掘り込みと礎板状の板, あるいはS D141溝跡内に残る柱穴から、建て替えられたものと考えられる。周囲の柱穴, 土壙に入り込んだ遺物から13C頃にS B250が建てられたものと推測する。なおS B250以前の建物の時期にS A10が存在したかは現在のところ不明である。同様にS B251・S B270建物跡も軸線はS A10とほぼ同じで、同時存在の可能性が高いと考えられが、明確な時期については現在のところ不明である。S A10柵木列は昨年度分布調査に続く3.7mを検出している。南限の検出は不可能であったが、西側については来年度以降の調査によって検出されることが期待される。井戸跡については12C代と考えられるかわらけが出土しているS E205以外は、出土遺物も少なく、またS E171・S E186のように井戸跡としては疑問の残る遺構がある。これらの遺構は現在のところ大きくとらえて、12C後～14Cにかけて営まれたものと考えられる。遺構の性格としては、今回の調査区外に

あたる柵木列内の施設を中心とした集落あるいは付属施設としてとらえることができる。今後遺構及び遺構どうしの詳細な検討の必要性を感じるところである。

## 2 遺物について

出土した遺物は、かわらけ、珠洲系陶器等の陶器類、青磁等の磁器類、錢貨、木製品、石製品、金属製品がある。特に磁器類は小破片ながら県内でも有数の436点の出土があり、遺跡の性格について多くの問題を提起していると言える。

種別毎に見ていくと、かわらけは13C以降と考えられるA類、12C後と考えられるB1類、13C中以降と考えられるB2類とに分けられる。陶器類でも特に資料が充実している珠洲系陶器については、12C～14Cのものが主流を占める。越前系、瀬戸系陶器については13C後～14C前頃が考えられる。また少量ではあるが、16C後頃の唐津焼等もみとめられる。青磁、白磁、青白磁については12C中～14C中頃のものが主流となり、16C後頃の青磁も若干ながらみとめられる。その他の遺物については時期詳細の不明なものが多いが、主流となる陶磁器類と同時期と考えたい。

## 3 今後の課題

大柄遺跡は、当地区に残る地名等からも、本遺跡の所在する遊佐町を含む周辺地域の中心的な位置を占めていたことがうかがえる。しかし本遺跡に関する文献が皆無に等しく、文献からの解明は困難であると考えられる。今回の調査では出土遺物から、12C～14C頃にかけて営まれた遺跡の一部であることは明らかになったが、性格等についてはいまだ不明である。今後、本遺跡の中心となる施設の存在が想定される柵木列内の調査が行われることにより、時期や性格等において、より詳細なことが明らかになることを期待する。また出土遺物については、文字資料の増加も十分に考えられることから、文献以外の文字資料からのアプローチが期待される。また、いわゆる珠洲系陶器が、珠洲焼であるか、あるいは在地窯のものであるかの問題や、陶磁器類の流通経路等も今後に残された大きな課題といえる。

### 参考・引用文献

- 中橋掬泉「新撰古銭大鑑」 大文館書店 1958  
佐藤庄一他「庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第1集 1974  
高堀勝喜・吉岡康暢他「珠洲法住寺3号窯」石川県古窯跡第2次調査報告 石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会 1977  
檜崎彰一他「世界陶磁全集3 日本中世」 1977  
長谷部楽爾他「世界陶磁全集12 宋」 1977  
横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」「研究論集4」 九州歴史資料館 1978  
田口昭二「美濃焼」 ニューサイエンス社 1983  
名和達朗他「分布調査報告書(12)山形県埋蔵文化財調査報告書第94集 1985  
名和達朗他「分布調査報告書(13)山形県埋蔵文化財調査報告書第96集 1986  
中田 英他「千葉地東遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986  
亀井明徳「日本貿易陶磁史の研究」 同朋社 1986  
野末浩之「初期珠洲系陶器生産について」「研究紀要5」 愛知県陶磁資料館 1986  
名和達朗他「分布調査報告書(14)山形県埋蔵文化財調査報告書第110集1987  
松下正司他「草戸千軒町遺跡」 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

# 図 版

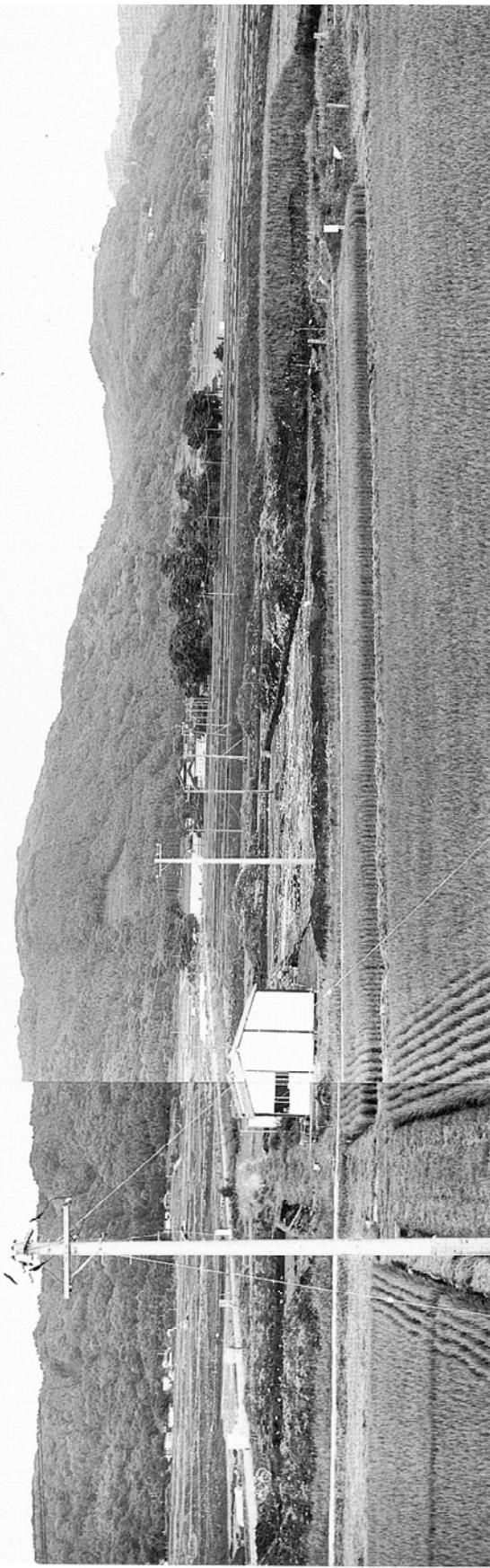


遺跡遠景（南西から）

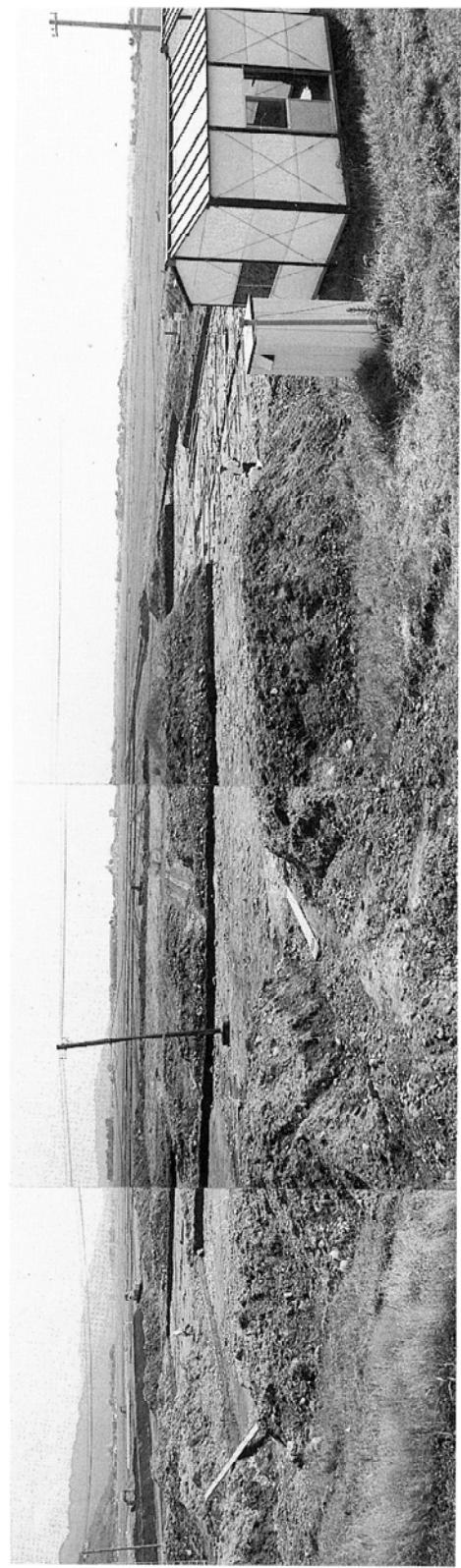


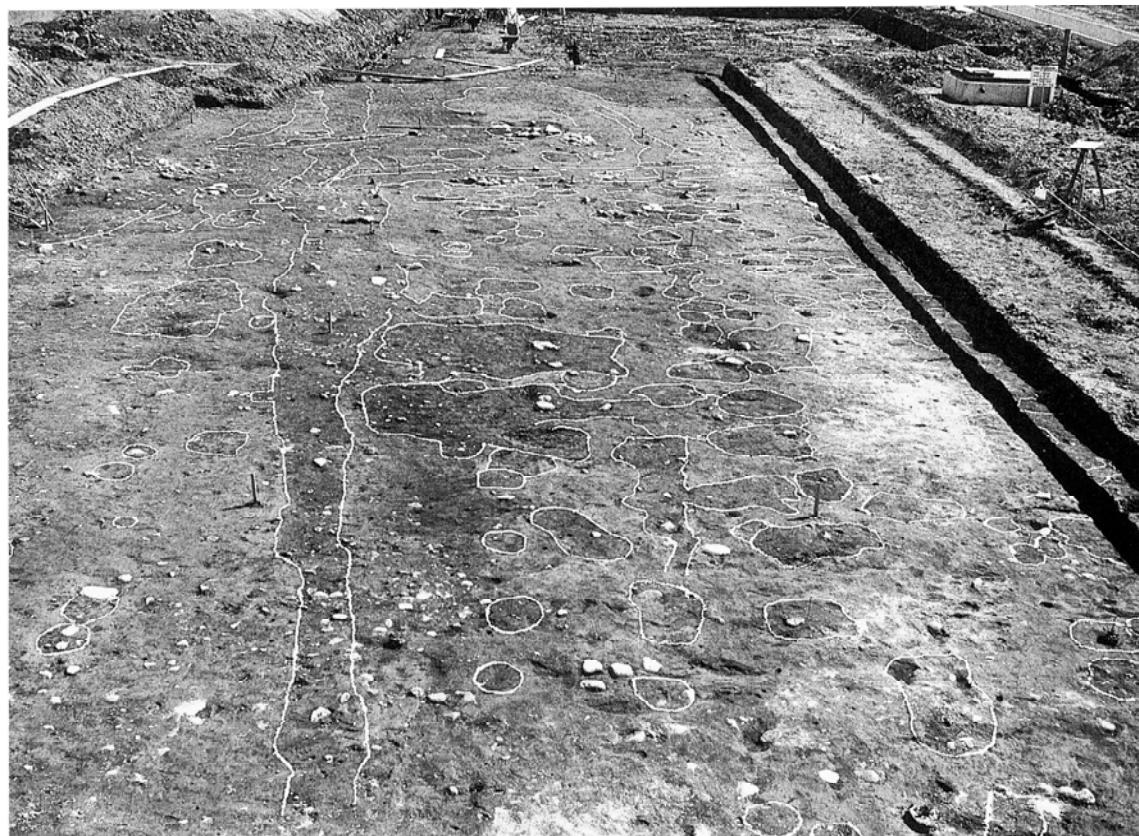
E 区土層断面

調査区近景（西から）



調査区近景（北東から）





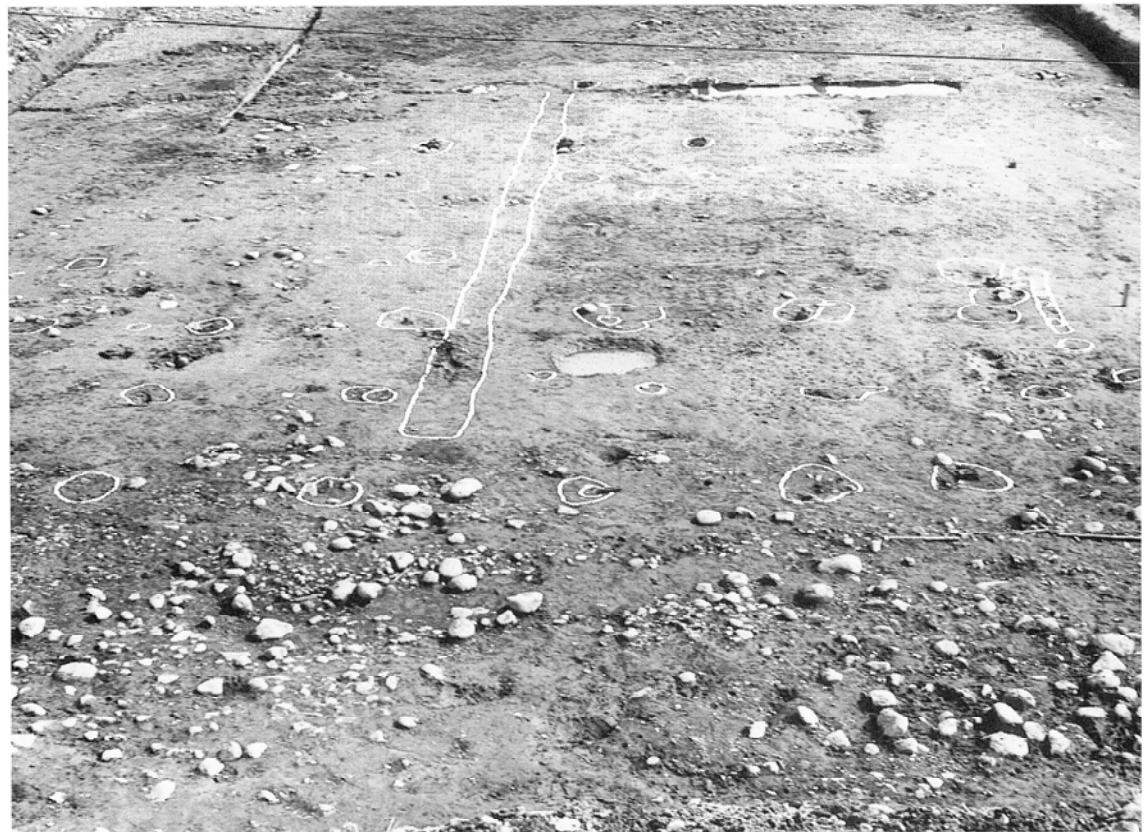
D区遺構検出状況（北から）



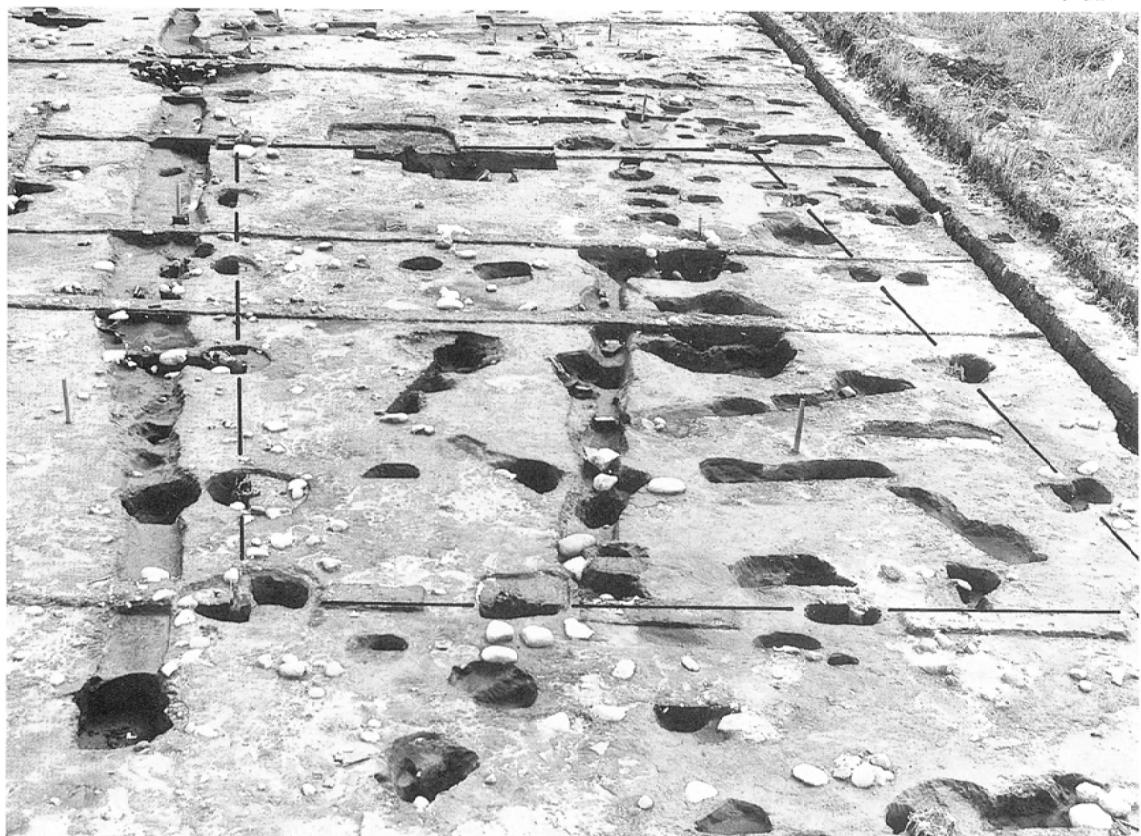
D区遺構検出状況（東から）



E 区遺構検出状況（東から）



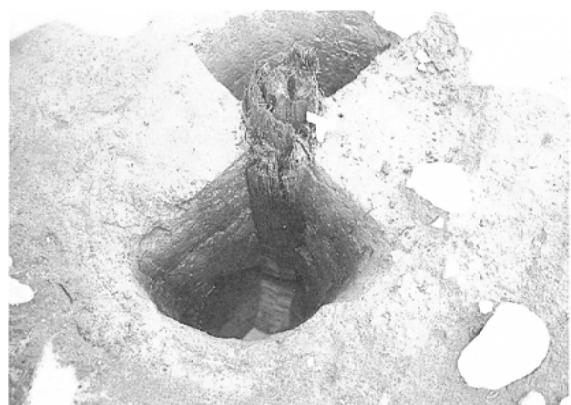
F 区遺構検出状況（北から）



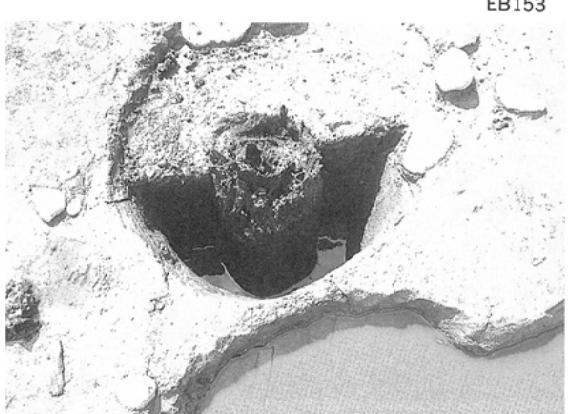
S B 250建物跡（北から）



EB153



EB154



EB155



EB165



S B 251・270建物跡（北から）



EB256



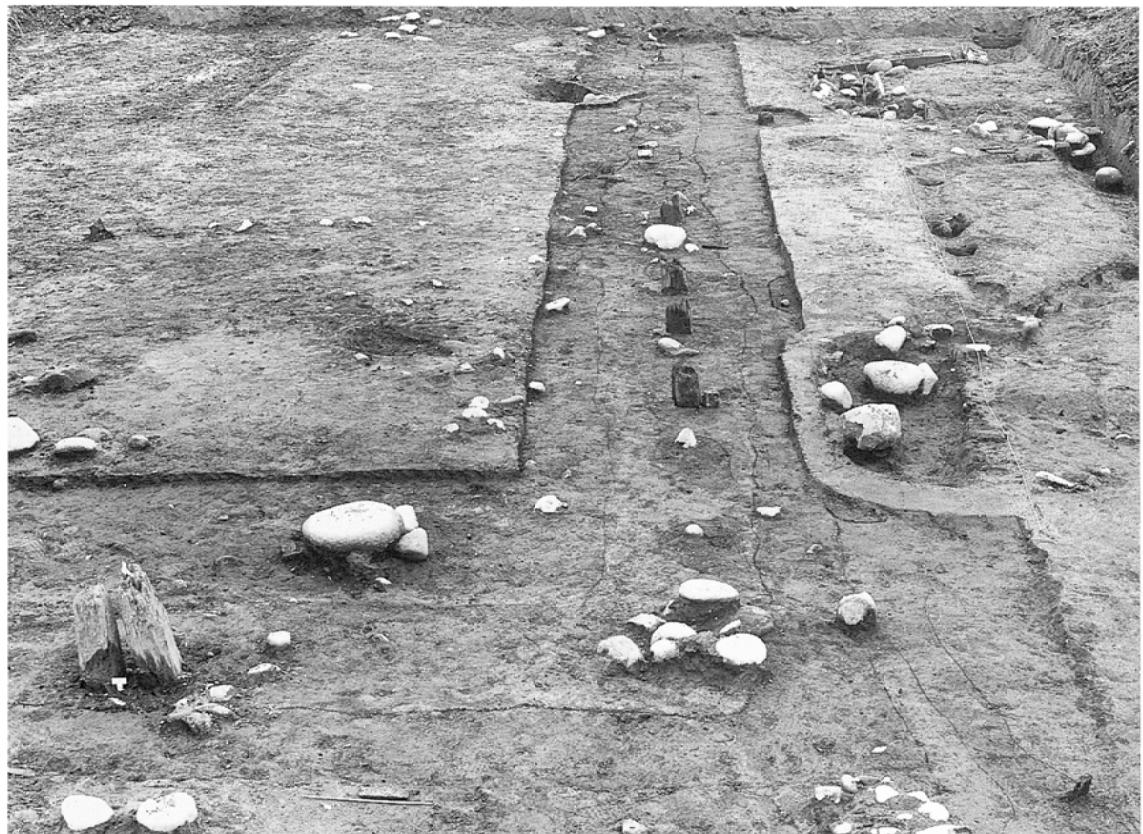
EB257



EB262



EB263



S A 10 柵木列 (昭和61年度東から)



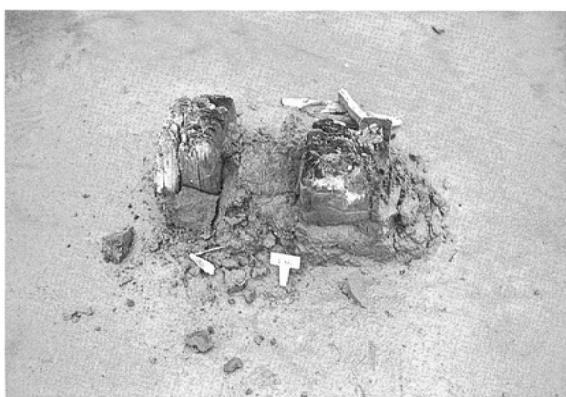
SA10 柵木列 (北から)



EA133



EA134



EA136



SE171 土層断面



SE171(西から)



SE186 検出状況(南から)



SE186 完掘状況(南から)



SE205 検出状況(東から)



SE205(南から)



SE205 底面横桟 (南から)



SE338 完掘状況 (南から)



SD141 遺物出土状況(北から)



SK191 土層断面(南から)



SK199 土層断面(南から)



SK368 土層断面(南から)



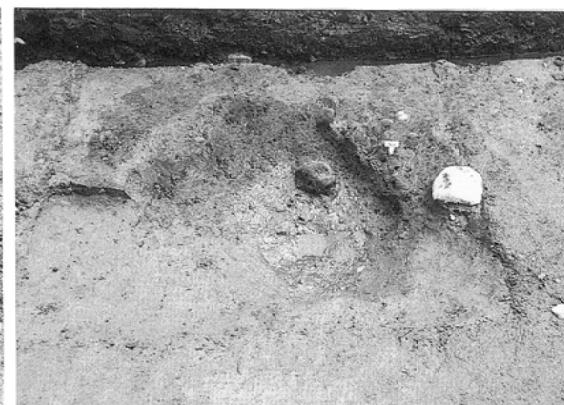
SK269 検出状況(南から)



SK269 土層断面(西から)



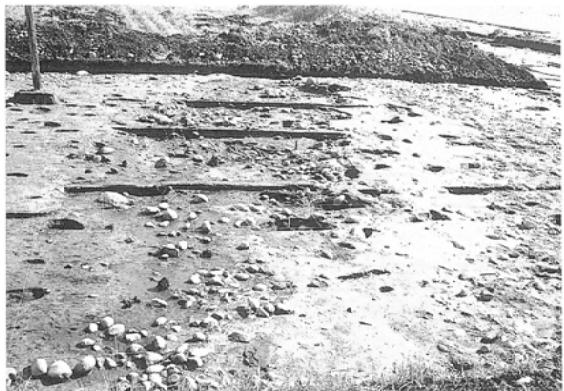
SK269 木片出土状況(西から)



SK269 完掘状況(西から)



SD207.208(北から)



SD206(北から)



EP 167(東から)



EP 168(東から)



RP303 出土状況



RW363 出土状況

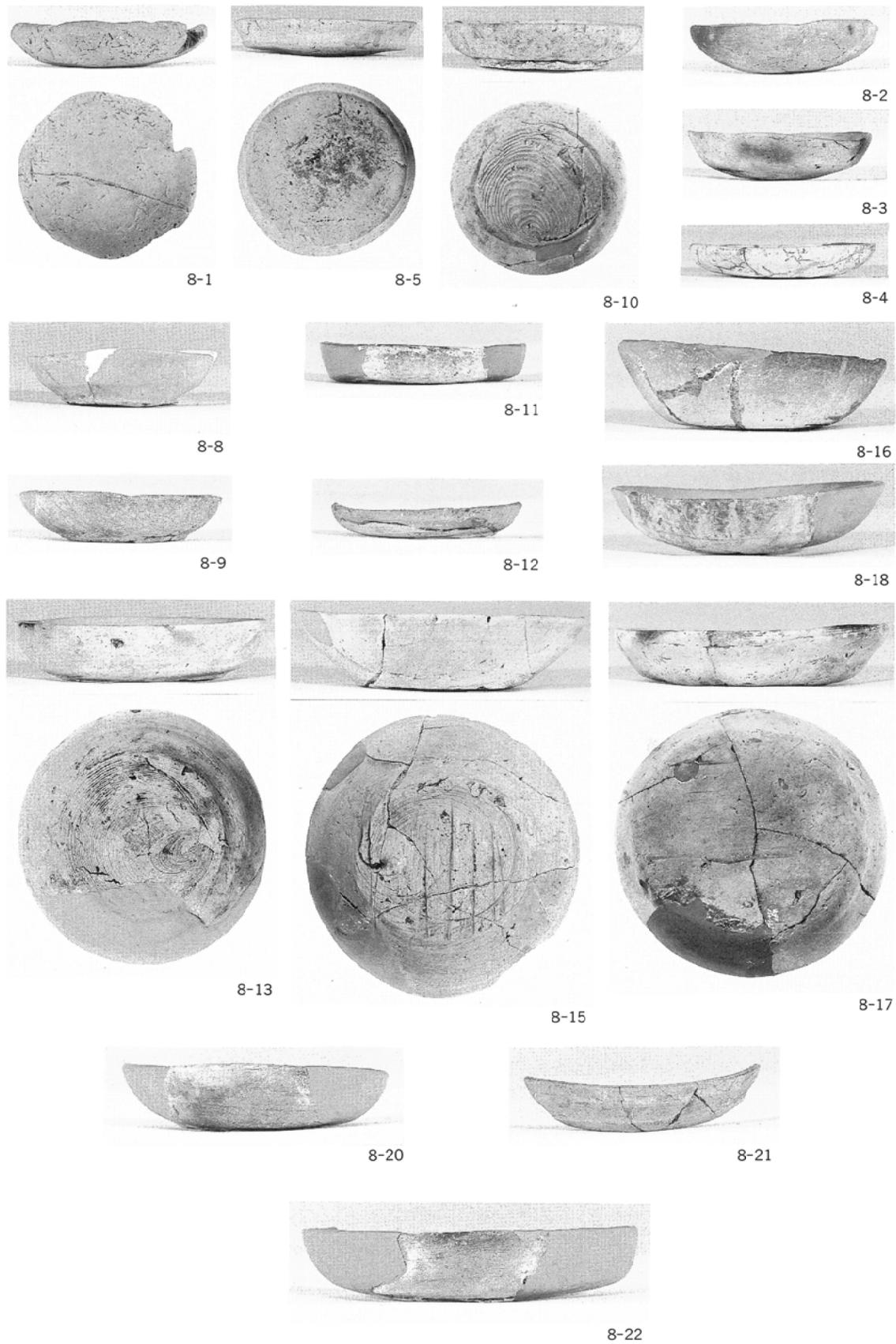


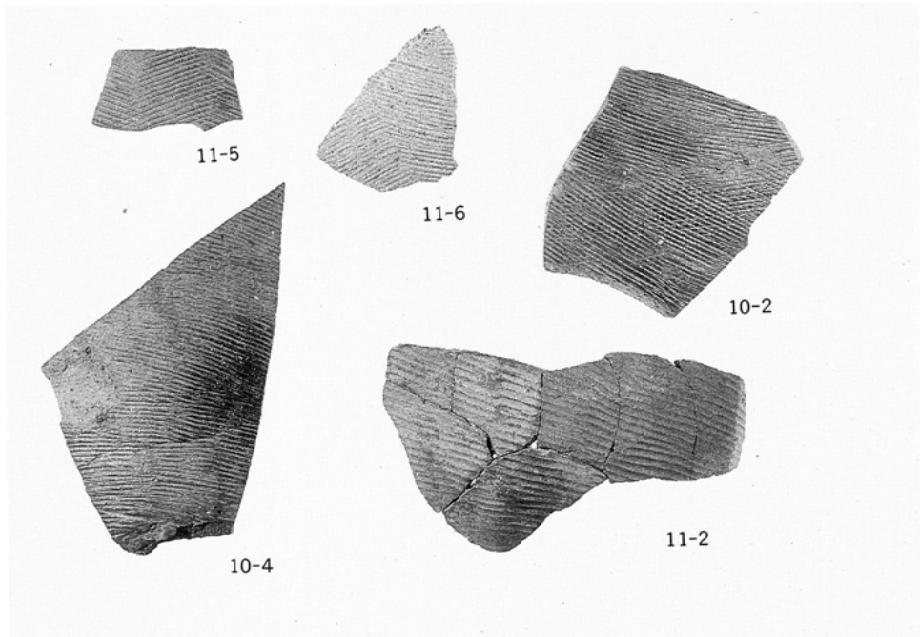
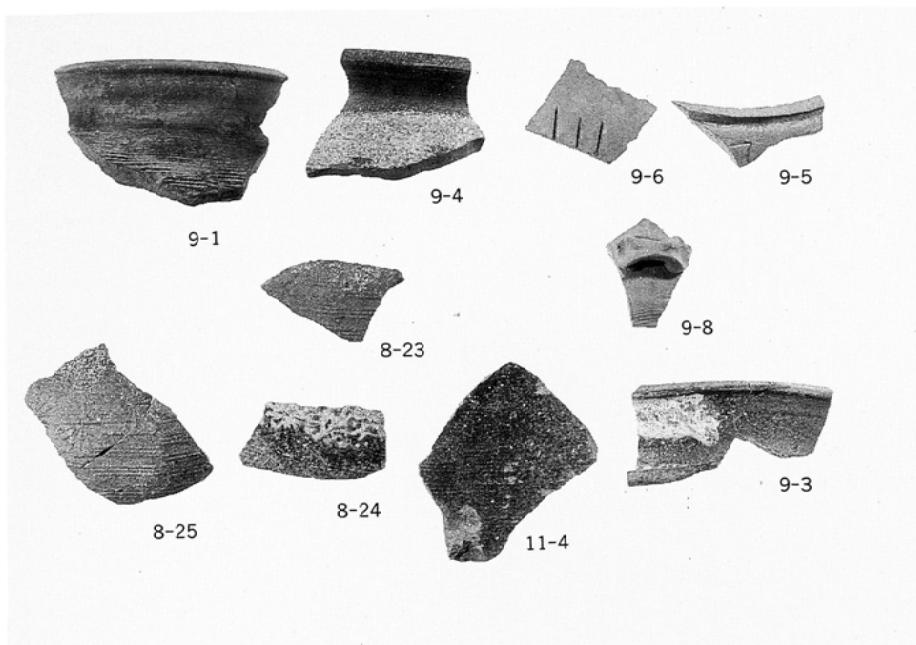
RW367 出土状況

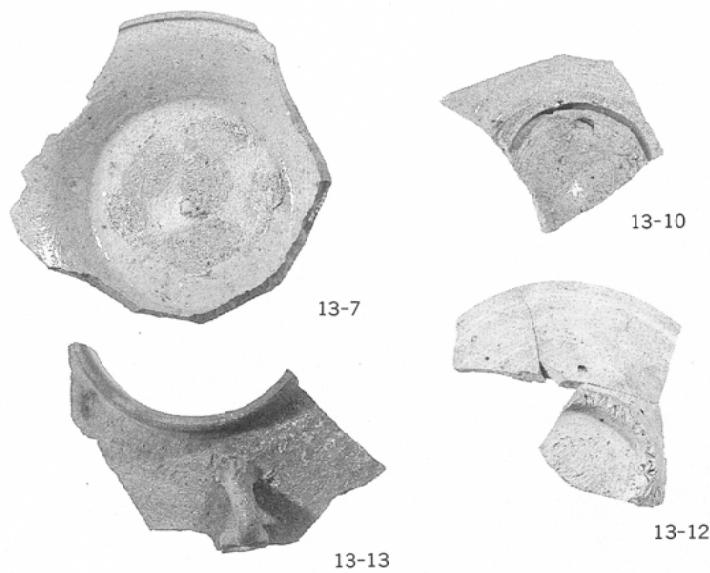
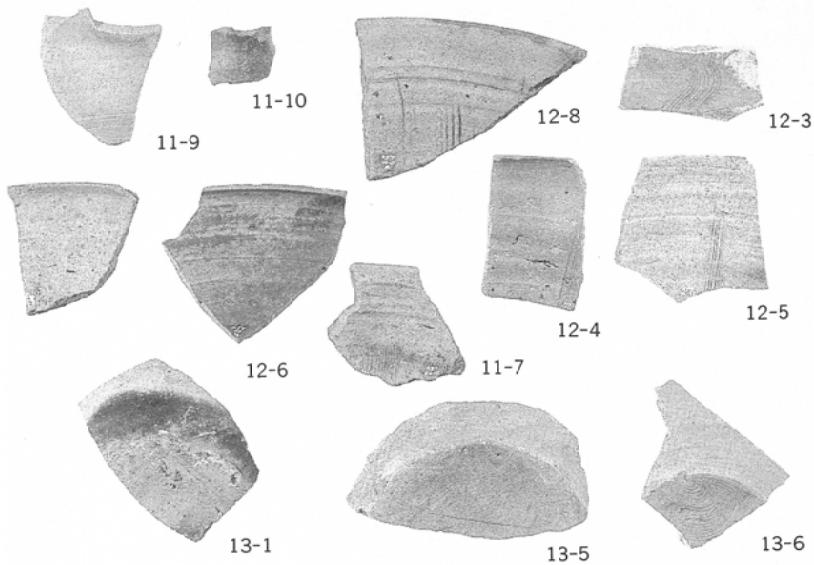


調査風景

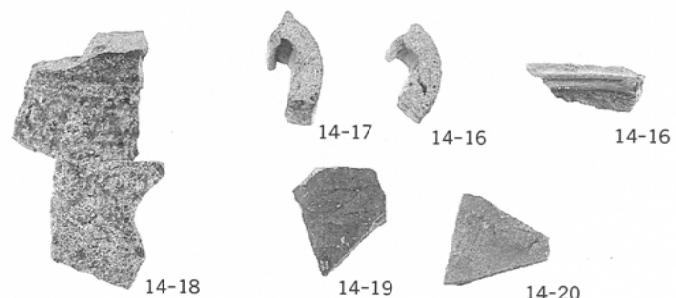
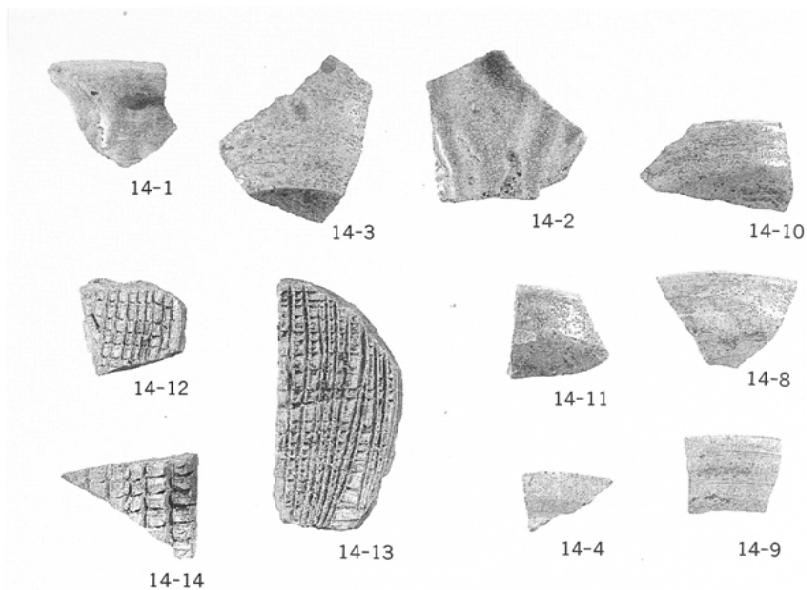
図版11 かわらけ

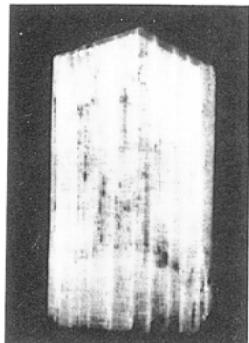




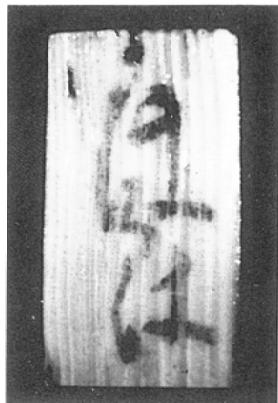


13-13

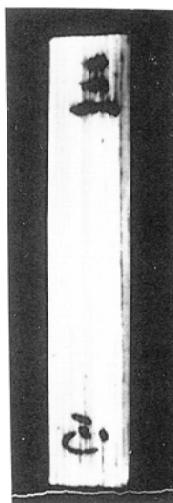




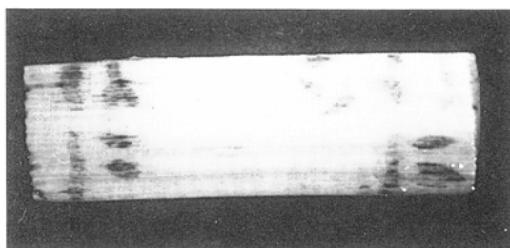
19-1



19-2



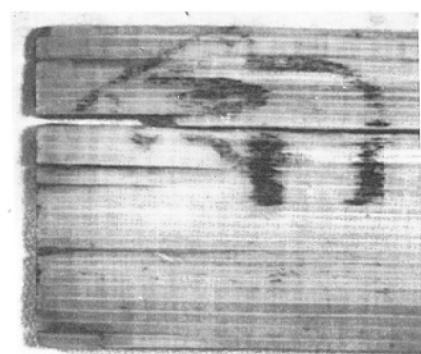
19-4



19-5



19-3



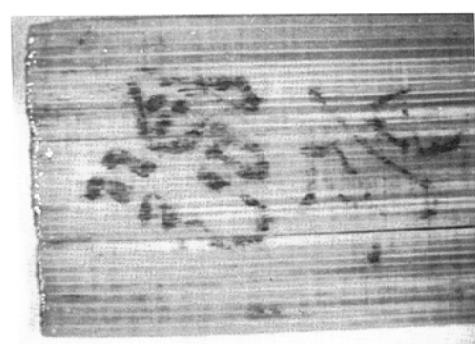
19-3(部分)



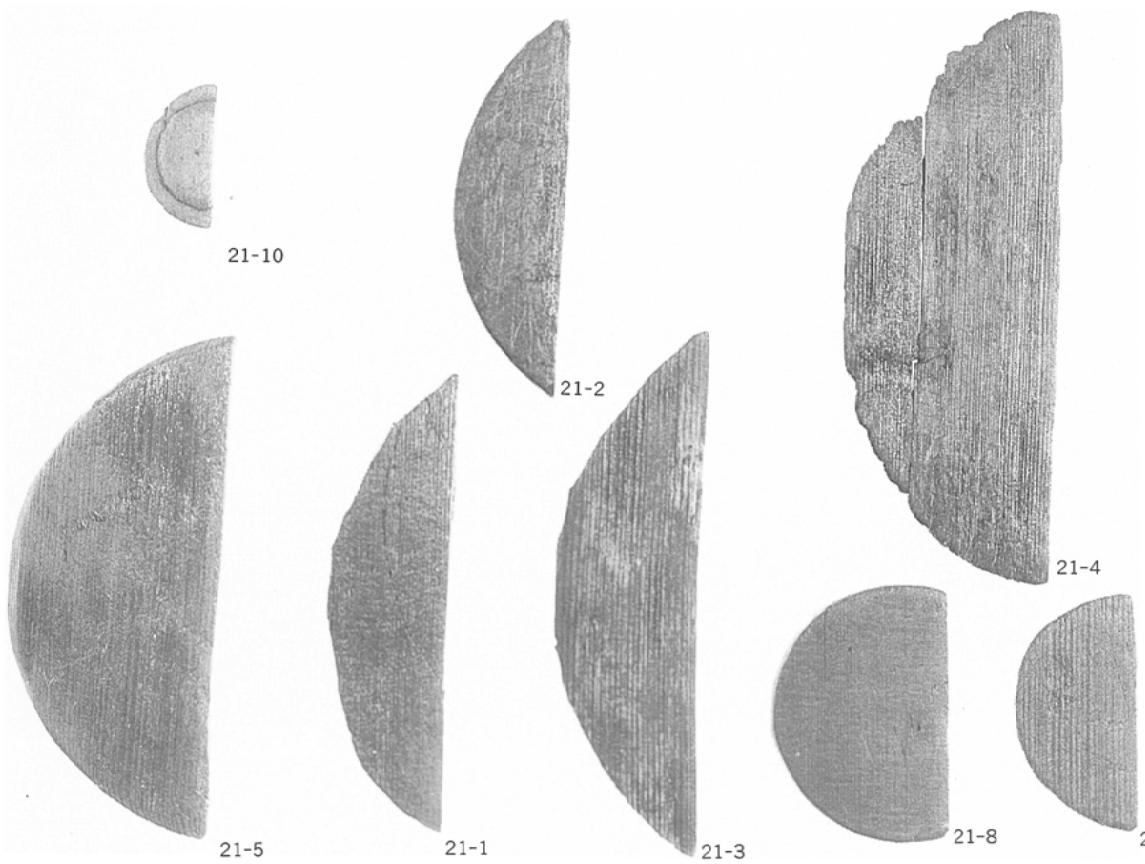
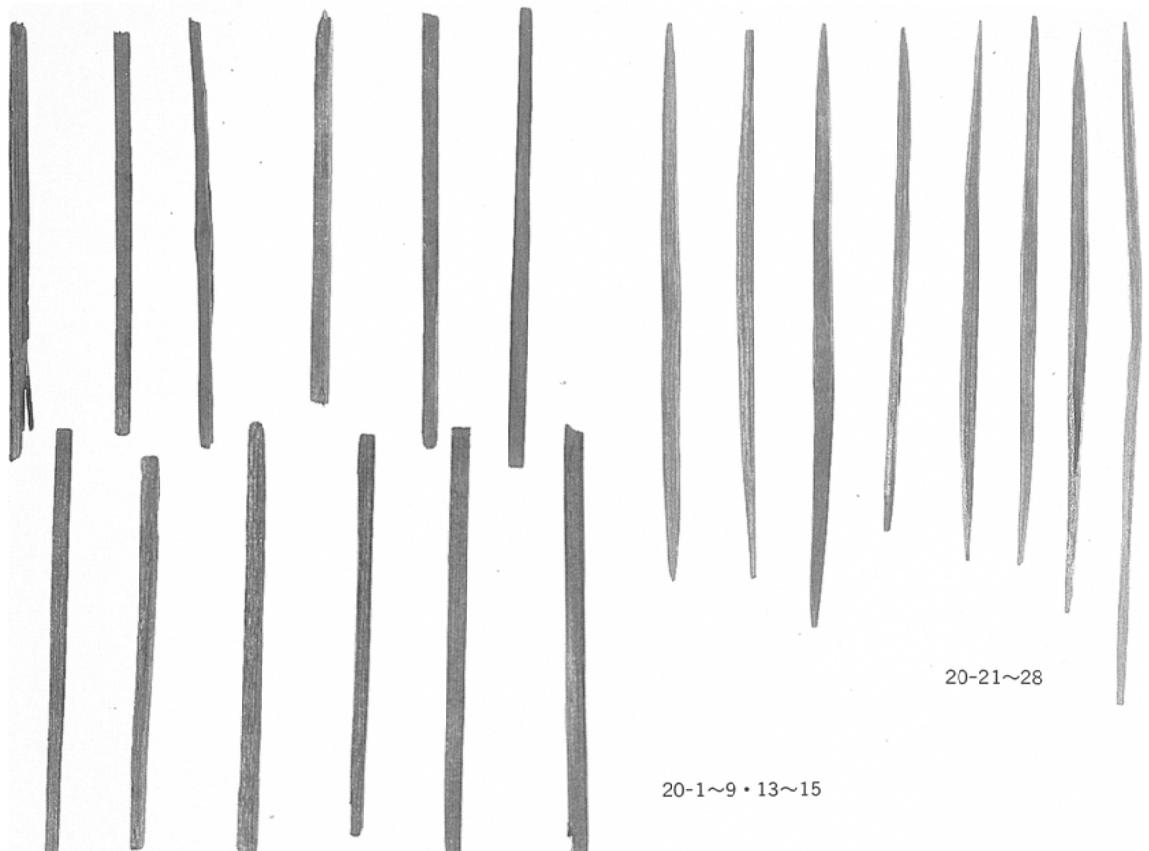
19-7

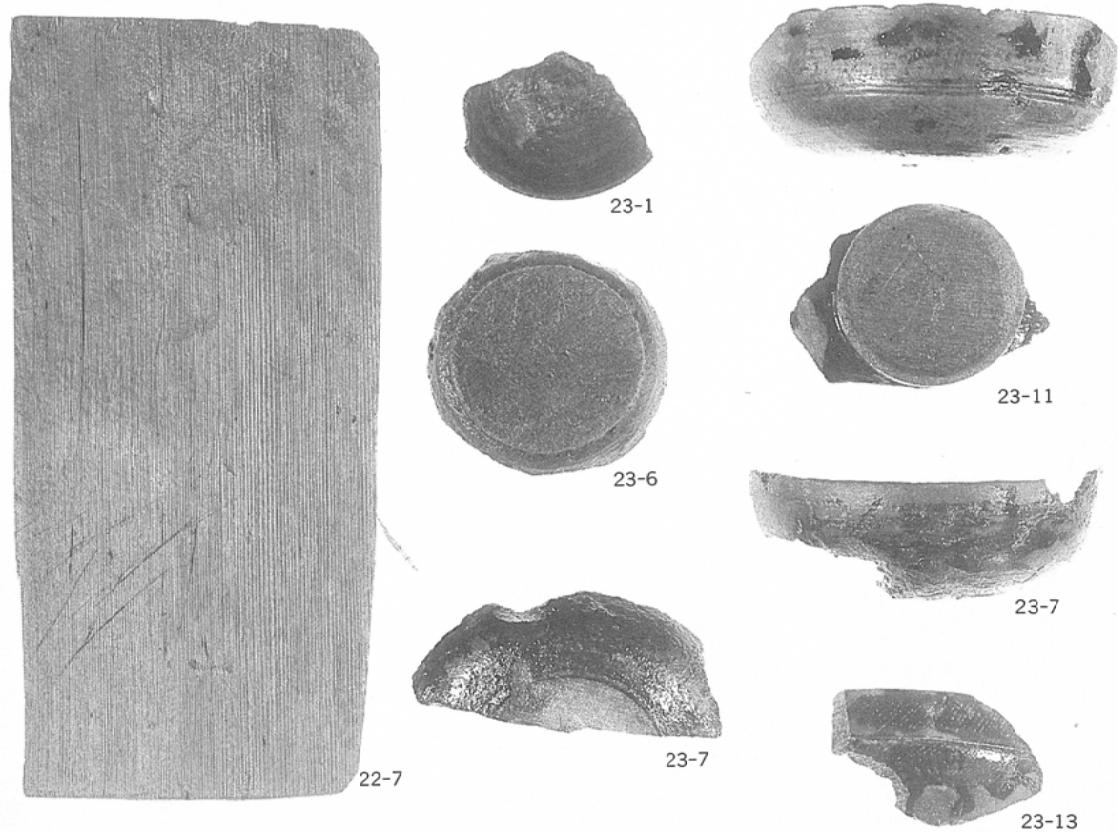
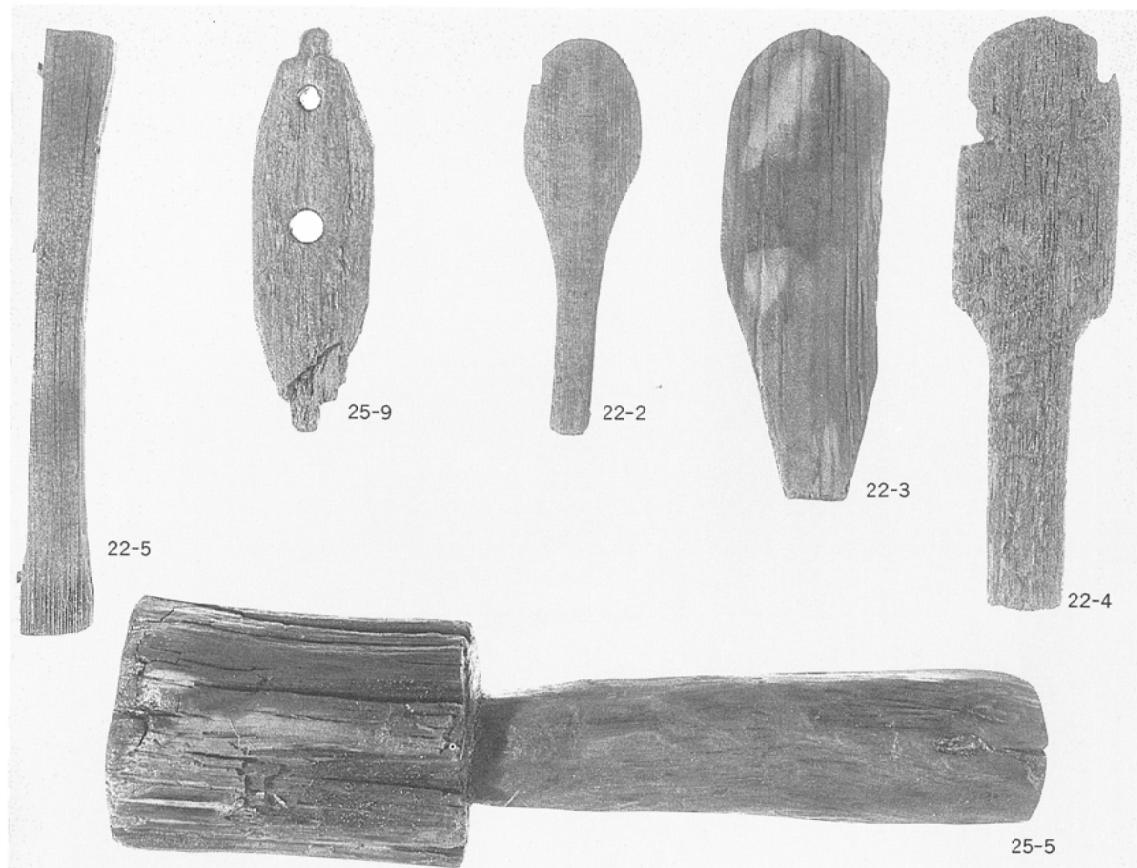


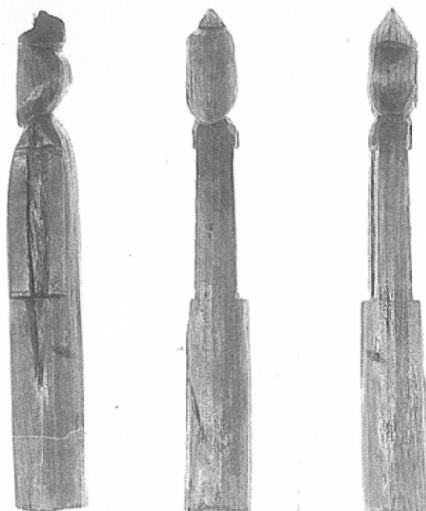
19-3(部分)



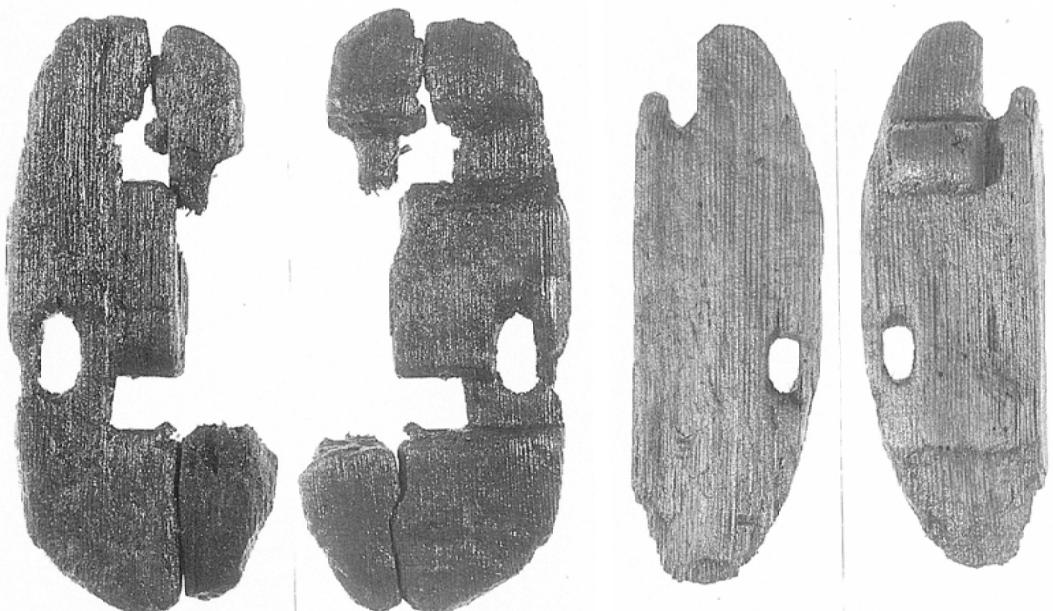
19-3(部分)





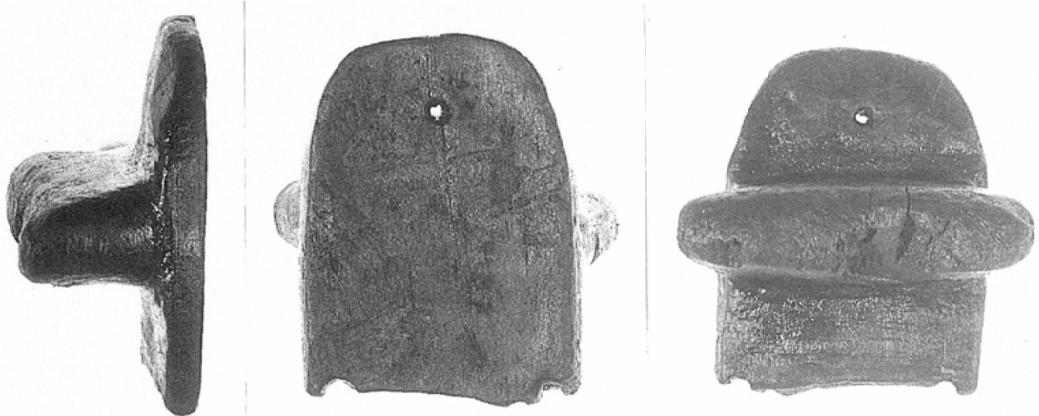


23-14



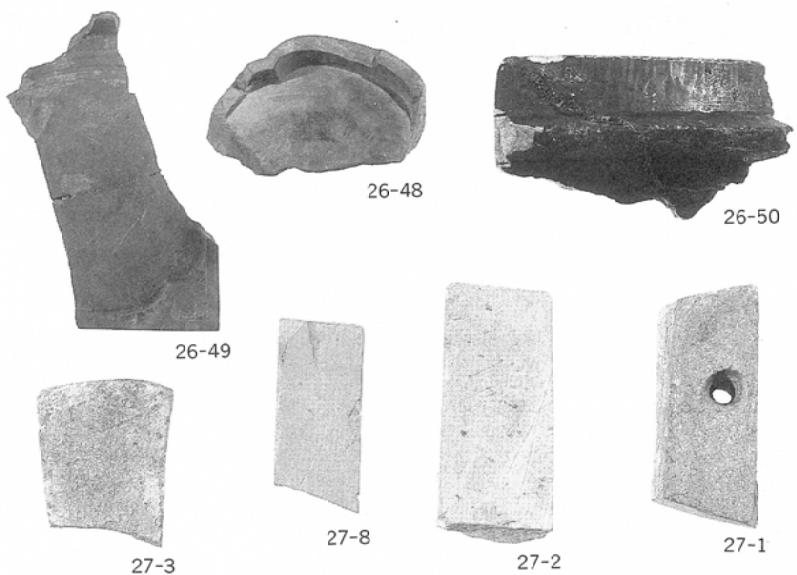
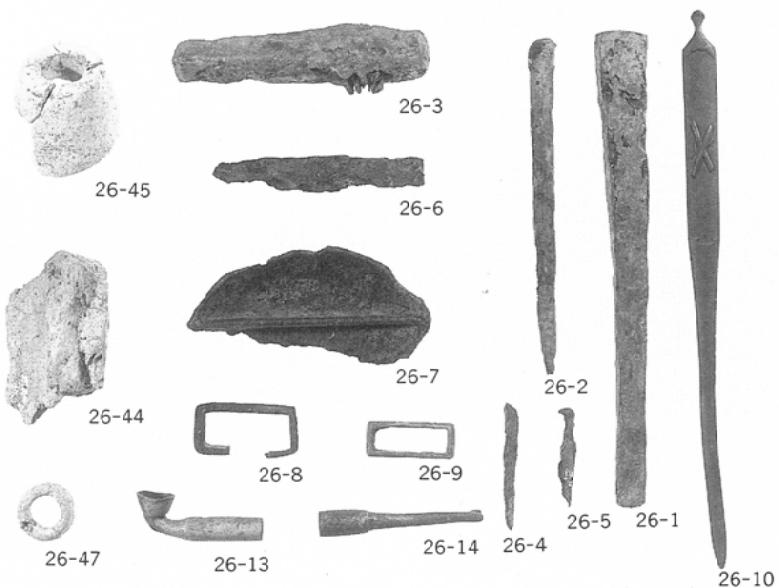
24-1

24-2



24-3

図版19 金属製品・石製品



---

山形県埋蔵文化財調査報告書第121集

おお だて  
大 横 遺 跡

第1次発掘調査報告書

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社大風印刷

---